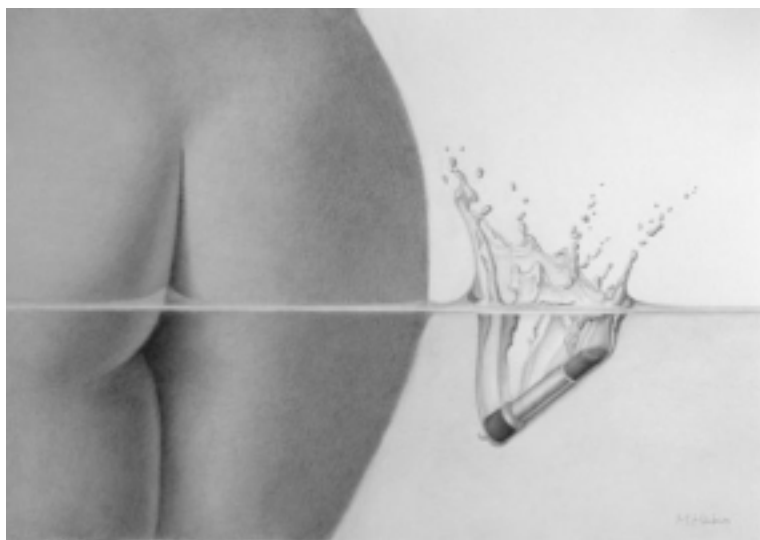


季刊 新世紀

2002 秋季 3号



新世紀出版会

目次

I 文藝評論

千年の記憶―叙事詩・玄海灘

金学鉉 6

短歌の技法

藤井陽一 34

II 随想

寮歌について

中野武彦 44

八ム道楽四十年

中出真澄 48

日暮里割烹醉之助にて

渡名喜彦 51

弾かない音

寺沢京子 53

石橋殿の春秋(三)

永井ますみ 55

東西医学の接点

平川敬二 57

III 小説・自分史

部屋

杉山武子

68

影武者

外岡立人

78

執筆者紹介

編集部

105

編集後記

編集子

106

I

文藝評論

千年の記憶―叙事詩・玄海灘

金学鉉

第五章 流民・受難の時代

おれは行く行く おまえをあとに おれは行く
しばし、意思を得たのだ 揺れるこの時運が
おれの背を押しだし おまえに別れを告げさせるが
永久に行くのではないのだ おれの愛する韓半島よ

おれは行く行く おまえをあとに おれは行く
いま おまえと別れたあと 太平洋と大西洋を
越えることもあるう、シベリヤ 満州の野を
さまようこともあるう、わが身は浮き草のように
いずこへ行こうとも おまえを忘れはしまい
おまえも おれを思え わが愛する韓半島よ

おれは行く行く おまえあとに おれは行く
別れのいまは 徒手空拳の身だが 成功するとき
旗を掲げて 帰るつもりだ、悪風 暴雨激しいが
後日、ふたたび会い見よう わが愛する韓半島よ

(安 昌浩「去国歌」一九一〇年 原文韓国語)
貧しいなりに、青い空の下、一家団欒の生を送っていた。

国を奪われ、名前すら奪われ、生きるのが苦しくて、国を奪った国へ渡り、生きなければならなかった時代、おれの生の糧を選ぶ余裕もなく、手あたり次第、何でも受け入れた長い歲月。強制的に連行され、炭鉱の地下深く、真っ黒になって働く少年の叫び声は、坑道の中に弱くこだました。岩壁に刻まれた乱れた文字、「お母さん、おなか空いたよ」、この文字はぶざまな祖国への訴えであったのか。

在日朝鮮人は一九一一年末には、約二千五百人に過ぎなかった。日本の土地略奪政策の実施による農民の零落と、日本資本の労働力需要の増大によって、一九二〇年には三万人を超えた。一九一九年の三・一独立運動後は一時、日本への渡航が抑制されたが、三〇年末には三十万人に達した。そして一九三七年、日本帝国が本格的に中国侵略戦争へと突入して以来、労働力と軍の要員を補充するため国策として朝鮮人、中国人を日本内地、サハリンおよび南方各地に強制連行して行つた。そして、中日戦争が激しくなると、三八年には国家総動員法、三九年には国民徴用令が公布され、朝鮮においても軍需物資、労働力の動員が国家権力によって強制的に施行された。

その結果、一九四五年八月まで、炭鉱、金属鉱山、軍需工場、土建業、港湾、運輸などの現場に、およそ百五十万人が連行され、強制労働に使役された。日本在留朝鮮人は、三九年のおよそ九十万人から四五年には、およそ二百六十万人に達していた。

解放前の在日朝鮮人の職業は道路、鉄道、河川、発電所工事などの土木工事が大部分を占めており、工場労働者も収拾工、雑役労働者がおもであった。賃金は民族的差別によって日本人の約半額であったし、住宅も都会では貸家も得られず、都市の周辺や、川べりにあるバラック小屋の労働者合宿所、あるいは工場地帯の貧民長屋で風雨をしのぐ生活であった。どうしようもない屈辱に耐え、不安定で貧しい生を強いられた。労働者の強制連行過程においては、日本官憲は動員計画を達成するため、深い眠りについた深夜か早朝を狙って、男手のいる家を突然襲うか、あるいは田畑で働いているときトラックを着けて、無理やり連れて行った。そして、集団を編成しては北海道や九州の炭鉱へ送りこんだのである。また女性には、女子愛国奉仕隊とか女子挺身隊として連行され、各地の前線で従軍慰安婦としてあつかわれた。当時、日本軍二九人に慰安婦一人が当てられたというので、彼女たちは「にくいち」（二九一）と呼ばれたという。

玄海灘

月夜に 玄海灘を越えながら
甲板の上に立って海を見下ろすと

何年かまえ この海の魚腹に命をあたえた
若い男女の顔が 幻灯のように浮かんでくる
貴重な懊悩に 白蟻のように蒼白なインテリの顔
虚栄にやつれた 女流芸術家の乱れた髪
たがいに抱きしめ 水の上で渦巻いている

海の上を風がざわめき 波は荒い
憂国志士のため息は あの風に幾度となく触れ
かれらの燃える胸の底で 煮つまった涙は
幾度となく雨に混ざって この海に落ちていったのか
その間、どれほど多くの人が海を渡ったのだろう
人生到るところ青山ありと、新しい土地に向かったのだ

甲板の上に立つと 憂いに沈み
船室に下りると 漫然渡航の白衣の群れ
足の指を無理やり分け 足袋をはき
まげを切ったあとに 帽子をかぶったさま
食べ残りのベントウを のそのそとはいながら
子犬のようになめまわす 幼い子ら

同胞のさま まともに見られず
ふたたび 甲板にかけあがり

波の中に視線を鎮め　しょんぼり立つと
月の光りに　明鏡のよな玄海灘の海面に
朝鮮の顔が浮び上がる！

あまりにもくつきりと　朝鮮の顔が浮び上がる
目のやりばがなく、こころ寄せるところがなく
夜がふけるまで　空の星を数える

（沈　熏「玄海灘」一九二六年　原文韓国語）
日本で暮らすということ

「日本で暮らすということ」、それは大変苦しいことでした。死ぬほど骨身を削って働いても、受ける賃金は日本人労働者の半分にも満たなく、その上に冷たい軽蔑の眼差し、「鮮人のバカタレ」という言葉がついてまわりました。これは昔の話です。しかし、それほど遠い昔の出来事ではないのです。はたして、二十一世紀の今日、日本人の心根がまったく変わったと、断言できるでしょうか。自分の国をまともに守りきれなかったことが、間違いであったといえ、それはもう言う言葉もありません。力が足りず、智慧がまわらず、国を奪われたのが間違いだといってしまう、何をかいわんやです。しかし、いかなる場合でも奪った側、すばしこく、力の強い側にやられることは、当然だという論理が正当だとは思いません。だが、かつての日本民衆はそうだと信じて、国が強いということが、さも自分の力のゆえであるかのように思い込み、鼻高高であったのです。民衆というものは、つねに、力のあるものに従うものなので

しょうか。でなければ、本当に国の将来を考え、歴史を変えていく存在なのでしょう。底辺層の人たちは、同じ境遇の人たちとたがいに親しむ存在であるという言葉は、この日本では通じない言葉なのでしょう。

一九三九年に芥川賞候補作に上がった朝鮮人作家金史良は、その候補作「光りの中に」で次のように書いている。「卑屈になるまい、なるまいとどうして僕はいつもいきまいていなければならぬんだ。それがかえてひくつの泥沼に足をつつ込み始めた証拠ではないか。だから私はこの地で朝鮮人であることを意識する時は、いつも武装していなければならなかった。そつだ、確かに私は今自分一人の泥仕合につかれている。」

ある日本人農民作家の話

「当時、村の人たちが恐がっていた朝鮮人土工の仲間にはいつて、しゃにむに重労働したら日給八十銭になった。嬉しがったですね。なにしろ背丈も伸び切っていないチビの俺が屈強の土方連中と一緒に仕事するんだから、そりや大変だ。土砂崩れで生理めになつて窒息しかけていたのを朝鮮人が掘り出してくれたんだ。気がついたあとで、この人たちこそ俺のホントの仲間だという気がしましたよ。言葉はほとんど通じないんだ。だけど、倒れたトロッコを起こしてくれたり、弁当のオカズをやりとりしたりしてね、人間同士、笑い顔で気持がわかるもんだ、言葉より一緒に働くことが一番なんですよ。」

ところで自家ではこの辺で一番はやく耕牛を入れたんですが、それが鮮牛つまり朝鮮牛だった。でも二十円以上したから親戚と共同で買った。今のお力ネにして三十万円位の感じかな。この牛たるや、まことに枯枝を風呂敷に包んだような痩せ牛なんでね。村の人たちは、『朝鮮牛はもともと太るもんじゃねえ』なんて言っていた。『朝鮮牛は痩せてるもんなんだ、なぜって朝鮮牛なんだからな』って。

こういう考え方は、人間についても、その職業についても、いまだになくならない根の深い偏見だと私は思うんですよ。一九一九（大正八）年にベルサイユ講和条約成立、朝鮮で独立万歳を叫ぶ『万歳事件』が起きて何千人もの血が流されたことも知ってたよ。そうそう、『不逞鮮人』という言葉があった。植民地政策に不平をいう朝鮮人を当局がそう呼んだんだ。悲しいかな、この感覚が民衆のレベルにまであったことは言っておかないといけない。大震災のときの朝鮮人大虐殺はその証拠ですよ。何千人もの朝鮮人を自警団や何かが殺した。自警団なんていったって、要するに隣のおじさんや兄ちゃんがやったんだ。社会主義者や朝鮮人を警戒して、当局がどこから出た流言をながしたのに民衆が乗ったにしても、日本の社会には恐ろしい体質がある、少年ながら私はまざまざとそれを感じたし、その感じは今も……」

（渋谷定輔『農民哀史から六十年』 岩波新書）

朝鮮人女工のたたかい

一八九〇年に設立された岸和田紡績会社は、一九一八年三月から朝鮮人女工を募集し、雇用しはじめた。そして、結果がよかったので、毎年募集し続け、年間およそ二千五百人の女工が岸和田紡績で働いた。多くの朝鮮人女工が日本の紡績に雇用されはじめたのは第一次世界大戦の結果、日本国内の労働力不足と密接な関係をもっている。世界大戦は日本に空前絶後の好況をもたらした。大戦によって欧米の商品がアジア市場から撤退したあとは、日本商品の独り舞台であった。それに、連合国側に武器や軍需品を供給して、生産力は飛躍的に増加した。その結果、国内の労働力が不足し、日本産業の労働力供給源であった農村の余剰労働力をすべて吸い上げて、大戦景気にわく鉦工業の労働力需要を補うことは出来なかった。ここで、岸和田紡績では植民地朝鮮の労働力に目をつけ、低賃金で使える朝鮮人女工を募集し、雇用しはじめたのである。

朝鮮総督府が作成した『阪神・京浜の朝鮮人労働者』によると、岸和田紡績の各工場朝鮮人労働者の数は、一九二四年三月現在、朝鮮人女工七百二十六人、男子職工が六一人で合計七百八七人となっている。そして一九二八年には、同紡績の三つの工場で、八百二五人の朝鮮人職工が働いていた。岸和田紡績の全工場労働者六千余人で、そのうちおよそ二〇パーセントが朝鮮人労働者で占められていたという。そのため人々は岸和田紡績をさして「朝鮮紡績」と呼んでいた。朝鮮で募集してきた女工は、過酷な労働条件と労働環境によって、六ヶ月の間に半分に減ってしまい、一

年以上定着する人は二十パーセント以下であったというから、年間数にすれば、統計数字にあらわれる三倍近い女工が働いていたことになる。この計算で一年間におよそ二千五百人の朝鮮人女工が働いたと概算しても、一九一八年から約二十年間に延人数およそ五万余人の朝鮮人女工が岸和田紡績で働いたことになる。

朝鮮からの渡航旅費と障害、疾病などすべてが女工の自己負担であり、旅費さえ捻出できず、賃金の前払いとしてその金銭を支出した。就業前から借金をしたことになり、奴隷の身柄と同様であった。岸和田紡績での朝鮮人女工の労働時間は、一日十二時間労働二交替制であったが、交替要員の女工がいけないときは、十四時間、十六時間と働かされた。女工寄宿舎の食費、風呂代、寝具代その他日常生活費すべてが自己負担であった。人身売買のような労働契約書に、文字がわからず内容も確認できないまま、はんこを押ししたのであった。

工場の周辺は壁で囲まれて、壁の上には鉄条網がついて、逃げられないように仕掛けがしてあった。寄宿舎の部屋は二人で一枚のフトンで、夜勤の女工が帰って来て、昼勤の女工が寝ていた汚い布団にもぐりこんで、そのまま寝るといった万年床であった。臭いがひどくその上、のみ、しらみ、南京虫が大量発生し、体は赤く腫れ上がった。食事のおかずは、腐った魚の頭や、いわし、鯖などの尻尾しか出してくれないし、千切り大根をうすあげと一緒に煮たものを、小さなお皿に入れてくれた。朝鮮人女工は何でもよく

食うというので、紡績の「朝鮮豚」と呼び、大阪湾でいわしが大量に獲れると「紡績の女工に食わせろ」といった。

賃金は当然のことながら日本人職工とは差があり、朝鮮人女工には機械の状態が悪い機械が配当され、糸をよく切る女工には特に悪い機械をあたえ、成績がよくないとして賃金を削られ、「能率の悪い女工」といって監督に叱られ、殴られ、首を切られた。不潔な寄宿舎に苛酷な労働、ひどい食事にお腹を抱えて、若い女工たちは結核にかかり、寄宿舎の隅の隔離された部屋で、父母兄弟にも会うことなく死んで行った。

当時、工場監督には会社側に忠実な朝鮮人監督がいて、日本人監督に劣らず、女工を残忍にあつかった。彼らはほとんどが会社の手先であった「相愛会」の会員であるか、或いは役員たちであった。相愛会は在日朝鮮人の急激な増加に対応して、朝鮮人を日本に融和させるための目的で結成された親日団体で、会員は在日朝鮮人によって構成されていた。この団体は一九二〇年（大正九年）に日本支配層の支持の下、朴春琴らによって東京で結成された。その後、日本各地に支部が出来、活動を広げて行った。一九二三年の関東大震災当時、多くの朝鮮人が虐殺されたとき、その後始末にも相愛会が動員された。相愛会は三百人の労働奉仕隊を組織して治安当局に協力し、虐殺された朝鮮人の死体処理や被災朝鮮人を収容するなどした。そして、その「功績」が認められ、一九二八年に財団法人になり、朝鮮総督府の前警務総監だった丸山鶴吉を理事長に迎えた。

相愛会の会則には在日朝鮮人労働者のために日本人との間に「人類相愛の精神に基き、共存共栄の本義に立脚して」民族的差別観念を撤廃して日鮮融和の徹底をなし、「朝鮮労働者のため精神的教化や経済的救済を図る」とし、事業としては朝鮮人労働者の共同宿泊、職業紹介、人事相談、労働者教育を行なうとある。しかし実際には徹底して朝鮮人対策の道具として利用された。そして相愛会は、一九三八年に各地にあつた親日団体を統合した「協和会」の中心勢力になつていった。協和会は、日本内務省、警察当局が中心になつて発足した在日朝鮮人に対する統制機関であつた。在日朝鮮人を第二次世界大戦の人的資源として利用する動員計画の推進に活動し、特高警察、憲兵の手先の役割をし、在日朝鮮人を抑圧し、監視した。そして内鮮一体を掲げ、神社参拝、日本の着物着用、創氏改名、献金、徴用などを強要した。中央協和会は日本厚生省の管轄下にあつた。

国を奪われることは 衣食住の三権を失うということ
 国を奪われることは 言葉と文字と歌を失うということ
 国を奪われることは 人間性が失われ骸になるということ
 国を奪われることは 民族の魂が虚空をさまよふということ
 と

あまりにも厳しい労働条件に疲れはてた朝鮮人女工が、寄宿舎から逃亡するという事件が頻繁に起こつた。疲れて機械の前で居眠りしながらの労働、監督に殴られ、自由に

外出も出来ず、寄宿舎に閉じ込められる生活、どうにも耐えられず逃亡しようとする女工の前に立ちはだかる、鉄条網で張り巡らされた城壁のような高い壁、捕まれる日には日本人監督より恐い朝鮮人監督、相愛会事務所に通れ込まれ、リンチが加えられた。こうなると同じ民族も何もなかつた。これだけではない。あらゆる在日朝鮮人の生活現場で、日帝の手先が跳躍した。彼らは女工たちから相愛会会費を毎月取り立て、結婚させてやるといつては売り物にし、話を聞かないと、殴る蹴るの人身売買のような仕打ちをした。このように相愛会は会社と完全に結託した、親日暴力集団であつた。

一九二九年十月、ニューヨークで始まつた世界大恐慌は、翌年三〇年に日本産業界を直撃した。職場を失つた労働者は街を埋めた。失業者たちが食を求めて街をさまよつたとき、朝鮮人労働者たちもその日の糧を求めて街をさまよつた。国内の景気がわるくなると、賃金が削られ首になるのは、朝鮮人女工の方が日本人女工に比べ、その比重が大きかつた。女工だけでなく、朝鮮人労働者はみな同じ運命に甘んじなければならなかつた。賃金はカットされ、生活苦に疲れた朝鮮人女工たちは動揺しはじめ、次第に日本人職工たちと一緒に闘争する小規模の争議をひろげるようになって行つた。一九三〇年五月三日、岸和田紡績会社の女工約百人(大部分が朝鮮人女工)は工場の裏門を抜け出して労働組合の闘争本部がある場所に向かつた。三〇年五月からはじまつた労働争議は、十月まで続き、日本の労働者たちとともに

箆城闘争をくりひろげ勇敢にたたかった。彼らが会社側に提出した要求書のおもな内容は次のようなものであった。

本年一月二十八日より四月五日迄の四回に亘る賃金値下げを即時撤回されたし。通勤手段、住宅手当を制定されたし。昼食、夕食時に運転を止めて二十分休憩させられたし。寄宿舎の寝具は、夏冬の二通りとされたし。冬季は火鉢を設けられたし。寝具は毎月一回洗濯せられたし。外出、書信、面会を絶対自由とされたし。今後絶対に蚕せざること。

この要求書を見ると会社側の待遇がいかに苛酷なものであったかわかる。しかし会社側はこの要求を完全に無視した。以後、女工たちは日本の労働者たちと連帯して闘争をくりひろげて行く。暴力輩、やくざ、警察を動員した外部の圧力とたたかいながら、ひどい拷問にもめげず、最後まで屈することがなかった。女性労働者と共に朝鮮人女工に加えられた拷問は酷かった。特高の拷問について、当時の『無産者新聞』（一九二七年十一月十日）では、次のように報じていた。

「血に狂える警察等の暴行暴虐は検束中、朝鮮の同胞に對して殊に甚しく『ヨボ』とのしり、『朝鮮人の二人や三人殺してもよいのだ』と暴言を吐いて、打つ、踏む、投げるの暴虐を演じ、一人に対して三人の警官が木剣で散々になぐりつけた。道場では座り方が悪いといういつて木剣で打ち、言葉が通じないのをごまかすのだといつて踏みつけた。野獸のごとき警官は、朝鮮の婦人を裸体にして拷問し、悲鳴をあげると口中に紙または手拭を押し込んで、悲

鳴を上げられないままに拷問したのである」このような酷い拷問や暴行にも朝鮮の女性たちは屈しなかった。日本社会の底辺労働者として長い間、人間性を踏みじられてきた朝鮮人女工たちの自己解放のためのたたかいは、挫折壊滅することなく続いた。激しい弾圧、酷い拷問を受ければつけるほど、人間性を踏みにじる敵に対する憎悪心と怒りはいつそう高まっていった。会社側は雇用した暴力団、相愛会をして箆城中の女工を襲撃させ、女工たちに対する食料供給を断つなどしたが、女工たちは必死の抵抗した。しかし、争議はついに会社側の主張通り収拾され箆城は解散した。

岸和田紡績女工の闘争は世を驚かした。彼女たちは不況による賃金引下げ、操業短縮による生活苦の理由だけで激しくたたかったのではない。とくに朝鮮人女工たちはそれ以上に人間としての尊厳を獲得せんがためのたたかいであった。争議本部に箆城した朝鮮人女工たちは、勇敢で闘争心が旺盛であったばかりでなく、ともにたたかう同志をかばい助けたという。そして争議敗北の報告を受けた日、朝鮮人女工たちは全員赤いリボンをつけたという。争議本部から隊伍を組んで帰る女工達の姿には敗者の暗い、悲しみはなく、勝者のように堂々としていたという。

(参考文献 金贊汀『朝鮮人女工のうた』岩波新書)

日帝下のおもな在日朝鮮人虐殺事件

一九二三年 新潟県、信越電力信濃川発電所工事現場に

おける朝鮮人虐殺事件、死亡者約百人（六千人以上が就業）。
一九三三年 関東大震災朝鮮人大虐殺事件、死亡者約六千四百十五人（震災直後の朝鮮人調査団、金承学調査）。

一九三二年五月 矢作朝鮮人労働者虐殺事件、死亡者死亡者三人、重傷者十八人、軽傷十二人（岩手県国鉄大渡線、線路建設現場の朝鮮人労働者虐殺事件、朝鮮人労働者六、七百人）

一九二五年～四五年八月 治安維持法犠牲者（犠牲者多数、数不明）

一九三九年～四五年八月 朝鮮人強制連行、強制労働連行人員約百五十一万九千四百四十一人（各種統計資料及び証言による）

一九四五年八月 原爆による死亡者、広島約三万人、長崎約一万人（各種統計資料と証言による）

一九四五年八月二四日 舞鶴湾における旧日本海軍輸送船浮島丸朝鮮人爆死事件、死亡者、五百二十四人（日本政府発表）

一九三八年～四五年 朝鮮女性従軍慰安婦六万五千人（千田夏光『従軍慰安婦』による。この中には日本内で強制動員された朝鮮人未婚者も含まれている）

朝鮮人労働者の悲惨な生

「信濃川を頻繁に流れる鮮人の虐殺死体」

一九二二年七月二九日の読売新聞は、新潟県信濃川の支流、中津川岸にある発電所建設工場現場で発生した惨事を

報じた。記事には工事現場の朝鮮人に対する処遇について語った一人の目撃者の証言を載せた。この証言によれば、工事現場で働く労働者は全部で千二百人で、うち朝鮮人は六百人であった。証言によると

朝は四時から夜の八時九時まで、お風呂にも入れてもらえず、牛馬のようにこき使われる。仕事は食事の時間を除いて瞬時も休めず、トロッコ押し、土掘り、爆破、土木・材木運搬までもしなければならず、心臓が弱まるのは当然であった。雪の多い新潟の冬は寒く、夏はまた四方が山に囲まれて酷い暑さであった。最初の約束とは違う苛酷な労働に我慢できず、朝鮮人労働者は逃亡を企てた。逃亡者に対する処罰、それは両手を後ろ手に縛り、三、四人の監視員が（彼らは一名決死隊といつて匕首や短銃を懐に隠し持っていた）杉の木に吊るしては、棍棒で打つ。山の中で逃亡中に殺された朝鮮人労働者の死体が発見される。私が聞いただけでも死因不明の七、八人の死体が川の下流に漂着していた。思うに、仕事をしないといつて虐待され、逃亡を企てて捕まり、拷問を受け死んだのではないか…。

この事件は当時、朝鮮の『東亜日報』にも（一九二二年八月一日）、日本での朝鮮人大虐殺／見よ！ この残忍無道なる惨劇を／一日十七時間の苦役を強制／逃亡すれば銃殺して川に投げ捨てる／毒魔によつて殺害された百余人」と

大きく報道された。同新聞は連載の中で、朝鮮人労働者を「素肌にしてさかさまにつるし、とびくちでひっかけ、血まみれにしたのち塩水をぶっかけ、鉄板に坐らせてそのうえに砂利とセメントをつみあげ、水をかけて凍りつかせ、身体がちぢこまりしびれるようにする」などのリンチを加えたと報じた。そして調査団を日本に派遣することにした。一方、ソウル鍾路の中央青年会館に青年連合会、開闢社、新生活社、朝鮮教育会など、多くの団体有志五〇余人が集まって「新潟県朝鮮人虐殺事件調査会」をつくり、代表を日本に派遣した。日本では、在日朝鮮人らが八月三日および九日に神田の朝鮮キリスト教青年会館に集まって調査会を結成、二〇余人の委員を選出し、金若水が代表になって現地に向かった。そして九月七日、虐殺問題演説会がキリスト教青年会館で開かれ、非人道的な行為に対して報告がなされた。

一九三九年から日本に強制連行された朝鮮人労働者は、嚴重な監視の下、もつとも危険な仕事をさせられた。彼らはガス爆発、落盤等の事故が頻繁に発生する、炭鉱の坑内で働かされた。戦時中は、石炭を多く掘り出すのが至上目標であったので、事故など問題にもならなかった。継続して発生する炭鉱事故の死亡者は、大部分が朝鮮人であった。それに、リンチなどで多くの朝鮮人が死んで行った。もしも反抗したり逃げようとするれば、見せしめにむごいリンチを加え、殺したりした。しかし、こうした状況の中でも朝鮮人労働者はストライキなどして抵抗し、嚴重な監視網を

抜け出して行った。

一九四三年五月、岐阜県三井神岡鉱山で生じた朝鮮人労働者の闘争は熾烈だった。この鉱山で働いていたおよそ五千人の労働者のうち、朝鮮人はおよそ一千三百人で、連合軍捕虜が六百五十人であった。鉱山現場での食事は米一割、麦三割、豆五割程のご飯が茶碗に一杯、ここに水っぽい汁と二切れのタクアンがつく。そこに、干しいわしがつけばいいほうで、つねに飢えたお腹を抱えていなければならなかった。病気になっても仕事は休めなかった。逃亡者は捕まると「おまえら朝鮮人は殺しても罪にならねえや」と、竹刀が折れるまで叩かれた。こうした酷い処遇に怒った朝鮮人労働者はついに立ち上がり起ちあがり、熾烈な闘争をひろげた。

「食事を改善せよ」「リンチを止める」「日本人と同様、坑内から出たら風呂に入れろ」と、当然の要求を迫った。会社側は暴力團、警察を動員して阻止しようとしたが、最後まで抵抗してたたかった朝鮮人たちの要求は受け入れられ、勝利を獲得した。

また九州の麻生炭鉱では、朝鮮人労働者たちが待遇の改善を要求して朝鮮人労働者たちが八月から九月にかけて、二十一日間もストを続けた。朝鮮人労働者たちは旅館を借りてスト本部を設置しようとしたが、「朝鮮人のくせに、会社に不満をもつとはけしからん」と、旅館側は貸してくれなかった。それで神社の境内に天幕を張ろうとしたが「神社が汚れる、朝鮮人は出て行け」と、追い出された。

また北海道夕張市の夕張炭鉱の場合は、悲惨極まりなかった。日本敗戦直前には多くの朝鮮・中国人が坑内作業に従事しており、およそ一万人の朝鮮人労働者が働いていた。

朝鮮人労働者は協和寮という施設に收容されていたが、逃亡を防止するため宿所の壁には鉄条網が張り巡らされていた。労働時間は毎日十時間以上であったし、栄養失調で罹患と病死があいついだ。坑内の爆発事故で多くの死亡者が出ると、火葬場が不足して鉱滓だらけの死体に灯油をぶっかけ焼いてしまった。逃亡者も多かったが成功する確率は低く、捕まる日には半死のうきめにあうリンチが待ち受けていた。そして宿所の隣には朝鮮人女性を集めてつくった鉱夫たちのための「慰安所」が設けられていた。

一九三八年から四五年まで、炭鉱事故による死亡者はおよそ一万二千人で、このうち六千人ないし八千人が朝鮮人労働者であった。そして強制連行された朝鮮人のうち、およそ六万人に達する人が酷使され、リンチを受けたりして死亡した。また、強制連行された中国人およそ五万人中、七千人がいのちを失った。

怨恨つもる地獄部屋

タコ部屋という地獄の合宿所があった

タコを獲るための壺　ここに一度はいれば
逃れられない　炭鉱労働者が住まう飯場で
労賃搾取、日本帝国の下肥となつたところ
タコ部屋は　朝鮮人が死んで行つた地獄部屋

朝鮮人の血で染まらない　工事現場はなく
工事場ごと　恨つもる朝鮮人の生贄が埋もれて

一九三九年から始まつた日帝の朝鮮人強制連行は、連合国に敗北した一九四五年の夏まで続いた。強制的に連行された朝鮮人の血と汗が流れなかつた炭鉱や、建設工事現場はないほど、ほとんど日本全域の各種工事現場には、悲惨な過去が深く埋もれている。各地の名ある炭鉱はいつまでもなく、軍需産業施設の現場、国家的重要施設、土木、道路工事場やダム工事場を問わず、朝鮮人労働者の血が流れ、多くの人がぎびしい労働に疲れはて病にかかつて死んで行った。

東北地方、茨城県、福島県にかけての炭鉱地帯、日立鉱山、常磐炭鉱におよそ二万人の朝鮮人が強制労働に従事し、宮城県内の河川改修工事、鉄道工事、陸海軍の軍事施設工事、「枕木一本に朝鮮人一人」といわれた、宮城県内の仙山線鉄道工事。また、秋田県花岡鉱山では中国人労働者四百人あまりが虐殺された。西部の九州福岡の筑豊炭鉱、飯塚炭鉱地帯、三井・三池炭鉱、土建に動員された朝鮮人労働者は、およそ五十万人に達した。

北海道の美唄炭鉱では、およそ七千人あまりの朝鮮人労働者が押し込められていたタコ部屋では、酷い虐待と飢えをしのぎながら、真っ黒になつて暮らしていた。逃亡のため鉄道のレールに指を置いてつぶし、病院へ駆け込んだりした。逃げる途中捕まつて死ぬほど殴られ、背骨が折れた。トロッコが暴走し朝鮮人労働者が岩壁に押しつぶ

されたが、側にいた日本人労務監督はバカヤロー呼ばわりし、救おうともしなかった。後で引っぱり出してみるとすでに死んでいた。日本人鉱夫が負傷すると、直ちにタンカにのせ救出するが、朝鮮人の場合は、出血多量で死ぬ例が多かった。このほか、北海の千島列島やサハリンの重要塞、飛行場建設工事、道路工事に多数の朝鮮人が連行され、多くの犠牲者を出し、千島列島で五千余人、ウルツブ島では二千五百人あまりが死亡したという。

危険な作業はすべて朝鮮人労働者が引き受けた。岡山県倉敷市の水島航空機製作所では、一九四四におよそ二千人の朝鮮人労働者が働いており、落盤事故で死ぬ人があいついだ。また、兵庫県尼崎の軍需工場、日亜製鋼所には一九四三年から強制連行者およそ千人が、堀の中で毎日のように軍事訓練をし、食事は雑穀飯に「シヨンベン汁」と呼ばれた海藻の塩汁、昼と夜はかぼちゃであった。

また、岐阜県各務原の飛行機工場では、戦争末期に千八百人の朝鮮人が強制労働につき、毎朝「君が代」に「皇国臣民の誓い」を斉唱し、裸足で働いたので凍傷にかかり、足指がくずれる者が続出した。また、長野県天龍村の平岡発電所工事には、およそ二千人の朝鮮人労働者が強制労働に狩り出された。あまりにもつらい仕事に耐えられず逃亡を企て、捕まると木刀で袋たたきにあい、ダイナマイト爆破作業など危険な作業はすべてやらされ、腕が吹っ飛び、或いは死ぬ人もいた。

また、宮城県多賀城の海軍工廠工事は埋立て、道路、線

路工事が行なわれ、そのタコ部屋には労働者の逃亡監視に秋田犬が見張っており、死亡者が多く出、夕方になると死体を馬車に載せて火葬場裏の畑に埋めた。工場近くの橋の橋脚をつくるときは二、三人の朝鮮人が生け贄になったという。しかし、これらの資料はみな焼かれてしまい、生き残った人の証言だけが真実を知らせてくれる。

また、栃木県の足尾銅山では、一九四〇年から朝鮮人が連行されて働かされたが、四五年には一千人あまりが働いた。苛酷な労働に耐え切れず山の中へ逃亡すれば、必ず捕えられた。民家からはるか離れた禿山の高いところに宿所があつて、逃亡は思いもつかなかった。腐ったジャガイモを拾って食い、栄養失調で倒れてゆく者が多く、大根のように伸びきった死体がよくリアカーで運び出された。また、病気がかかって働けない労働者を電信柱にくくりつけて、打つ、凄惨な光景をも目にもすることもあつた。さらに、納鋳場の側に連れて行って鞭で打ち下ろす。ここには一九四四年に中国人労働者も二百五十七人が連行されて働かされ、栄養不足で百九人が死亡した。

大阪地方の強制連行関連企業

大阪枚方市の陸軍造兵廠工場にはおよそ三千人の朝鮮人労働者が、同市大正区の日本製鉄大阪工場には四五年の敗戦当時、五千五百五十五人が酷使された。

また、大阪市淀川製鋼所には、十代二十代の朝鮮人青少年たちが、多いときは五百人あまりが働かされた。彼らは

八時間から十二時間働かされ、民族的差別賃金、劣悪な食事に泣かされた。

また、大阪市大阪市西成区の大和製鋼所には、四三年から四四年までおよそ五百人が、大正区の久保田製鉄所には、四四年に二八四人が、此花区の日立造船桜島工場には、朝鮮の北部地方から二十代青年三、四百人をはじめ、朝鮮人労働者千数百人が連行されて来た。

大阪港史（第三巻、一九六四年）によると、敗戦当時、日本全国の港湾方面で従事した朝鮮人労働者は三十三万に達している。この数字は朝鮮人の自由労働者も含まれていると見られるが、当時の在日朝鮮人がおよそ二百四十万人であったことから、注目される数字である。強制連行による朝鮮人労働者は一九四四年十月まで、十二の港に配属が完了し、大阪港には港湾労働に四百人、倉庫貨物に五十人が配属された。このほかに大阪府内の各飛行場、軍の地下魚雷格納庫、航空機製作所、各種兵器工場等に連行された朝鮮人労働者が働いていた。

もしもその日 田んぼを歩いてさえいなかったら
もしもその日 畑で仕事をしてさえいなかったら
もしもその日 隣へ遊びに行き家に居なかつたら
奴隷狩りにあわず 一家団欒で 暮らせたものを

一九四〇年代、百万人以上の朝鮮人強制連行が相次ぎ
一九八〇年代、北に拉致された十数人の日本女性がい

強制連行は正当な公権にて、拉致は犯罪行為であるゆえ
ああ、玄海の荒波 逆巻き怒る 歴史のアイロニーよ

敗戦後五十五年が過ぎた二一年三月二七日、大阪地方裁判所で朝鮮人強制労働の未払い賃金訴訟に対する判決があった。一点の人間愛のかけらも見えない非人道的判決であった。いまだに過去の罪悪を清算できず、ずるずると引きずっている経済大国日本の実態が如実に映る。報道によると、

戦時中、新日鉄の前身である旧日本製鉄の大阪製鐵所で、強制労働されたとして、前徴用工呂運澤氏（七七歳）と申千洙氏（七四歳）が新日鉄と日本国を相手に、未払い賃金と慰籍料など、総額三千八百万円の支払いと謝罪を要求した訴訟で、大阪地方裁判所は二七日、請求をすべて棄却する判決を言い渡した。岡原裁判長は、旧憲法下の国の行為による個人の損失に対して国は賠償責任を負わないとして、国に対する請求権の存在を否定した。新日鉄に対しても、日本製鉄が戦後四つの会社に解散し、そのうちの二つの会社が合併して出来た新日鉄は、この種の債務を継承していないとした。一方で、判決は原告二人の就労状況について、賃金を受け取れず、自由を奪われた状態で一日十二時間、危険で苛酷な労働に使役されたとし、違法な強制労働であったことを認めた。戦後日本製鉄等は政府の指導の下に企業に対する賠償要求を拒絶するため、未払い賃金を法務局に供託した。日本製

鉄が原告の未払い賃金として供託した、およそ九百六十円について判決は、正確な金額とは考えられず、供託は無効であり、本来の債務は消滅しない、とした。

(朝日新聞 二〇〇一年三月二八日)

松代大本営工事の朝鮮人労働者

第二次世界大戦末期、日本軍部が本土決戦に備え、天皇の居住地をはじめ戦争の最高指揮軍団である参謀本部、政府の諸機関、＼HKなど、東京にある日本の中枢部分をすべて避難させる計画の下、進められた工事が松代大本営工事である。現在の長野県松代町にある皆神山、舞鶴山、象山の三山の地下に、暮盤の目のような洞窟を掘る巨大な工事であった。この地下壕の長さを合わせると約十三キロで、一九四五年の敗戦直前まで掘られた長さである。熱海と函南間の丹那トンネルの倍近い距離で、丹那トンネルが十六年かけてやっと完成したが、十ヶ月程度で完成させようとした無謀な計画であった。この洞窟の先端を掘る苦しい労働を強制されたのが、六千人あまりの朝鮮人労働者であった。当然犠牲者も多かった。最近(一九九一年)、工事関係者口から死亡者は三百人程度にはなるだろうという証言があった。

一九四四年十一月、工事が始まる頃を前後して、続々朝鮮から強制連行されて来た朝鮮人が松代へ運搬され始めた。人を人と思わぬ方法で徴用した。各地のダム工事場や鉄道

工事などで働いていた朝鮮人労働者に対しても、建設会社ぐるみ動員する準備態勢が整った。当時諜報兵として朝鮮人労働者を松代まで運んだN氏は語っている。

「東京の貨物専用駅であった汐留駅から、軍用列車に黒いシートですっぽり被せて、軍需物資に見せかけた朝鮮人を載せ、松代まで連れて行くのが私の任務であった。騒ぐと困る、貨物が話をするとおかしいですから。足は鎖でつながれ、ろくに用もたせないような残酷なやり方でした。畑で仕事中にいきなり引つ張られてトラックで連行された、着の身着のままの人もいました。何も持ち物はなく、可愛そうでした。まったくの軍事物資扱いでした。憲兵が自動小銃を肩にしており脱走でもすれば拳銃では対応できないので、殺してもかまわないというのでしょ。」

一九四五年三月の初めだった。すでに労働者は憲兵によって徴集されていた。

「急ぎよ。朝鮮から人夫を集めたのだと思った。約二千人を長野に運送することになったが、一度には無理なので分けて運ぶことにした。貨車十両に千人程度を載せ、憲兵約五〇人が乗って行く途中、空襲警報で五度ほど停車したが、八時間ほどで松代に到着した。駅前にはすでにトラックが列を血をなして待機しており、トラックにぎっしり詰め、人の眼につかないように覆いで囲んだ。今でもはつきり覚えている。そして天皇の住居になる工事場の入り口まで連れて行った。前から働かされていた朝鮮人労働者は壕の外に作られた工事場で食事をしたが、後に引つ張られてきた人

たちは、洞窟の中に閉じ込められたまま、生活するように
なった」

崔小岩氏の証言

今は故人となった氏は、日本第一の防空壕工事があるとい
うので、一九四四年十月三十日に松代へやって来た。彼
は大坂、仙台、塩釜、静岡など、あちらこちらと放浪しなが
らどうにか食にありついて来たが、「松代に来てみると副食
などはなく、ご飯といつてもきびが七割に米が三割であつ
た。地下足袋も半日でがたが来、配給は月に一度ほど、足
元にはかみそりの刃のような石の破片が敷かれてある。裸
足で働くわけにもいかず、逃亡も企てたが、警戒が厳しく、
一度入ってきたら最後、絶対に外へは出られなかった」と
語っていた。

崔氏は十七歳のとき日本へ渡って来た。「まだ乳飲み子の
ような、幼い子どもまで渡って来ましたよ。私が居た工事
場にもそんな若い者が来ていました。日本で働けばお金も
くれ、勉強もさせてやるというので、ところが船に乗って
日本に着き、汽車に乗るや窓は黒いカーテンで覆い、開け
てはいけない、話をしてはいけないと。そして親戚の住所
や、少ない所持金など一切財奪ってしまつた。だまされ
て工事場に引つ張られてきた子どもたちがあまりにもかわ
いそう、何とかして逃してやろうとしたが、一人だけ逃
してやれました」

歳月は流れた。崔氏は生前「自分が生まれた国だから帰

りたいですが、しかし、ここで死んで行った人のことを考
えるとき、戦争が終る直前、明後日会おうと約束した人が、
時間になつても現れないんです。天皇の居住地の工事場で
働いていたんですが、どこに引つ張られて行ったのやら、死
んで行った同僚の行方も知らないまま、一人で帰れないん
です」と話していた。一九九一年三月十七日、崔氏はこの
世を去つた。肺には小さな破片が食い込んでいた。

いろいろな資料によると、松代に動員された朝鮮人労働
者の数は七千人から一万三千人と推定される。松代の三個
地区におよそ二千人からなる班が三十五班あつたといふ。
そして多くの人の証言によると、多い日には一日五、六人
が死んでゆき、一日たりとも死なない日はなかつたといふ。
だが、いままでその正確な数は明らかにされていない。

日本防衛庁に保管されてある資料に次のような論文が
ある。

「出生軍人に対して性欲を長い期間抑制すると、自然
に支那(中国)婦人に対して暴行をするようになる、兵
站では気を使い、その主たる目的は、性の満足によつ
て将兵の気分を落ち着かせ、皇軍の威厳を毀損させる強
姦を防止するためであつた。軍当局は軍人の性欲を抑圧
することは不可能だとして、支那婦人を強姦出来ないよ
うに慰安所を設け、将校は率先して慰安所に行き、士
兵に対してもこれを奨め、慰安所は公用として定められ
ていた。慰安所に行けない兵隊は馬鹿だと怒鳴る将校も

いた」(「戦場における特殊現象とその対策」)。松代大本営工事場近くにも「朝鮮人慰安婦の家」が、十五個所設けられたあつた。

天皇が主導した大本営

松代大本営工事は、陸軍あるいは海軍の司令部としての通称「大本営」ではない、御前会議あるいは最高戦争指導会議としての「大本営」で、一九三七年二月十一日から四年九月十三日まで、宮城内に設置されていたものを松代に移す工事であつた。単純な陸海軍部の移転ではない、敗戦直前の日本天皇の緊急避難という目的も兼ねた大工事であつた。

一八九四年の朝鮮における東学農民戦争を契機に、アジア侵略の第一歩となつた日清戦争で勝利した日本帝国主義の祝賀宴は「広島大本営」で繰り広げられた。半世紀にわたつてアジア侵略の総司令部として天皇の指揮の下、日露戦争、日中戦争、日米戦争と駆けた日帝の巢窟であつた大本営は、開設後五十年目の一九四五年九月十三日、その門を閉じたのである。

「松代大本営工事で朝鮮人労働者が流した血と涙、その死体が混ざつた土砂と岩石がまだ市内のおもな道路の下に眠つており、土砂場には死体がそのまま埋もれてある」という証言も多い。朝鮮人の強制労働によつて建て

られた日本の国会議事堂や大本営のような著名なものばかりでなく、道路も、鉄道も、トンネルも、港湾も飛行場も、工場も、炭鉱も、ダムも、水道施設も、日本の戦後の復興と経済成長を可能ならしめたあらゆるものに、他民族に強要した労働が結晶されている」

(日垣 隆『松代大本営』の隠された巨大地下壕)

「大本営の跡でアリランの歌」を

「私は在日韓国人三世です。日本に生まれ、日本で育ち、女子高校生として生活しています。韓国語もろくに話せず、親が帰化したため、国籍も今は日本国籍になっています。しかし私は、三歳から韓国舞踊をやつており、踊りをやつてゐる時が唯一私は韓国人なんだ、韓国人でいいんだと思う瞬間です。

韓国の歴史もろくに知らない私が、もつと韓国の歴史を知りたいと思つたのは去年のことでした。私の韓国舞踊の金先生が、強制連行されて多くの朝鮮人が犠牲になつた長野県の松代大本営工事の追悼の集いに行くと言き、一緒に行きました。韓国人が強制労働させられた場所に実際に入りました。中は薄暗くて冷たく、私の心の中の何かを奮い立たせるものがありました。延長が十キロもあるという当時のままの壕を私たちは歩き続けました。一人はぐれて薄暗い中を歩きながら、私はいつの間にか、朝

鮮の民謡アリランを歌っていました。涙を流して歌い続けました。この涙は何なのか、なぜ私は泣いているのか、自分でも分かりませんでした。民族の心なのでしょうが、自分の中の何かが、そうさせたのだと思います。

私たちには、歴史を知る義務があると思うし、私は事実を知りたいのです。在日一世の祖母をもつ私だからこそ言えることもきつとあるのだと思います」

(『朝日新聞』二〇〇一年二月二十三日)

私は二〇〇一年五月二十五日、松代大本営の地下壕を訪ねた。象山地下壕はぞっとする岩石に取り囲まれてあった。総面積五八五二メートル、掘削面積五九六三五立方メートル、床面積二三四〇平方メートル、幅三・五メートル、高さ三・四メートル、壕内の道は暗闇の中を縦横につながり、今にも飛びかかかって来そうな怪物のような岩が突き出している。冷気が壕を静かに突きぬける。ハンマーの音、鍬をふるって黙々と掘削を続ける朝鮮人労働者のシルエツトが浮かぶ。厳しい監視下の爆破作業、落盤事故があいつぎ、栄養失調で死亡する者、逃亡する者、自殺する者が続出し、処遇改善要求して銃殺される者もいた。工事関係資料は証拠隠滅のため、全部焼却し、犠牲者の数は知るよしもない。悪辣な手法、民主国家という新生日本に、こっそり受け継がれて……

「大邱府」という、壁に刻まれた落書きは、恨のこもる文字なのか、おぼろ月夜に聞える不如帰の鳴き声に、哀れ

な民の過去が浮かぶ。

象山地下壕入り口の側に立つ「朝鮮人犠牲者追悼平和記念碑」には、松代大本営の来歴を記し、最後に次のようなことが記してある。

「この大地下壕を中心とする松代大本営は、太平洋戦争と朝鮮植民地化に象徴される日本のアジア侵略の歴史と、その反省を永遠に心の中に刻む歴史的遺跡であり、この碑の建立と地下壕の見学が、いまだに残る民族差別の克服と友好親善の新しい第一歩となることを切実に願うものである」

「氏の記録」

ルポライター、林えいだいさんの『朝鮮海峡 深くて暗い歴史』は、千葉県在住の韓国人鄭正模さんの記録だ。鄭さんは、朝鮮半島南部の生まれ、故郷の路上を歩いているところを日本人警官に呼び止められ、そのまま日本に連行された。開戦前夜の一九四〇年のことで、鄭さんは二十二歳だった。残された妻や子供は、それから二十余年の間、突然消息を絶つた鄭さんを持ち続けることになる。送り込まれたのは、福岡県の筑豊灰田だった。苛酷な労働、悲惨な炭鉱事故、リンチもあった。一カ月後、鄭さんは炭鉱を逃げ出し、朝鮮独立のための地下工作組織に加わる。東北や北海道を転々しながら、朝鮮人労働者を脱走させる活動にも加わった。警察や憲兵隊の拷問のくだりを読むと、肌があわ立つ思いだ。同志三人が死んだ。鄭さんの体にも、その時の傷跡が残っている。きびしい弾圧の中でも、同胞の

組織的な救出活動が続けられていた事実には驚かされる。

戦時体制で手薄になった国内の労働力を補うために、朝鮮半島の人たちを日本に連れてくる。これが強制連行だが、その実態となると、まだ解明されていない部分が多い。ほとんどの資料が敗戦の時、焼却処分されたからだ。たとえば強制連行された人は七十五万人とも百五十万人ともいわれる。その実数さえはっきりしない。その人たちがたどった人生の軌跡となると、さらにつかみ方がない。十五万人が連行されたという筑豊地方には、あちこちに朝鮮人労働者の無縁仏が眠っている。寺の過去帳にも、この人たちの名が記されている。遺骨を集めて供養したり、母国に送りどけたりする運動が、一部の民間人の手でいまも続けられている。心につきささるような鄭さんの言葉がある。「口惜しさで、このままでは死ねません」。日本の植民地統治の深く暗い歴史をうやむやにしないためにも、鄭さんの記録は貴重だ。」

(朝日新聞一九八八年五月十九日付「天声人語」)
日本全国いたるところ、朝鮮人労働者の苛酷な生の痕跡がないところはないといわれる。その過去をすべてたどるといふことは到底考えられない。企業のいろんな資料は隠滅されたものが多く、敗戦と同時に、将来不利な証拠となるような資料は、みな焼却してしまった。在日朝鮮人歴史学者や朝鮮人団体と、日本人有志らによって構成された強制連行労働者の実態調査が推進され、少しずつ真相が明らかになってきた。だが、日本政府はいうまでもなく強制連

行に直接関わった企業は、われ関せずの態度で、損害賠償訴訟が提起されても完全に無視している。これが戦後五十五年が過ぎ、民主国家として経済大国を誇る日本人の姿勢である。

第六章 暗い時代の詩篇

一九一九年四月十五日、日帝は韓国京畿道、水原市提岩里の住民を虐殺した。「水原提岩里虐殺事件」である。日本憲兵は提岩里に居住するキリスト教、天道教の信者三十人を教会に召集して門を閉ざし、小銃を乱射して殺し、教会に火をつけた。火を逃れ窓から出ようとすると子どもや年寄りまで、合わせて二十九人を惨殺した。日本軍はその後、采岩里へ行き、民家に火を放った。三十一戸が全焼し、三十九人が焼死した。この蛮行に怒った英文学者斎藤勇(一九八二年七月七日死亡)は、「韓国提岩里教会堂焼打ち事件」という詩を書いた。しかし当時の言論統制のため、「或る殺戮事件」と題して公にされたという。これは同氏の追悼特集を組んだ月刊誌『英語青年』(八二年十一月号)に紹介されたもので、日本の良心的知識人が示した貴重な詩である。

或る殺戮事件

それはトルコ領アルメニアの蛮行ではない
三百年前ピエドモントにあった殺戮でもない

アジア大陸の東端に行われた惨事である
永遠の平和を期する会議中の出来事である

我らの愛する祖国においては
人類差別を撤退すべしと

いわゆる志土がいきまきどよめいた時
五大列強の一と誇る君子国の方伯は
その託された領土の民が結束して起ち
君子国官憲の圧制を非とし

一個の人として与えられるべき自由と権利を
要求するため示威運動を行った時

これ畢竟舶来邪教の迷わすところと
剣を按じて 布令をまわした
某月某日某会堂に集まるべしと

そこは都を離れたさびしいひな里
木造りの粗末な魂のほこらが立っている
白い着物をつけた土地の人々

或る者は大病の老いたる父をはなれて
或る者は産褥に入りし妻をのこして

或る者は辛くもその日を過ごすたずきをやめて
今日は日曜でもないのになぜ集まるのか

お布令のためだ いかめしい憲兵のためた
集まる者二十、三十 中には未信者もいた
官憲は詰った「なぜ暴動に加わったか」と

ああ己の母国が滅びて不平なきを得ようか

しかも当局が善政をもつて慕わせなければ
誰が喜んで屈辱と侮蔑とを忍べよう

しかももし 武断と暴力とを用いて

民の慍伏をこれ計る為政者ありとすれば…
信仰ある者は 官憲に対つて

魂の自由を求めたかも知れない

その言 激越の調を帯びたとしても
偶像礼拝をしいられる者に

それはいけない 不従順だと
どうして我らは言えよう

忽ち砲声 五発、十発…

見るまに会堂は死骸の kana 堂宇ほこら

尚あきたらずに火をもつて見舞う者があつた
赤い炎の舌は壁を嘗めたが

官憲の毒手に斃れた亡国の民を

「西洋邪教」を信する者を
憚る如く 恐れる如く 守る如く

彼らの死骸を焼き払わない

それと見て 風上の民家にも火をつけた
燃える 燃える 四十軒の部落は

一軒も焼け尽ざるはない
君は茅屋の焼跡に立つて

まだいぶり立つ臭気が鼻につかないか

乳呑み児をだいたままの若い母親

逃げまどつて倒れた年よりなどの

黒焦げになった惨状が見えないのか

なに「ヘロデの子殺しよりもひどくない」というのか

「ピエドモントヤアルメニアのより人数が少ない」という

のか

「島原や長崎あたりの昔の事もあった」というのか

「君子国にそんな例が珍しくない」というのか

もしこれを恥とすることがなければ

呪われたるかな 東海の君子国

或る新聞は簡単に伝えていう

併合国土のキリスト教徒は

群がり集まって騒擾を起こし

解散を命じた官憲に抵抗したため

暴徒の死者二十、焼失家屋十数戸と

またある新聞は一言半句これを記さない

さながら春風に吹きちる花をみるよう

日本の革命詩人として知られる楳村浩（本名吉田豊道）が、一九三二年四月号の『プロレタリア文学』に発表した「間島パルチザンの歌」がある。楳村は高知県高知市で一九一二年六月一日に生まれ、一九三八年二十六歳の若さでこの世を去った。彼は社会主義者として一九三〇年代、日本帝

国主義の中国侵略が進み、思想弾圧と統制がきびしくなつて革命運動が困難に直面した時期、高知市で反戦革命の旗を掲げ、不屈の闘争を行なった。彼は格調高い美しい詩を発表することで帝国主義を弾劾し、プロレタリア国際主義の精神を擁しつつ他の諸民族との連帯と平和を歌った。

「間島パルチザンの歌」は心ある多くの人に口伝され、大きな影響を与えた。この詩が発表された時期は、朝鮮民主主義共和国の故金日成主席が間島地方（中国東北部、吉林省東南部地域）で抗日遊撃隊を組織した一九三〇年の一年後であった。三・一独立運動の抗日闘争のさなかチゲ（しょいこ）を負つた朝鮮の一人の少年が父母と姉を亡くし、日帝に対する憤怒を胸に抱き間島へ逃れ、いまは二十五歳の若者となつて、銃を肩に望楼に立っている。望郷の念を抱きしめ歌う、抗日革命の詩情が心を揺さぶる。発表された当時、作者が在日朝鮮人ではないかと思われたほど朝鮮民族の心を歌つたものである。

間島パルチザンの歌

思いではおれを故郷へ運ぶ

白頭の嶺を越え、落葉松の林を越え

葦の根の黒く凍る沼のかなた

赫ちやけた地肌にずんだ小舎の続くところ

高麗雉子が谷に啼く咸鏡の村よ

雪溶けの小径を踏んで

チゲを負い、枯葉を集めに
姉と登った裏山の檜林よ

山番に追われて石ころ道を駆け下りるふたりの肩に
背負縄はいかにきびしく食い入ったか
ひびわれたふたりの足に
吹く風はいかに血ごりを凍らせたか

雲は南にちぎれ

熱風は田のくろに流れる

山から山に雨乞いに行く村びとの中に

父のかついだ鍬先をめながら

眩暈いのする空き腹をこらえて

姉と手をつないで越えて行つた

あの長い坂道よ

えぞ柳の煙る書堂の蔭に

胸を痛み、都から帰つて来たわかもののは話は

少年のおれたちにどんなに楽しかったか

わかものは熱するとすぐ咳をした

はげしく咳入りながら

彼はツアールの暗いロシアを語つた

クレムリンに燻つた爆弾と

ネヴァ河の霧に流れた血のしぶきと

雪を踏んでシベリヤに行く凶人の群れと

そして十月の朝早く

津波のように街に雪崩れた民衆のどよめきを
ツアールの黒鷲が引き裂かれ

モスコの空高く鎌と槌の赤旗が翻つたその日のことを
話し止んで口笛を吹く彼の横顔には痛々しい紅潮が流れ
血がチヨゴリの袖を真赤に染めた
崔先生と呼ばれたそのわかものは

あのすさまじいどよめきが朝鮮を揺るがした春も見ずに
灰色の雪に希望を投げて故郷の書堂に逝つた

だが、自由の国ロシアの話は

いかに深いあこがれとともに、おれの胸に沁み入つたか

おれは北の空に響く素晴らしい建設の轍の音を聞き

故国を持たぬおれたちの暗い植民地の生活を思つた

おお

蔑すまれ、不具にまで傷つけられた民族の誇りと

声なき無数の苦悩を載せる故国の土地！

そのお前の土を

飢えたお前の子らが

苦い屈辱と忿懣をこめて嘔み下すとき

お前の暖かい胸から無理強いにもぎ取られたお前の子らが

うなだれ、押し黙つて国境を越えて行くとき

お前の土のどん底から

二十万の民衆を揺り動かす憤激の溶岩を思え！

おお、三月一日

民族の血潮が胸を搏つおれたちのどのひとりが

無限の憎悪を一瞬にたたきつけたおれたちのどのひとりが
一九一九年三月一日を忘れようぞ！

その日

「大韓独立万歳！」の声は全土をゆるがし
踏み躪られた日章旗に代えて

母国の旗は家々の戸ごとに翻った

胸に迫る熱い涙をもつておれはその日を思い出す！

反抗のどよめきは故郷の村にまで伝わり

自由の歌は咸鏡の嶺嶺にした

おお、山から山、谷から谷に溢れ出た虐げられたものらの

無数の列よ！

先頭に旗をかざして進む若者と

胸一ぱいに万歳をはるかの屋根に呼び交わす老人と

眼に涙を浮かべて古い民衆の謡をうたう女らと

草の根を噛りながら、腹の底からの嬉しさに歓呼の声を振

りしぼる少年たち！

の崩れる峠の上で

声を洩らして姉弟が叫びながら、こみ上げてくる熱いもの

に我知らず流した涙を

おれは決して忘れない！

おお、おれたちの自由の歓びはあまりにも短かった！

夕暮れおれは地平の涯に

煙を揚げて突き進んでくる黒い塊を見た

悪魔のようにを投げ、村々を炎の波に浸しながら、喚声を

あげて突貫する日本騎馬隊を
だが焼け崩れる部落の家々も

丘から丘に炸裂する銃弾の音も、おれたちにとって何であ
ろう

おれたちは咸鏡の男と女

搾取者への反抗に歴史を綴ったこの故郷の名にかけて

全韓に狼煙を揚げたいくたびかの蜂起に血を滴らせたこの

故郷の土にかけて

首つなだれ、おめおめと陣地を敵に渡せようか

旗を播き、地に伏す者は誰だ？

部書を捨て、敵の鉄蹄に故郷をせよつとするのはどいつ

だ？

よし、焰がおれたちを包もうと

よし、銃剣を構えた騎馬隊が野獣のようにおれたちに襲い

掛かるうと

おれたちは高く頭を揚げ

昂然と胸を張って

怒涛のように嶺をゆるがす万歳を叫ぼう！

おれたちが陣地を棄てず、おれたちの歓声が響くところ

「暴圧の雲光を覆う」朝鮮の片隅に

おれたちの故郷は生き

おれたちの民族の血は脈々とつ！

おれたちは咸鏡の男と女！

おお血の三月　その日を限りとして

父母と姉におれは永久に訣れた

砲弾に崩れた砂の中に見失った三人の姿を

白衣を血に染めて野に倒れた村びとの間に

紅松へ逆さに掛かった屍の間に銃剣と騎馬隊に隠れながら

夜も昼もおれは探し歩いた

あわれな故国よ！

お前の上に立ちさまよう屍臭はあまりにも傷々しい

銃剣に蜂の巣のように突き刺され、生きながら火中に投げ

込まれた男たち！

強姦され、肉をられ、臓腑まで引きずり出された女たち！

石ころを手にしたまま絞め殺された老人ら！

小さい手に母国の旗を握りしめてした子供たち！

おお君ら、先がけて解放の戟さに斃れた一万五千の同志ら

の

棺にも蔵められず、腐屍をの餌食に曝す軀の上を

荒れすさんだ村々の上を

茫茫たる杉松の密林に身を潜める火田民の上を

北鮮の曠野に萌える野の草の薫りを籠めて

吹け！　春風よ！

夜中　山はぼうぼうと燃え

火田を囲む群落の上を、鳥は群れを乱して散った

朝

おれは夜明けの空に

渦を描いて北に飛ぶ鶴を見た

の林を分け

鬱蒼たる樹海を越えて

国境へ

火のように紅い雲の波を貫いて、真直ぐに飛んで行くも

の！

その故国に帰る白い列に

おれ、十二の少年の胸は躍った

熱し、咳き込みながら崔先生も語った自由の国へ

春風に翼を搏たせ

歓びの声はるかに掲げて

いま楽しい旅をゆくもの！

おれは頬を火照らし

手をあげて鶴に応えた

その十三年前の感激をおれは今なまなましく思い出す

氷塊が河床に砕ける早春の豆満江を渡り

国境を越えてはや十三年

苦い闘争と試練の時期を

おれは長白の平で過ごした

気まぐれな「時」はおれをロシアから隔て

厳しい生活の鎖は間島におれを繋いだ

だが、かつてロシアを見ず

生まれてろしあの土を踏まなかつたことを、おれは決して

悔いない

いまおれの棲むは第二のソヴェト

聞け！ 銃を手に

深夜結氷を越えた海蘭の川瀬の音に

密林に夜襲の声を訝したの樹々のひとつひとつに
血ぬられた苦難と建設の譚（ものがたり）を！

風よ、憤激の響きを籠めて白頭から雪崩れてこい！

涛よ、憤激のきを揚げて豆満江にれ！

おお、日章旗を翻す強盗ども！

父母と姉と同志の血を地にぎ

故国からおれを追い

いま剣をかざして間島に迫る日本の匪賊！

おお、お前らの前におれたちがまた屈従せねばならぬと言
うのか

ふてぶてしい強盗どもを待遇する途をおれたちが知らぬと

言うのか

春は音を立って河瀬に流れ

風は木犀の香を伝えてくる

露を帯びた芝草に車座になり

おれたちはいま送られた素晴らしいピラを読み上げる

それは国境を越えて解放のために闘う同志の声

撃鉄を前に、悠然と階級の赤旗を掲げるプロレタリアートの

の叫び

「在満日本革命兵士委員会」の檄！

ピラをポケットに

おれたちはまた銃を取って忍んで行こう

雪溶けのせせらぎはおれたちの進軍を伝え

見覚えのある合歡の林は喜んでおれたちを迎えるだろう
やつら！ 蒼ざめた執政の蔭に

購われた歓声を揚げるなら揚げるがいい
疲れ切った号外売りに

嘘っぱちの勝利を告げるなら告げさせる

おれたちは不死身だ！

おれたちはいくたびか負けはした

銃剣と馬蹄はおれたちを蹴散らしもした

だが

密林に潜んだ十人は百人となつて現われなんだか！
十里退却したおれたちは、今度は二十里の前進をせなんだ

か！

「生くる日の限り解放のために身を献げ赤旗のもとに喜んで
死のう！」

「東方解放軍」の軍旗に唇を触れ、宣誓したあの言葉を
おれたちは間島のバルチザン。身をもってソヴェエトを譲
る鉄の腕。

生死を赤旗とともにする決死隊
いま長白の嶺を越えて

革命の進軍歌を全世界に響かせる

海を隔ててわれら腕結びゆく

いざ戦わんいざ、奮い立ていざ

いざ戦わんいざ、奮い立ていざ

ああインターナショナルわれらがもの

(一九三二・三・一『プロレタリア文学』四月増刊号)

在日朝鮮人詩人の詩

あらゆるものが欠乏していた時代、かろうじて命脈を保っていた時代、朝鮮の文学者たちは筆を折って沈黙するか、あるいは「純粹文学」という名の、曖昧な文学を抱きしめて、情弱な文章のなかに身を沈めていた。一方では親日的な作品を書きながら、時代の流れに身を任せている作家や詩人が多く、民族の現実とは何の関係もない人間世界を描いていた。一九一九年、三・一独立運動が国内で激しく展開されているとき、朝鮮人留学生の金東仁・朱耀翰・田栄澤らが東京で創刊した朝鮮文学史上最初の同人誌、『創造』に発表された文章に接するとき、亡国の哀しみはさて置いて、民族の心に触れる文章や、将来に希望を抱かせるような文学が作品が見あたらないということは、残念なことであつた。幾人かの精神の真直ぐな詩人がいなかったとしたら、わが国の文学はどうなつていたか。：のような詩人の存在によつて、どうにか朝鮮文学の存在価値を知らせてくれる。

ところで、歴史の裏道で忘却の彼方へ消えていった詩篇を、私たちは無念だつた過去と同時に忘れてはなるまい。このような詩はみな日本語で書かれてあり、また、思想的な面で、また詩を発表した後の詩人の変節に因つてまったく無視されたまま、今日におよんでいる。しかし、国の運

命が風前の灯火となつて消え去らんとする、すべてが残酷な時代の渦の中へ巻き込まれて行くとき、詩人の生の一時を彩つた痕跡を理解することも、意味のないことではないと思う。一九二五年、左翼系雑誌『戦旗』三月号に、在日朝鮮人詩人は、「おりやあ 朝鮮人だ」という題の詩を発表した。

おりや 朝鮮人だ！

国もなければ 金もない
楽しい事つて もちろんないのだが

道徳がなんだ！

日鮮融和つて 何物だ

おれらはあまりにだまされすぎてゐるんだ

先代から住みなれた家はが

祖先からつたへてきた田畑はが

むさぼり取つてしまつたんだ！

今は裸一本の此の身が残つてゐるばかりだ

君等は働けといふのか！

君等はわしらが怠けてゐるとでもいふのか

だいたい働く所がないのをどうするんだ！

なつかしい故郷の山川を後にして

北は南満州東は日本へと

押し流されるヨボたちをどうせうというのか
我と我が身を敵国に運び行く心持を
君等は知ることが出来ないであらう！

何処へ行くとてあてもなく

たゞ 幸あれかしと願う心が

永住の地好しとあせる心が

今日も今日とて数百の白衣人たちを乗せた

関釜連絡船がポ となる！

末は場末か 炭鉱で果てるのぢやけれど

日本人はおれたちの×（敵？）ぢや

しかし全日本の無産者はおれたちの味方ぢや

おれらをいつくしみ助けてくれるのも

全日本のプロレタリアぢや

君等の思つてゐることを我等も思つてゐるし

君等のなさんとすることを

わし等もなし通すであらう！

同志たち手を握つてくれたまへ

そして一仕事しつかり頼むぜ！

一九二五年十一月号『文芸戦線』に、在日朝鮮人詩人は
「幸ひ」という題の詩を発表した。

ピストル バク弾、汎ゆる殺人機

俺はそれらを解らない。

しかし俺はそれよりも
彼等が俺を要求した日

笑つて標的に立つてやる意思の用意がある。
それで俺は幸ひだと叫ぶのだ。

また彼は翌年の二十六年同じ『文芸戦線』誌二月号に、「異
邦哀愁」という題の詩を発表した。

木賃宿住居 朝鮮人の子供

父親が稼ぎに出ると独りぼち

下宿の周囲を、ぶらぶらと歩いてゐる。

電車は危ぶねよと

父親に謂はれたから

裏通りばかりを歩いてゐる。

いつになつたら学校へ行けるのやら、

九ツになつてもまだ家にゐる。

母親もなく、友達もなく

玩具もない部屋は真闇だ！

近所の子供と遊ぶには、言葉が話せない。

此の子は唾だよと

皆がひやかして仕舞ふ

父親が帰つて来て

「ぼく坊」と呼んだとき

あまりの嬉しさに。朝鮮語で答えたら

子供らが

「朝鮮人」、「朝鮮人」と癪をひっかけて騒いでゐる

(一九二六・一・七)

は、一九三二年三月号『プロレタリア詩』に、詩「玄海灘」を発表した。彼は三〇年代初期、日本プロレタリア詩部門において優れた作品を多く発表し、一時社会主義戦線の旗手として活躍した経歴を持つ詩人であった。しかし、三十年代末期から転向して親日派になり、民族の魂を失って日帝を賛美し、「皇国臣民」として忠実な日本支配層の手先となつていった。民族の生が根こそぎ失われていくとき、ある詩人が言つていたように、「日帝が百年は行けると思つた」という時代の流れの中で、志操を守り通すためには、強い意志と大変な勇気のいることであつた。

志操と変節、この問題を考えると、私たちはいつも国の運命とともに考えざるを得ない。これはわが国が負つてゐる悲劇である。

玄海灘

おお玄海灘の荒波は

今夜も氷雨に海づらを叩かれながら

重々苦しい感情のやうに

闇の中に黒くうねり

亡び行く故国の岬を噛んで

灰白い水煙を吐いてざわめく

遠く関釜連絡船のボアが唸り

せわしいポンポン汽船の巡警の赤電燈が
狂犬の瞳みたいにチラついてゐる

俺は今 この奴隷風景の海ぎしにそひ

鳥打をあみだに被り

オーバーの襟をかきよせ

前こごみにつま立てて

今夜の集会へ矢のやうに急ぐ

内ポケットのリーフやニユースが

沁み込む氷雨に濡れないやうに氣遣ひながら

おお 数万の同胞が離散の涙を注ぎ

去年「朝紡」のストライキに敗れた

いとしい戦ひの妹たちの傷だらけの歌がひびいた

俺たちの苦しい戦ひの歌も

この海のやうに拡がり この波のやうに高まるのを知つて
いるか？

「三・一」を×××イキで記念せよ！

この戦ひの指令をひめた 俺の熱い胸は

このざわめく俺たちの海にそひ

氷雨の暗闇を衝いて集会へ

日中戦争が一層熾烈になつて行き、朝鮮民衆が不安と恐怖の中でおののいていた一九四〇年代、若い詩人尹東柱は暗い現実と、明るい明日の到来を待ちわびる詩を歌つた。尹

東柱は四十二年春、日本へ渡り立教大学英文科に咳を置いた。そして秋には京都の同志社大学英文科に編入し、在学中に独立運動をしたという嫌疑を受け、京都鴨川警察署に逮捕され、二年の刑を宣告された。その後九州福岡刑務所で服役、苛酷な拷問を受けて死んだ。彼は故郷の間島を懐かしみ、明日の光りを待ちわびながら静かに歌って逝った。

愛しい追憶

春が来る朝、ソウルの どこかの小さな停車場で
希望と愛のように 汽車を待つて、

私はレットホームにかりうじて影を落として、
タバコを吸った。

私の影は タバコの煙の影を追い払い
はとの群れが 恥ずかしげもなく

羽の内をすつかり日差しに照らし 飛んで行った

汽車はなんの新しい便りもなく
私を遠く運んでしまい、

春はとうに過ぎて行き 東京郊外のある静かな
下宿部屋で、むかしの街にのこった私を 希望と
愛のように懐かしんでいる。

きょうも汽車は 何度も無意味に過ぎて行き、

きょうも私は だれかを待つて 停車場近くの丘で
うろついている。

ああ 若さは そこに長く留まってくれ。

(一九四二・五・十三)

やさしく書けた詩

窓の外を 夜の雨がささやき

六畳部屋は よその国

詩人とは 悲しい天命だと 知りつつも

一行の詩を しるすとしよう、

汗の臭いと 愛の香り ふくよかに漂う

送りくださった 学費封筒を受け取り

大学ノ トをわきに抱え

年取った教授の講義を聴きに行く。

思い起こせば 幼い頃の友ら

ひとり、ふたり、みな失って

わたしは なにを望み

わたしは ただ、独り沈殿するのだろうか？

人生は生きづらいというのに

詩がかくもやさしく書けるのは恥ずかしいことだ。

六畳部屋は よその国

窓の外を 夜の雨がささやいているのに、

灯りをともし 暗闇を少し追い出して、

時代のように訪れる朝を待つ 最後のわたし、

わたしは私に 小さな手をさしのべ

涙と慰安で握る 最初の握手。

(一九四二・六・三)

短歌の技法

藤井陽一

短歌の技法十四 詩の多層構造

短歌に限らず、定型短詩には、いろいろな要素があります。その中でも、詩の構造 (structure) はたいへん重要な要素です。いろいろな建築構造物、あるいは、生体の構造のよつに、詩歌も、複雑で、多層的な構造を持っています。

構造には、詩歌の言語媒体としての外的構造と、言語の持つ意味による内的構造に分けて考えることができるでしょう。我々は、意識的に、あるいは、無意識にでも、これらの構造を理解して、詩歌を作り、鑑賞しています。

外的構造 (outer structure)

これは言語媒体的な構造です。

第一層 音韻的構造 (phonetic structure)

短歌、句のよつに、日本語の定型短詩では「拍数」がポイントです。しかし、中国語の場合は、音節、英詩等では、韻脚という風に、その言語の特徴によつて変わります。

第二層 韻構造 (rhyme structure)

漢詩、西洋詩の場合は、定型の尾韻が強制されることになります。日本語の場合は、頭韻的な要素が強いです、強

制されることはなく、任意です。

第三層 句構造 (phrase)

要するに、休止をどのよつに入れるということですが、これはどの定型詩にも存在します。短歌等の場合、拍数だけ、つまり、五七七七という区切りだけではなく、句を作ることによつて区切ることもできます。

第四層 テキスト構造 (text structure)

文字にどう書くか、という構造です。文字として表現する場合、日本語の場合、漢字、記号等を用いるために、いつも、三十一文字すなわち六十二バイト、というわけではありません。普通は、四十から八十八バイトぐらい、というところでしょうか。

中国語の場合、つまり、漢詩では、一字一音という中国語の原則のために、字数は一定です。ちなみに、中国では普通、定型詩は、五、七字で改行することなく、一行書きにします。五、七で強制改行にして、その下あるいは横に訳を付けるの日本だけの漢文学の習慣のようです。

西洋詩の場合、勿論正書法によつてバイト数は変わりますが、日本語のように、仮名か漢字かで二倍違つ、という

ことはありませんので、それほど大きな変化はありません。

内的構造 (inner structure)

これは、すべての定型詩について共通です。

第五層 単語構造 (meaning structure)

意味を持つ単語の配列です。単に直線的な関連ではなく、前後飛躍した関連も可能です。懸け詞、各種譬喩、ことばの連関などの話題です。

第六層 意味構造 (syntactic structure)

単語によって示される意味を持つ構造です。相互の配列と関連です。日本語の場合は、序詞、枕詞、bifurcationなどの話題です。

第七層 全体構造 (total structure)

その詩の主張点です。不確定性 (uncertainty)、共鳴効果 (resonant)、相互作用効果 (interactive) などが話題です。

上記のように、短歌に限らず、文学、特に詩は、多層の構造を持って成立していることに御留意下さい。

Q この層構造を意識して短歌を作るのか。

A この議論は、解析的ではありませんが、短歌を作られるときは、無意識にしろ、これを考えて居られると思います。短歌を、表面的にのみ見るのではなく、その階層構造をお考え頂くことは、作歌上もたいへんお役に立つのではないか、と思います。

短歌の技法十五 詩の伝統

伝統、というのは、歴史的な経緯というより、参加者数とお考え下さい。定型詩の場合、上述の第一層音韻的構造からスタートするわけですが、これは、だれか天才の思いつきでできるとしても、それにつづく、上記の第二から第七層の厚い構造を作るためには、大きな集団の参加と努力が必要です。

たとえば、都々逸という形式は、都々逸坊扇歌さんの努力でかなり普及しましたが、その後、いまいちという状態ですね。山頭火さんの不定形も、追隨者数次第です。短歌とか、漢詩の五、七絶などは、参加者数の多いメジャーな詩型です。

Q 参加者数の多寡に文学的な意義があるのか。

A 人数の多少、というのは、一見意外ですが、文学的熟成のためには、多くの方の思考が必要なのだ、と御理解下さい。

短歌の技法十六 禁止表現な そ

「な 連用形 そ」は、禁止の意味です。

な書きそ 書くな。書いてはいけない。という感じですよ。適用される基準文体は、万葉文体が本場で、王朝文体以降は、真似的です。せいぜい、擬古文体まで、とお考え下さい。

さい。

標準文語文体では、使わないほうがよい。「書くべからず。」と書くほうがいいです。現代口語文では、禁止表現は、終止形+な という形に変わりました。「書くな。」ですね。

Q 表現、というのは何か。

A 表現、というのは、単語の品詞別分類とは次元が異なり、表現したいある内容があったとき、ある場合は、助詞、ある場合は助動詞、ある場合は、名詞であらわすことができると思います。こういうとき、これらは、意味が同じか類似しているので、一括して、表現ということばを使います。

短歌の技法十七 字あまり

短歌は、五七五七七という基本リズム型による定型短歌ですので、これから大きくはずれることは、別のリズムの創造、とみなされます。

「字あまり」をどう考えるか、ですが、先ず、休止を入れた、六八六八八、あるいは、八八八八八という基礎リズムパターンをお考え下さい。というより、こちらのほうを、基本とお考え下さい。この範囲で、自由に音と時間をお使いになることができます。この範囲では、実質的に字あまりではないと思います。

上記の範囲から、それでもはみ出すときですが、最後の

五句めは、どつせ、これで終わりだからと、九から十音に伸ばす。これは、いろいろな会議で、良くあるパターンですね。

外国語のときは、本国の発音のリズムに準拠する。たとえば、strip は、英語では1音節、日本語では5音節です。外国語のリズムで発音して欲しいときは、原綴を使うといいかもしれません。

シンコペーション、スラーのような高次のリズムを利用して、次ぎへ追い込むこともできます。

シンコペーションとは、五七五の分け点を、たとえば、一つずつずらす。

スラーとは、一語を二句にまたがって使う。これらは、音楽用語の流用です。

意味的に、一句相当である、と主張する。有名な「芭蕉野分けして心に風の沁む身かな」などですが、散文的になり易く、強弁になり易いので、出来れば避けたい。

文章、意味、用語を頭から先に決めてしまつのではなく、流れに乗って、リズムに合った用語を採用することも、定型短詩創作のキーポイントですね。

字あまりが出来そうなきな処理はどうするか、というのが次ぎの問題です。字あまりの処理法に二通りあります。

発散的処理

字あまりの生じた句は、そのまま放置する。従って、字あまりは、基本リズムに対する誤差となって蓄積して行きます。五七五七七という基本リズムに対して、発散的にな

り、新リズムの創成を指向します。

求心的処理

基本リズムからの字あまりを、スラー、シンコピーションなどの技術で、基本リズムに納まるように処理します。従って、字あまりは打ち消され、全体として、基本リズムは、求心的に守られます。基本リズムに対して、高次のリズムを創成する方向を指向するものです。

Q 八音なら良くて、九音は悪いのか。

A 上記のように、定型詩である短歌には、多数の参加者に支持されているリズムパターンがあるのだ、と御理解下さい。これに則っている限り、短歌の仲間になれると思います。このリズムパターンから逸脱する、あるいは、理解されていないときは、新しい詩形の創造、あるいは、散文化である、と思います。

Q 音数が六、四と少ないのはどうか。

A 音数が少ないと、リズムの欠如感が大きいので、特殊の効果を狙う場合以外は避けるべきだ、と思います。

短歌の技法十八 方言

基本的に、一つの言語なのですが、地理的、階層的、あるいは、政治的に、コミュニケーションが隔絶している状態で、発音、語彙、統辞が、互いに変化して行った状態を方言 (dialect) といいます。

地理的方言

地理的理由でコミュニケーションが少ないという原因で生じます。

日本は、従来、山脈、海などで、また、幕藩体制下で、コミュニケーションが制限されていたため、ご存じのようないろいろの方言があります。非常に地理的隔絶の大きかった沖縄地方では、琉球方言という、他方言とは違いの大きい方言が生まれました。短歌の立場からは、琉球方言（琉歌がある）以外は、殆ど短歌の基本リズムに乗りません。従って、短歌の基準文体として使用することができます。

現在は、御存じのように、マスコミ、パーソナルコミュニケーションの発展によつて日本国内での、コミュニケーションの機会が増えたので、地域的な方言は消失しつつあります。大方言としては、関西地方では、一般関西弁として拡がっていますが、まだ、地域的特性が残っています。首都圏では、地域的な特性は殆どみられません。

階層的方言

地域の方言内にも、階層別の方言は存在します。しかし、地域差が大きいときは、これは目だちません。地域内において、あるいは、地域的特性が消失したときは、階層的な方言が目だつこととなります。首都圏の方言は、殆ど、これです。

いわゆる子ギャル語などを含め、パソコンマニアなどの趣味グループ、いろいろの大学の学生、特定業界、更には、PTA、各家庭、各家族に、それぞれ階層的方言があります。

階層的方言は、勿論、階層間のコミュニケーションが、相対的に少ない、ということが原因で発生します。

大ざっぱな分類では、教養方言、無教養方言に分けることができます。教養方言は目で覚えられ、無教養方言は、耳から覚えられます。

短歌の立場からすると、階層的方言は、主人公が誰であるか、どういふ職業、教養、社会的立場であるかを、説明しないで表現できるので、たいへん便利に、基準文体として利用することができます。

敬語

いわゆる敬語は、方言の立場から見ると、優れて階層的です。

つまり、家族とか、デパートとか、それぞれのグループの「しつけ」に依存しているからです。どういふ敬語を使うかは、家長、店長の方針によって決まりますから、敬語の一般基準というものは存在しません。

従って、いろいろな敬語を、たとえば、どちらが丁寧か、と比較することは、殆ど無意味です。

短歌の立場からは、この関係を利用して、どういふグループのどういふしつけか、ということを表示できます。これもまた利用価値が高いです。

Q 方言を短歌に使うことは、品格を落とし、高雅な歌を作ることができない。

A 我々の理解できる方言である限り、それらは短歌の材

料として使うことができると思います。普通の文学の基準と同じように、短歌においても、広い立場から考えるべきではないでしょうか。

Q 無教養方言、特殊な方言を使うことは、特定のグループを差別することにならないか。

A これも、広い立場から、我々の言語生活の現実を直視し、これから文学を創造するのだ、という立場が必要だと思います。

Q 琉球方言では短歌はできないのか。

A 琉球方言には、琉歌八八六があります。この方言で、短歌を作るのは、多少とも天才的努力がいるのではないかと感じています。

Q 敬語には絶対的基準があるのではないか。

A 多くの方がそう思っておられるようですが、上記のように、敬語とは、多かれ少なかれ、特定のグループでしか使われないこと、また、時代と共に、急速にその基準が変化して行くことを考えると、絶対的な敬語の基準を設けることは不可能だと思います。むしろ、ある敬語は、どういふグループが使うのか、という客観的立場から作歌に利用するほうが現実的ではないでしょうか。

短歌の技法十九 あり あり をり

存在をあらわす動詞は、歴史上、かなり変わっています。

万葉 平安 擬古文体

この期間、存在は、普通、あり を使います。動物、非動物の区別なくです。ある は、現在のように存在ではなく、座っている、というような感じのより狭い意味で使われていました。従って、補助動詞ではありません。

をり は、ゐ+あり が本義で、座って存在継続している、という意味です。

継続は、連用形+あり という形が普通だったようです。擬古文で、をり を継続と理解するのは差し支えないですが、本来の意味は、上記のようです。この時代、はべり いますがり などという変種もありました。

従って、この意味でお使いになるときは、あくまで、表記の万葉-平安-擬古文体を基準文体にすることを前提となさして下さい。現在はかなり乱れた使い方が多いようです。

中世 江戸時代

突然、上記のような用例が消滅します。この間、過渡期で、現在のよつな、動物、非動物による区別へ移行していったようです。従って、用例、意味は、文献毎に違つようです。それぞれの基準文体について御参照下さい。この間、をり は、方言化していったようです。さぶらふ、候 という変種が発生しました。

明治以降標準文語文体 標準口語文体、会話文体

ご存じのように、いる(ゐる) ある は、動物非動物の対立になりました。従って、おる(をる) はほとんど方言(関西弁、鹿児島弁など)になっています。

というわけで、短歌の立場からすると、どういった基準文体の中で使うか、使われているか(あるいは誤用か)が、作歌、解釈のポイントになります。

参考文献 旺文社古語辞典、岩波広辞苑

Q 現在の短歌における、をり、ある の用法は誤りなのか。
A 御指摘のように、をり、ある の用法は、かなり変なものが多いです。基準文体の立場から、用例を調べて、良く御検討下さい。

短歌の技法二十 短歌は会話

短歌、俳句、詩の特徴を一言でいうと、短歌は会話 俳句、川柳は標語、キャッチコピー。詩は歌謡ですね。

短歌は会話

会話そのものではありません。「会話的」です。短歌を作るとき心理的アチチュードが会話的なのです。返歌などの形で、相互コミュニケーションのメディアとして、古来たいへんよく使われます。口語、俗語、方言など、会話的要素を、驚くほど自由に取り入れることができます。これは、勿論、他の詩形でもできますが、短歌が、この窮屈な定型の中に、こんなに自由自在に会話的要素を入れることができるのは、全くの驚異です。

歌謡的要素が最小です。歌会始の朗詠のように、短歌の朗詠は、音楽的要素最小の棒読みです。短歌そのものが有

名な歌謡になつた例としては、日本国歌「君が代」と、「君泣くや、母となりても」だけです。試みとしては、いろいろあると思いますが、ポピュラーにはなっていないません。

長歌が、五七のリズムを踏みながら、新体詩などと違い、全く音楽的要素がない、ということは驚くべきことです。万葉集に、死を悼む長歌がたくさんありますが、恐らく、これらは、現在のお葬式の弔辞のように、歌われずに、読まれただけだったのでしよう。現在の五七の詩は、勿論、音楽的要素最大です。比較して下さい。

標語的要素は無くはありません。有名な、なせばなる、なさねばならぬなこと、ならぬは人のなさぬなりけり。上杉鷹山

から、神道、仏教では多くの教訓歌があります。しかし、川柳などと比べると、お説教たらたら、という感じで、ピリツと来ません。

以上のように、従つて、短歌は容易に演劇を指向します。俳句、川柳は標語、キャッチコピー

これは誤解を招きます。標語、キャッチコピーというのは、勿論、交通安全とか、化粧品とかへのキャッチコピーだけではなくて、もっと広く、蛙とか、蝉とか、萩とか、月とか、春雷とか、わびとか、さびとか、もっともっと広く、人生そのものへの、キャッチコピーなのだ、と、御解釈下さい。これから、俳句、川柳を創作するときの心理的態度つまり、端的に対象を叙述し、人を引きつけよう、とする態度が出て来ます。

従つて、相互コミュニケーションはできません。強いてやるときは、連句のように、短歌の形式を一部利用することになります。口語的要素を入れることは可能ですが、かならずしもキャッチコピーとしてふさわしくはありません。音楽的要素は皆無です。俳句そのものを歌謡にした例はありません。

標語的要素。これは最大です。有名な

この土手に登るべからず、警視庁。
を持ち出さずとも。

従つて、俳句、川柳は容易に短冊を指向します。

詩は歌謡

詩は歌謡そのものではありませんが、最も歌謡に近く、最も音楽的要素が大きいのです。これはいうまでもないことです。従つて、相互コミュニケーションにはかならずしも向いていません。普通は、言いつばなしです。口語的、会話的要素をとり入れることはできますが、カラオケのデュエットのように、それほど普通、というわけではありません。

音楽的要素。これは勿論最大です。しかし、良い詩だから、と言つて良い歌謡になるわけではありません。良い歌謡のためには、音楽家の天才が必要です。その結果としての素晴らしい歌謡は、掃いて捨てるほどあります。

詩の定型性。これは実は音楽的要素によつて規定される点が非常に多いのです。たとえば、鉄道唱歌のように、一定の旋律パターンに七五七五の多くの詩をはめこむことができます。逆に、自由詩、と言われるものでも、優れた旋

律が与えられると、あたかも、それが一つの定型のように作用します。

標語的要素。これはけっこうあったりします。軍歌とか、党歌とか、国歌とか、コマソンとか。

従って、詩は当然ながら音楽を指向します。

外国詩と比較してみましょ。

詩も歌謡も、どこのことばにもある。あたり前ですね。キヤッチコビーはどの国にもある。最近拝見した、胸のすくような、ロンドンの観光キヤッチ「ルー、When a man is tired of London, .. he is tired of life.

しかし、それが五七五のように定型化したのは、日本語だけだ、と思います。

会話的な定型詩。これも探すがたいへん困難です。たとえば、漢詩のある部分。五、七言の絶句はたいへん短歌的です。贈答詩は現在でも広く行われます。私も中国の若い方から答詩を何度も頂きました。

また、たとえば、古典劇、たとえば、シェークスピアの、会話の定型詩的部分、などが該当すると思います。しかし、はつきりと独自の形態になっているのは日本語の短歌だけだ、と思います。

Q 同じ詩なのに、どうして上記のような別別の指向が生ずるのか。

A 前にも述べましたが、詩というのは、五七五というように特定の詩形ということで、抽象的に存在するので

はなく、それを支持し、発展させている多くの人間のグループがいるのです。詩形の指向とは、つまるところ、それらグループの趣味、指向、および、それらの歴史的集積によって、方向づけられたもの、とお考え下さい。

Q いろいろな詩形が指向を持つことはわかったが、これらは、それぞれの詩形を過剰に限定していないか。

A 勿論、上記の議論は、それら詩形を特定の範囲に限定して考えよ、というものではありません。それらの詩形、詩を作るグループの中に内在するアチチユードの違いをご認識頂くことが、作歌上も有用と考えています。

おもふところ 藤井 陽一

生きて行けぬなどありふれたことを言ふ君よ、命はひとつだけだぞ。

思想とふものをし持ため我々は、思想とふことばに怯えぬたりき。

見沼とはださき区名と言ひつのも、鵜沼、天沼しらぬ顔する。

つけ回しすればコストは安くなる。安いものには税金かけろ。

金持ちに税金かけろ、と言ひしかば、屁理屈つけて怒る人たち。

大赤字困ると言へば、それ見たか、料金下げよ、とのみ言ふ人。

焼酎を呑みてうまし、と言ふことを健康なりと人は知るべし。

二十万ほどの金をし貸せし人に：焼酎呑まうぜ、踏み倒しはせぬ。

十万円ほどの金をし欲し、といふ人に：我また欲しくあるなり。

翔ぶほどの翼を持たぬ我はなほ、どれほどの予算要るのか、と悩む。

明日になれば死亡通知を出さむ人に：我また同じと思ひ給へや。

儚しと言ふてはをられぬ人命。友より重篤とふメール来て。

快き小春の中に我もめて我が妻もゐることの嬉しさ。

我ひとり小春の中に息しめて、けふより雪とふ友ぞ悲しき。来年の足音聴きつつ、何をすべきかなどは老いには悩みとならず。

しばらくは鰯を食ふを止めむ、とぞ思ひしみずさんの詩なりき。

賢きは賢からざるを識り得べし。その逆はまた真にはあらず。

もの見ゆる如きの歌を欲しと言へば、歌とはものにはあらずとふ人。

皮算用なれども、夢はそれなりに美しかりき、と思ふまでなり。

結論は何時ごろ出るかは知らねども、命はそれまで持つかどふだか。

II

随
想

寮歌について

中野武彦

今年十月二十六日に廣島高等学校関東同窓会総会が、東京銀座の三笠会館で開催された。現在の会員数は四百数十名であるが、当日の出席者数は夫人とお孫さん数名を加えて六十余名であった。ところでこの同窓会の会員の総数は今後増えることはない、毎年ぼつりぼつりと減る一方なのである。旧制の廣島高等学校は昭和二十五年（一九五〇年）三月に廃校となり、最年少者の会員も既に七十歳を過ぎているのだからである。

総会の議事としては、会長選出、会計報告、ゴルフ会囲碁などの同好会報告と進行していったが、やがて会食や歓談で宴も酣になった頃合を見計らっての恒例の寮歌高唱が始まったのであった。

旧制高等学校には自治寮が付属していて、新入生は原則として全員が寮生活を体験するようなシステムになっていた。そして校歌などは殆んどの高校には存在しなかったから、寮生が作詞作曲した寮歌が毎年のようにして選出され、それが愛唱歌になっていたのである。

わが廣島高等学校は全国の官立高校二十五校中最後の高等学校として、一九二三年（大正十二年）に設立されている。旧制高校生といえば、白線帽に黒の釣鐘マント、朴齒

の下駄に腰手拭といった風俗が特徴的であった。そして白線帽の学園生活には寮歌がつきもので、学校内といわず街中の繁華街にあっても所構わず高歌放吟したものであった。

寮歌でもっともポピュラーなところは、第一高等学校の「嗚呼玉杯に花つけて」に第三高等学校の「紅萌ゆる丘の花」、或いは北海道帝国大学予科の「都ぞ弥生」であろう。これに次ぐものとしては、第四高等学校の「南下軍の歌」や第六高等学校の「中寮寮歌」、第七高等学校造士館の「北辰斜に」あたりであろうか。北大予科や一高から八高までの所謂ナンバー・スクールは、明治時代に創立された学校であるから、それだけ長年月に亘って歌われてきたからでもあるのだろう。ところで大正年代に遅れて新設され都市名のついている高等学校の寮歌にも、なかなか捨て難い名歌が多いようである。私の好みで選ぶならば、松本高等学校の「春寂寥」や山口高等学校の「鴻南に寄る歌」、姫路高等学校の「白陵歌」なんかは、つい口ずさみたくなる歌である。

廣島高等学校の代表的寮歌としては、「銀燭揺ぐ」と「怒濤の譜」が挙げられるだろう。

前者は古谷省三作詞楠木保作曲で共に昭和二年卒業の第一回卒業生である。後者は昭和十四年度記念祭の寮歌で作詞は昭和十六年卒業の川越敬一である。川越氏はいまなお現役で活躍中であるが、楠木氏古谷氏はともにすでに物故者である。なお楠木氏は廣島の連隊に応召中原爆死を遂げられた。

寮歌の斉唱は卒業年次と人数を勘案して七つに分けられたそれぞれのグループが、思い思いの曲を選んで歌うという趣向で始められた。

第一のグループは昭和八年から昭和十七年卒業の最年長の先輩たちで、選ばれた歌は遠征歌「征旅遠く」であった。インターハイや他高校との親善試合に出掛けるときに列車の車内や会場に近い街頭でも歌われた。この歌の作曲はやはり楠木保であった。

『一、征旅遠く雲霽れて／真紅に沈む夕日影／旗旗は高く血に燃えて／命の調颯爽と／吾等が胸に躍るかな』

三、噫満天の星冴えて／空を貫く天の河／生の大道たたえつつ／心静かに今宵こそ／宴の杯をとらんかな』

次は昭和十七年九月卒業組である。太平洋戦争の始まったお蔭で本来なら三年間の就学年限が、二年半に短縮された最初の卒業生たちであった。この組は代表的薫風寮歌「銀燭揺く」を先輩をさしおいてと断りながら歌っている。

『一、銀燭揺く花の宴／櫻吹雪の春の宵／感激の月影淡く』

『若き男の子に望みあり』
三、鯉城の夕べ錦繡の／影清流に映ゆる時／偲ぶや故郷の秋の曲／若き男の子に愁あり』

五、仰げば希望の峰高く／俯すれば理想の水清し／我清空の孤月輪／若き男の子に抱負あれ』

第三のグループは昭和十八年九月卒業組で讃酒歌「紫淡く水むせぶ」を選んだ。この歌はコンパやストームの際に歌われていたが、作詞は数山英一で作曲はやはり楠木保であ

る。中学校五年に進むことなく四年修了で高校生となった最年少の秀才たちは、満十六歳の未成年である。だから讃酒歌とくれば多少穏やかでない気もしないではないが、当時は白線帽をかぶれば周囲が大人扱いしてくれたし、本人たちももう子供ではないと自己主張せんばかりに、なかば公然と煙草をすったり酒を飲んだりしたものだ。『一、紫淡く水むせぶ／三篠川辺の曙よ／遠き思を胸に秘め』

／踊れツライン水むせぶ』

二、宇品湾頭雲遙か／踊るオール輝よ／感激深き若き日を／歌へツライン雲遙か』

次のグループ昭和十九年九月卒業組は当然のことながら逍遙歌「春は弥生の」を選んだ。というのもこの歌の作詞者繁村博と作曲者石田望雨氏がともに出席していたからである。肩を並べて自らの作った青春の歌を歌う老境に達した両者の、どこか遠くを見詰めるような眼差しと紅潮した顔付きは、さらに参会者一同の感動を倍加させたようだった。この歌が創られたのはすでに太平洋戦争も酣の頃で、国民には伏せられていたが戦況は急速に退勢に傾き始めていた。そんな時期にはおおよそ似つかわしくないロマンチズムの横溢した逍遙歌ではあったが、当時の寮生は言つに及ばず敗戦間近の私たちまでも、誰憚ることもなく群れをなして散策しながら斉唱していたのだった。

『一、春は弥生の花吹雪／濡るゝ男の子に若き日の／美しき詩や浮び来む／長堤嫩草萌え出でて／浅緑の道行く子等が／口ずさむなる逍遙歌』

二、夢円まづかなる瀬戸の海／霞たゆたふ緑島／波打際に貝拾ふ／鹿子絞りの乙女子が／裳裾の濡るゝ浜辺より／白き小舟に棹さしぬ

三、あはれ去り行く春惜しむ／調べ悲しき波の曲／その哀調の誘ひてか／真白き翼海鳥の／朧の月にたはむれて舞ひてをさめぬ惜春賦

昭和二十年の卒業者は二年半がさらに二年に短縮されての三月卒業となったが、そのうちの半年は工場に勤労働員され、しかも満二十歳を過ぎた文科生は中途で学徒出陣しているのも、もっとも不本意な高校生活であつたらう。昭和十四年度寮歌「怒濤の譜」を選んでゐるが、この寮歌は敗戦直前の疾風怒濤の時代に青春時代を送つた高校生には、悲憤慷慨の意気の捌け口としては最適の歌だつたらう。

一、時代の潮は荒れ狂ひ／猛き嵐に育ちたる／歴史も若し十四年／理想がさせる姿なれ／きけとどろきよ怒濤の譜よ／おゝ怒濤怒濤怒濤

三、朝の栄華夕べなき／玄海灘の木の葉舟／その人生を疾駆する／われ等怒濤ぞ人生の／熱と意気との荒波ぞ／おゝ怒濤怒濤怒濤

昭和二十一年には旧制高校の卒業生はいない。昭和十九年入学の私たちの学級は敗戦後ふたたび三年の就学年数に戻されたからだった。昭和二十二年、二十三年、二十四年の卒業組が、昭和四年の卒業生羽白幸雄作詞の讃唱歌「黄昏る想深けれど」を歌つた。羽白氏は母校の私たちに独逸

語を教える教諭でもあつたからである。

序の唄 黄昏る想深けれど／豎琴の鳩は鳴き止まず／陽を

求めてや旅人は／双葉の岡に花を籍き／勇魚探らんか船人は／海の嘆きを空に聴く

午の唄 真昼の砂丘来て見れば／潮騒高く沈鐘は鳴る／むかし詩人一握の／砂に泣きしか若人よ／雲去る空の円光に／愁を捨てよ永久に

そして取りは昭和二十五年の最後の卒業生と、新制に切替えのために一年間しか高校生活を経験出来なかつた昭和二十四年修了組が、惜別歌「春洛陽の花霞」で締め括つてゐる。

けれども惜別歌は私たちのグループが選ぶべきだつたかも知れない。何故なら昭和二十年八月六日の原爆投下を在校生として洗礼をうけ、被爆した級友たちが看護の甲斐なく次々と亡くなり、その無惨な遺体を茶毘にふしながら歌つたのがこの寮歌だつたからである。

一、春洛陽の花霞／散りて惜しまぬ青春の／緑の子等が掻き鳴らす／三弦の音に照り添ふる／純白き生命の友情は／今宵別れの琥珀酒

三、されど去り行く影見てか／驕りの袖に涙あり／そは一醉に旅の子の／過ぎにし生活偲びてか／悵愁の谷霧晴れず／一曲侘びし想夫憐

四、さあれ劫初の蒼穹に鳴る／時劫の歩み一瞬時／離別を告ぐる暁鐘に／嗚呼！若き血や瑠璃の水／酌む傷心の遊子らが／猶も友呼ぶ「惜別歌」

旧制高等学校は白線帽、黒い釣鐘マント、腰手拭、寮雨・コンパ・ストームの寮生活、高歌放吟した数々の寮歌、などとともに永久に消え去ってからすでに半世紀以上の歳月を経過している。旧制高校と旧帝国大学の功罪ということになれば難しいことになるのだが、あんなにも急いで戦前の教育制度を廃止することが正しかったのかどうか、その後のプラグマチズムに偏った新制度の教育が、必ずしも旧制度より優れていると断言できる筈はないのである。近代日本国家の帝国主義化の元凶が旧制高校と帝国大学なのだと、アメリカ占領軍が名指したわけでもないのに、その意を体した安倍能成や天野貞祐などの学識者が先走って改廃したのだという説もある。ちなみに枢軸国としてわが国と共に英米仏ソの連合国と戦い、ともに無条件降伏した敗戦国ドイツは、アメリカの強い要請にも拘らず、自国の大学は中世より連綿と続いた歴史があるので、たかだか建国から二百年程の新興國の指図など受けるいわれはないと、頑として従来の教育制度は変えなかつたと聞いている。

ともあれ旧制高等学校生活を曲がりなりにも経験した私たちにしてみれば、「されどされど去年の雪は今何処」の思いがなおもしきりに胸中を去来するのである。

ハム道楽四十年

中出真澄

高校三年のときにハム（アマチュア無線）を始めて、四十三年になる。よく飽きもせず続いたものだと思う。生来、英会話が得意ではないこともあって、もっぱら電信、いわゆるトンツー一筋で楽しんできた。いま船舶通信もトンツーを使わなくなつて、無線の世界でトンツーにしがみついているのは、ハムだけになつた。モールスさんは、あの世でどう思っていることだろう。

「ハムって何？」という方のため、まず簡単に解説しておこう。アマチュア無線が、食べるハムと混同しそうなハムと、なぜ呼ばれるのかは、このさい脇に置くとして、電波法では「金銭上の利益のためでなく、専ら個人的な無線技術の興味によって自己訓練、通信及び技術的研究の業務を行う無線局」と規定されている。アマチュア無線技士という国家試験に合格のうえ、アマチュア無線局の開設を申請し、コールサインを取得しなければならぬ。私の場合は「J3AVO」。世界中でこのコールサインは一つしかない。放送局のような大電力は認められないけれども、短波帯の電波は世界を駆けめぐる。亡くなったヨルダンのフセイン国王もハムだった。ヨットによる二度目の太平洋横断に成功した堀江謙一さんも、今回はハムをフルに活用し

ていた。

第二次世界大戦に伴い禁止されていたハムが、戦後再開されて今年はちょうど五十年。一貫して増え続けていた日本のハム人口に、このところ異変が起こっている。一九九四年に百三十六万局を超え、世界のハムの半数を占めた日本のハム局が、この年をピークに減少に転じ、二〇〇〇年には九十万局を割つた。

なぜか。一時言われた大学の工学部離れ、就職でものづくりを敬遠する風潮、科学する心の衰退。様々な要素がからみあっているのだろう。私に言わせれば、ハムはロマンの世界だと思つている。通信手段としては電波は不確実な手段だ。インターネットや携帯電話など確実な通信手段が発達したいま、時に雑音ストレスの電波を追うハムに、魅力を感じる若者が減つているということだろう。

一口にハムと言っても、その楽しみ方は実に奥が深い。おしゃべりが好きな人は普通の言葉で交信を楽しめばいいし、モールスを使つて世界のハムを相手にしてもいい。自宅にアンテナを建てられない人は、車に無線機を積んで山の上に移動して楽しむのもいい。資金に余裕のない学生なら、電力の少ない比較的安い無線機で近距離通信を楽しめばいいし、稼ぎがある人はハイパワーの無線機と、巨大なアンテナを建てればいい。月に電波を反射させる実験をしている人がいるかと思えば、インターネットとの連携に情熱を燃やす人もいる。コンピューター時代を迎えて、トンツーをコンピューターに解説させる試みに挑戦しているハ

ムも多い。せつかくハムの資格を取ったのに、その奥深さを知ることもなく、入り口だけでUターンする若者の多いのは、残念なことだ。

四十数年続いた私の場合、もちろん山もあり、谷もあった。連日徹夜で世界のハムを追っかける時期があるかと思えば、まったく電波の出ない時期もあった。しかし、五年ごとの無線局免許の更新は絶やさず、世界で唯一の私のコールサイン（J3AVO）は維持してきた。「なぜ？」と問われても、「奥が深いから」としか答えようがないけれども。海外のハムと交信したり、無人島から電波を出すハムを追っかけたりすることを、Distance略してDXといい、DXに夢中の人をハムの世界ではDXerと呼ぶ。私も夢中とまではいかないDXerの端くれだが、ハムを長く続けることができたのは、絶えず何か目標を設定していたことが大きいのもしれない。

DXerがまず目指すのが、世界の百力国のハムと交信すること。これに成功すると、DXCC（DX・Century・Club）という名誉ある（？）クラブの一員となり、立派な賞状がもらえる。ハムの世界では、国の概念は国連などの国の概念とは違って、例えばアメリカの場合、グアムやサイパンなどは別の国に数えるので、三百数十の国がある。私はいま百七十力国くらいだから、生きているうちに残りのいくつまで制覇できるか、わからない。しかし、絶えざる目標には違いない。

完成した大きな目標の一つに、アメリカの全五十州と交

信するWAS（Worked・All・States）がある。四十九州まで交信し、最後の一つ、サウス・キャロライナ州と一昨年末に交信できたときは感激した。さっそく航空便で交信証を交換した。「あと一つ」を攻め落とせず未完成になっているのが、世界を四十のゾーンに分けて、すべて交信するWAZ（Worked・All・Zones）。エジプトかスーダンと交信すれば完成するのだが、まだ電波を聞いたこともない。ある日突然、遭遇するかもしれない。これも、ロマンの世界である。

そして、いま一つ、挑戦を始めたのが、アメリカの全部と交信するUSAICA（County・Award）。先の大統領選の帰趨を決めたフロリダ州でのデッドヒートをめぐる報道で、盛んに登場したあのカウンティだ。全米で三千七十六もある。日本に次いでハムの多いアメリカ。日本とともにハムの世界では「雑魚」と言われるだけに、交信は容易だ。しかし、郡を追うとなると、ことはそんなに簡単ではない。いま持っている交信証を数えてみたら、なんと百二十郡しかなかった。遠大な目標になりそうだ。

ところで、私がコンピューターの世界にのめりこんだのは、トンツイーをコンピューターで解析して、文字を画面に映し出せないかという、ズボラな動機からである。自分でプログラムなど組めないから、友人をそそのかして開発してもらった。これは、それなりに動作したけれども、結局実用にはならなかった。人により癖のあるトンツイーを機械に解読させようというのは結構むずかしく、何よりもロマン

に反することであつた。しかし、パソコンはインターネットにワープロにフル回転している。ハムと並ぶ道楽になつてきた。我が第二の人生に退屈はない。

日暮里割烹醉之助にて

渡名喜彦

拉致問題などがあつて考えてみる時に、ああいう、全く自己を喪失しかねない、状況下に耐えうるということは、これは病理学的にみてるならば、人間のサド性とかマゾ性とか、真面目に臨床学的データからいって、どちらかというならば多分にその人のマゾ性を發揮しなくてはもう、人間がこわれてしまふんです、蘇我さんですか、けれども彼女は、ええー、佐渡の出身なのであります……。

ここで、不埒な、けしからんといつて、眉をひそめる人は、おもしろくない人間といつてよい。及川君という友人を誘い私はホテル・ラングウッドにおいての「立川流日暮里寄席」を堪能したのであつたが冒頭に挙げたのは、立川談慶さんのマクラの部分である。演目についての細かなことは今は語らないことにする。私どもは大満足であつた。いぶし銀、所作よし喉よし間合いよし、特にトリで「柳田角之進」という私の大好きな演目をやってくれたのもうなにもいうことなし。打出の太鼓がないのは仕方なかつたが、及川君と私は無言のまま帰りの道を歩いた。実は少し泣いていたがその渴く間もなく私は「ほら、ここさ」と言つて『酔之助』の引き戸を開けた。及川君は「おおう」と言つた。

『酔之助』の大ママさんは五十年と落語を聴いていて立川談幸さんを後援している関係から、私は有り難いことに彼女からチケットを一枚頂いたわけなのであつた。及川君と私は中程の席に腰を落ち着けた。小ママのユキさんがさつそく来た。瓶ビールを頼んでから「ママは？」と訊くと、風邪で店を休んでいるということであつた。そうか、まあしかし私どもは乾杯と言つてしばらく盃を交わした。ユキさんがエシヤレットの小皿を置いたところで「いやあ、今日の寄席は素晴らしかつたよ、是非ともママにありがとうと伝えておくれ」と言つと、ユキさんはちよんと私を見て「そうよ。今日は特選会だもの」と言つて厨房に入つて行つた。

さて何が楽しいかつて、あそこはああだつた、ここはどうだつた、だれだれはそうだがふむふむと、批判ではなく感涙の余韻を面白くするために、私と及川君はああだこうだ、感想を述べ合い、実に実に楽しいのである。「あんまり飲み過ぎてまた腰を取られないでね」と私はユキさんに目配せをされ、私は及川君には「どれ、君も飲むかい」と日本で一番最初のウイスキー電気ブランをすすめた。四十度のしるものである。ユキさんはそれをオチヨコグラスになみなみとついで。「いかに、いかに手で持つちゃ、一口目は、こつやつてスツポンのように、口をグラスにもつていくものだよ」と及川君はそういうことには、私より訳知り顔の男であつた。

私たちがそんなこんなをしていると、どうやら立川談幸さん一向がお店に現れた。すぐに私と目があつたので、私は

初対面ではあったが御礼と感謝の視線で返した。彼が私の席の後ろの方を通った時、私は驚いた。おやこの人は私と同じぐらいの背丈であったのか、高座にあがっている時には、非常に大きい感を私に与えていたのである。彼等が奥座敷に落ち着くとすぐユキさんがつかつかと急ぎ足に行つて、「今日はなんにする？」とオーターを聞いていた。

この度の寄席は前座の方にも割合に多くの時間を与えられていた。前座の方は快樂亭ブラ房さんであった。彼の師匠は快樂亭ブラックさんであり、たまたま追川君はディレクターの取材でブラックさんと面識があり弟子のブラ房さんとも会話をしているのであった。「おれの方をちらちらみてるんだけど……」と及川君が言うので、「ちよつと、挨拶してきなよ」と私は言った。どういふことかというところが大分前の話であるらしいが、ブラックさんの何かの祝いの式典があつた時に、その時には及川君にも招待状が来たものらしいのだが、おそろしいことにはその時に彼は実に一文無しの状態で、会費の一万五千円が払えないという理由からその誘いを断つたという経緯をもつていたのである。

「八八八八」と私は笑つたのに、「いやあ実にあの時に顔をつないでおけばと今でも思うよ」と実に弱気な発言をするのであつた。彼は二十歳の頃、映画監督になるという夢と落語家になるという試練と、二つの道に憧れていて結局、前者の道を選んだわけであるが、その道がいばらであるならまだしも、今では鬱然とした黒幕のようなものが彼自身の方に垂れ下がつてあるかというような按配に私には

彼が映つているのであつた。「落語家は羨ましいねえ、己の体一つ、芸一つで人生を渡つていくんだぜえ、俺も落語家に……」そこで私は「おい、それを言うなよ」と及川君に注意した。及川君はすぐにかつて弱いものではあつたが私に笑顔を返した。おや、私の傍らの柱にユキさんが寄りかかつていた。私は彼女をちよつと呼んで電気ブランをすすめたが、彼女はすぐに違つたところに行つた。「姿より、匂いにかける、花もあるつてね」と私がそつと言つと、及川君も含んで笑つた。

さあ、私は朝には、締切りが迫つた原稿が待つているから、十一時ごろ及川君を促した。私どもは一人で立ち、奥座敷の方へ伺つた。ブラ房さんは及川君のことをよく覚えていて、あの時はどうもどうもと、にこやかな対応をしていた。私は今回の演目の中で一つだけ初めて聴くものがあつて、それを演つた方に問つと、「ああ、あれは上方の方のネタです」とこちらも笑顔で答えてくれた。及川君が一通りのお礼を述べ辞した後、私は談幸さんを真ん中に見て、「この度は楽しいひと時をありがとうございました。また、エネルギーを与えて頂き、本当にありがとうございました」と言つて深くでもなく浅くでもなく頭を下げた。そんな私を、ユキさんは、ちよつと意外な顔をして見ていた、ようでもあつたと及川君が私にそう言つたことであつた。

弾かない音

寺沢京子

先日、ギターコンサートに出かけた。

ギターだけでなく、話術も巧みな演奏者なので楽しみにしていたのだが、やはり興味深い話を聞いた。

「この曲では、あえて弾かない音がいくつかあるんですよ。でもどういいうわけか、弾かないのに聴こえてくるんですよ」
彼が目ざすのは、聴衆のイマジネーションを喚起する音楽だそうだ。弾かないのに聴こえてくるのは、イマジネーションの力だという。

「さあ、今からこの曲を弾きますからよく聴いて下さいね」
そう言われて聴いていると、確かにそんな気もしてきたのだった。

さて、先週の日曜日は、私の属する音楽サークルのコンサートだった。喫茶店を借り切って、ランチを食べながら、ピアノや歌などを楽しもうという会である。

私は趣味ではあるが、長い間ピアノを弾いていて、その日もポピュラーを2曲、弾かせていただいた。

弾く前に、ワインがあまりに美味しそうだったので、一気に3杯ほど飲んでしまった。

私の順番が来て、ピアノの前に座った時、「これは困った」と感じた。頭の中がぼうつとして、まさに酔いが回ってし

まっていたのだ。おなががすいていたところに、一気に飲んだのがいけなかったのか。楽譜もぼうつと、少しかすんで見える。

「ぼんぼんぼん」

今回は暗譜していないので、楽譜がはつきり読めなくては弾けない。胸がドキドキしてきた。

こうなったら仕方がない。

開き直すことにした。

幸い、クラシックではなくてポピュラーなので、コード記号がついている。楽譜どおりでなくても、コードさえ間違わなければ何とかなるかもしれない……。

テンポも速くなったり、遅くなったり、かなり酔っぱらった演奏だったと思う。

けれども、弾き終わって席に戻った時、周りの人が

「良かったよー」と言ってくれた。

「ほんとう？ 実は酔ってしまって、わけがわからなくなってる」

「まあ……。でも返ってそれが良かったのかもしれないね」
コードは間違わないようにはしたけれど、本当なら弾くべき音を抜かしている箇所は多かったように思う。

その時、皆さんはひよつとして想像力で聴いて下さったのかな。と、ギター演奏会の話思い出したのだった。

ところで、河合隼雄さんの『昔話と日本人の心』という本を読んだことがある。

日本の昔話は西洋の話と違って、完結していないことが多いそうだ。聞き手の感情によって、初めて完成されるのだという。あわれの感情も、完結の寸前におけるプロセスの突然の停止によって引き起こされるとか。

なるほど……。たしかに、このあとどうなるのだろうか？と想像することは、興味のあることかもしれない。ハッピーエンドになってほしいけれど、どうだろう？ このヒロインのこれからはどうなるのかな？などと心配しながらも、余韻を楽しむことができるかもしれない。

夢中で本を読んだ後、しばらく話の世界に入り込んでしまっただけで、なかなか現実の世界に戻れないこともある。次の仕事が終わっている時などは、どうしようかと困ってしまうほどだ。

ひよつとして、人もそうだろうか？

すべてがわかってしまう人よりも、深みがあるというのか、内に秘めたものがある人の方が、魅力的な気もする。

もつとも、内に何かがあるのかな、と期待していると、意外と軽薄な人だとわかって、がっかりということもありそうだけれど。

ドラマなどで俳優が演技をする時も、ベテランの方だと、こんなふうなことまで考えて演じられるのかもしれない。

さて、サークルの次のコンサートに向けて、また練習を始めないといけない。

でも私の場合は、まずコツコツと基本的なことから固め

ていく必要がありそうだ。この間も、ある程度弾きこんでいたからこそ、何とかごまかせたのだろうし、きつと運も味方してくれたのだろう。

弾かないのに聞こえる音、書かないのに読んでもらえる言葉……。

そういうものを描けるようになるためには、私はまだまだ修行が足りない、そんな気がする。

長い道のりの先に、ある日、ふつと見えてくるものかもしれない。

……

石橋殿の春秋（三）

永井ますみ

指を切る

十月八日夜七時過ぎの事だ。我が石橋殿が入浴中に指を切った。いやいや、指を切ったのは私の方だ。仕事から帰って夕飯の支度に大根を炊いていた。ジャガイモやキャベツを放り込んで、最後にウインナーを入れる。前日に作っておいたホワイトソースで味付けて仕上りの予定だった。野菜を煮込んでいる間に「メールを見ましょう」とパソコンを付けていた。実はこれで何度も鍋を焦がして失敗しているのだが、今回は水を沢山入れているので「これで焦がしたら名人位というもの……」とばかりに頭から気掛かりが消失していた。

遠くで鍋の音がしている、気が付いて台所に駆けつける。と名人位獲得の寸前だった。差し水をして、何とか落ち着く。「ついでだから、もうウインナーも入れちゃいましょう」と袋入りのウインナーを取り出す。よく考えるところもは包丁の刃を向こうに向けて切り裂くの、この時に限って刃がこちらを向いていたようだ。左の親指をザックリと切ってしまった「ギャー」と叫んだ後、包丁もウインナーも放り出したまま声が出なかった。しっかり切った部分を押さえのまま立っていたのだが、十分もしてから、ようやく彼は湯

から上がってきて「どつした？」と聞いてくれる。「もっとサツサと出てくればいいのに」とさっきまで思っていた事を忘れて、何やかんや言っても夫婦やね、と一寸安心する。もう良いかなと、切り口を押さええている手を離すと、ピューと血が噴き出して来る。やっぱり縫って貰わないとどうしようもない。既にバジャマに着替えていたけれど、手を離すと又ピューだから、外出着に着替えることが出来ない。ジャンパーを羽織るだけの惨めな格好で、さっき退勤したばかりの病院へ行く。五針も縫って血は止まった。

食後の食器洗いは今までも折に触れてしてくれていたが、これで晴れてしばらくは石橋殿の専任となった。洗剤を沢山振りかけても油ヨゴレは落ちるけれど、熱い湯を掛けてタワシでこするだけで、可なりのところまで綺麗になること。洗剤は地球を汚すからなるべく使いたくないこと。だから、食材を洗うのは水だけで良いことなど細々したことを話していると、少女時代から私が習得した家事哲学を娘に教えているような、不思議な気分になる。

小学生の頃、畑仕事が忙しい父母に替わって、食事の用意と片付けは私の仕事だった。子供のする事だから大した事ではないが、貧しい百姓の単調な食事作りだから丁度良かったのではないかと今にして思う。暗い流しの片隅でかまどを二つ操って、食事の支度をするのは嫌いではなかった。少し離れた風呂の焚き口まで走ることもあった。あの頃もやっぱり貧乏だったのだ、全然暇というものがなかったもの。

翌日、風呂に入るとき、「一緒に入って洗ってやろうか?」
という如何にも男らしい? 有り難い言葉があったのだが「右手が使えるから」と丁寧にお断りした。一瞬「共に風呂へも入った昔に戻っても良いけれど」とは思ったが、私自身に未だ頑ななところがあるようだ。一体全体、石橋殿は私なのだろうか。

五針も縫ってしまつた親指では、肉を焼く野菜を焼く、又は揚げるなど単純な指先だけの作業はできるけれど、決定的にできないのが、ジャガイモの皮を剥くことだつた。ジャガイモは泥で傷口が汚れると化膿するかも知れないのだから。簡単調理なのに充実した味で、毎日のようにお世話になつている食材なのに、使えないのはとても寂しい。石橋殿はタマネギの皮を剥いて洗つて、千切りにするのに「どこまで剥いたら良いんだ」と、滂沱の涙を流している。慣れない仕事なのだから完全を願つてはいけない。ジャガイモも所々皮が残るけれどこの際眼をつぶろう、子供の仕事を上手にさせるには褒めること、それと限度を知ることにする。

我が家では石橋殿が四十代の頃に一挙に肝臓、高血圧、高コレステロール、糖尿病を軽いながら養つたことがあつた。肝臓病は高栄養、良質のタンパク質を摂りたいし、食後の三十分ばかりの臥床がその数値を下げるのに効果がある。高血圧は塩分制限と適度な運動。コレステロールを下げるには動物性脂肪を削減すること。糖尿病はカロリー制限と運動のバランスの配置が肝要で、全体的には肥満を毛

解消する必要があつた。看護婦に復帰する前の、情報が著しく低下していた時代だつたので、一体何を食べて貰つたらその境涯から脱出できるのかに思索した。苦肉の策として肉類から脂肪を外すようにしてきた。脂肪を削ぎやすい鶏肉や豚肉を主に食べてもらつて、牛の霜降りは調理の前段階から敬遠してきた。それらが功を奏したのが、彼の血液はサラサラになつたらしい。一年ばかりの後の健康診断で丸を貰つてホツとしたものである。勿論それには、彼の石橋殿振りが相乗効果をもたらしてくれたのではあるが。

しかし、この五針も縫つた指ではジャガイモはおろか、肉の脂をそぎ落とすことも不可能だつた。生の肉に触れるのが怖い、そこにはどんなばい菌がいて、私の傷口に侵入してくるか分らないのだから。兎も角二週間ばかりは水で濡らさない事、汚い物に触れないことに気を付けて、十日ばかり経つた頃によく抜糸と相成つた。化膿することもなく、めでたいめでたい。

この怪我を契機に食事の為の、野菜を切つたり炒めたりに興味を持つてくれるようになったのは、正に怪我の功名というべきか。しかしまだ彼の納得する味は見つかからない模様で、作るのもつばら私の居ない昼食に限られている。偶に夕食を作る時があつても、私という調理師が居ないときであつて、私にとつては幻の味と云える。しかしながら頑固一徹の石橋殿のことだから「自分の味」を獲得される日はそう遠くないと楽しみにしているのだ。

東西医学の接点

平川敬二

(一) 漢方医学の成立

西洋医学では、診察、検査のうえで、先ずその病氣の原因、つまり病因を探り、その病因に従って病名を決定します。治療とはその病因を排除することです。これは、西洋医学では、病因を探索する手段及び病因の排除手段を有しているからです。

例えば、「咳が出る」という症状を考えてみましょう。「咳が出る」という症状に対して、結核菌が肺を犯していることを認識すると、肺結核症という病名が確定します。そしてその治療方針は、抗生物質によって、結核菌を排除するということとなります。

それに対して、漢方医学が成立したのは、現在のようない科学的な手段のない古代のことですから、結核菌の存在を確認する手段もありません。その代わり、咳に対しては、どんな薬物、これを生薬と言いますが、が有効であったかという膨大な経験の積み重ねがありました。経験的に有効であった「薬物(生薬)」を使ってみるうちに、咳の出方、咳以外の随伴する症状によって、どんな生薬が有効であったかを克明に観察し、それを整理統合して「証」という概念が生じました。

また、経験を積み重ねるうちに、一つの生薬よりは、いくつかの生薬を組み合わせさせて使った方がより効果的であることも知りました。このようにして、自覚的症狀並びに他覚的に認知し得る徴候の組合せと、それに対応する処方方が整理され、一つの書物にまとめられました。これが西暦二百年頃に、張仲景によって著わされたと言われる「傷寒論」という古典です。現在の日本の漢方医学は、この傷寒論の影響を多分に受けており、漢方医学を勉強するには傷寒論を読むことが必須の条件であるとされています。

(二) 漢方医学理論の発生

経験の蓄積によって、症状の起こり方、それに使う薬物が整理されてくると、当然「なぜ症状が起きるのか?」「なぜ治るのか?」という疑問が生じます。この疑問に答えるためには「理論」が登場せねばなりません。

現在のような、生理学、細菌学、病理学などの知識もなく、またそれを探求する手段も持たない時代のことですから、そこに導入された理論はきわめて幼稚で単純なものでした。

西洋医学では、疾患の認識には、先ず顕微鏡で観察した病原体の有無、それによって破壊された細胞、そして細胞の破壊によって生じた臓器の異常を観察します。最近では、細胞レベルではなくて、分子レベルの疾病認識さえ行なわれています。つまり、遺伝子の異常です。このように、西洋医学では、高度の検査機器の発達により、臓器の異常から細胞の異常、さらには遺伝子の異常というように、益々

ミクロの世界に突き進んでいます。顕微鏡どころか、血圧計や体温計すら無かつた漢方医学の世界では、このような疾病認識はとて出来ません。

そこで、漢方医学の世界では、病的状態を説明するために、「氣」という概念を導入しました。「氣」とは、空気の氣、元氣の氣であり、これが病んだのが「病氣」であると考えた訳です。「氣」とは、秩序を保つ作用のことであり、生命維持の根源となるものです。この「氣」が身体を順調に巡ることで健康が保たれるのですが、何らかの理由で「氣」の巡行が傷害されたり、「氣」が不足すると病的状態を生じます。「氣」は適度にあるのが正常であり、不足すればもちろん異常ですが、過剰で秩序を乱す「氣」も異常で、これを「邪氣」と言います。

経験的に、或る状態は「氣の不足」によると考え、これに有効な薬物は、「氣を補う」作用があると考えました。また、或る状態は「氣の過剰(邪氣)」によると考え、これを治す薬物は「邪氣を排除する」作用があると考えました。このように、漢方医学の治療原則は、不足は補い(補)、邪氣は排除する(瀉)ことで、「氣」の運行を順調に保つことにあります。

理論が整理されてくると、単なる「氣」の過不足だけでは病態を説明し切れなくなりました。そこで「氣」を更に、「陽氣」と「陰氣」に分けて考えるようになりました。これは「易」の「陰陽論」に結びつけた訳です。「陽氣」とは、例えば「活発にする、温度を上げる」作用の「氣」であ

り、「陰氣」とは、「活動を抑える、体温を下げる」作用で、「消炎、鎮痛」作用を持った「氣」ということができます。「氣」は陰と陽のバランスが取れて初めて正常の「氣」、つまり「正氣」となります。もし、「陰氣」が正常でも、「陽氣」が過剰であれば「陽実証」となり、陽氣が正常でも「陰氣」が過剰であれば「陰実証」となります。また、「陰氣」が正常でも「陽氣」が不足すれば「陽虚証」、「陽氣」が正常でも「陰氣」が不足すれば「陰虚証」となります。このように、「陽氣」「陰氣」の、どちらが過剰で、どちらが不足しているかを判別することは、漢方医学ではきわめて重要なことであります。それは、治療方針として、「不足は補う」「過剰は排除する」が、根本原則であるからです。

現象が簡単なうちは「陰陽論」でも対処できますが、さらに複雑になると「陰陽論」だけで全てを説明することは困難になってきます。そこで、陰陽論とともに当時の哲学であった「五行論」も理論に登場して来ることになりました。そして、「陰陽論」と「五行論」が、約二千年前に漢方医学理論として結びつき、「陰陽五行論」として現在に引き継がれているのです。

(三) 日本における漢方理論

日本には、西暦五百年頃に漢方医学が伝わってきたと考えられています。室町時代に、田代三喜が中国に留学して当時の明の医学を日本に伝えました。これを期に、漢方医学は日本独特の発展を見ることになりました。

江戸時代になると、「陰陽五行論」による漢方理論は、空

理空論であると排斥され、古典に復帰すべきとする風潮が主流を占めるようになりました。この古典とは、張仲景による「傷寒論」「金匱要略」のことであり、これを中心とする学派は「古方派」と称せられ、従来からの陰陽五行論に基づく学派から区別されています。傷寒論は中国の漢方医学の流れの中では、最も古い医学書の一つですが、これが尊重された理由は、傷寒論には理論が記載してなくて、症状と処方が記載されているだけだからです。

理論は時代によって変化することは、自然科学の進歩の過程を見ても明かですし、常に新しい知見によって理論は修正されています。ひとり漢方医学だけが、昔の理論のまままでよいという訳にはいきません。そこで、二千年前の理論は、現実に合わない理空論として、捨て去られてしまったのです。その点、傷寒論に記載されている内容は、経験的事実の集積ですから、理論が変わっても経験的事実は変わることはありません。江戸時代の漢方医、吉益東洞がこれまでの理論を徹底的に排除し、傷寒論に記載されている事のみを事実として尊重することを強調しましたが、この流れが現在まで日本漢方として引き継がれています。

吉益東洞が、従来の漢方理論を一切否定したとはいえ、彼が否定したのは「陰陽五行論」であり、東洞は独自の理論を提唱しています。それが「万病一毒論」と言われる学説で、全ての病気は、一つの毒で起きる、従って治療とはその毒を排除することである、という考え方です。しかし、全ての病気を一つの毒で説明することは到底無理であり、そ

の後息子の吉益南涯によって、「気・血・水」理論が提唱され、これが受け継がれて現在の漢方医学理論の基本となっています。

気・血・水は、人体を構成し、人体の生理活動を主る基本的な要素です。そして、気・血・水の三要素がバランスを保っていれば健康、このバランスが乱れたときに病気になると考えています。

漢方医学では、「気」が流れる、「気」が鬱滞する、「気」が不足する、等という表現をします。このことからすると、「気」は物質を意味する訳ですが、「気」は見ることも測定することもできません。いわば、目に見えない、形の無い物質ということでしょうか？

「気」は多彩な作用を持っています。まず、成長、発育、生理活動は「気」が主どっています。血液が血管外に溢出しないようにするのも「気」の作用です。体温を調節することも、外敵の侵入を防ぐことも「気」の作用とされています。

現代医学では、生体機能の調節は、神経・内分泌・免疫が互いに連携して行なうことが分かっておりますが、この連携を円滑に行なうための、数多くの情報伝達物質が発見されています。その主なものは、必要に応じて細胞から放出される「サイトカイン」と名づけられた多種類の活性物質です。

この様に、古人が考えた「気」という働きを中心に、現代医学での、神経・内分泌・免疫の働き及び情報伝達物質

である「サイトカイン」であると考えれば、非科学的とも思われる漢方医学理論も、十分に納得することができるのです。

漢方医学でいう「血」は、現代医学の「血液」とはイコールではありません。それは、血液という物質を意味すると同時に、血液の作用をも包含した概念だからです。この血液の作用というのも、現代医学での血液の作用とは若干異なったものがあります。「血」の主な機能は、全身の栄養を主ることにあります。「気」を運んで「気」を全身に巡らせるのも「血」の働きに含まれます。「気」と「血」は相互不可分の関係にあり、この両者が協調してこそ健康が保たれるのです。

人体の六十%以上は水であると言われていきますので、構成成分としての「水分」は非常に重要です。血管内は勿論、細胞間液、胃液、唾液、鼻汁、涙、汗、尿、など、至るところに水、つまりH₂Oは存在しており、「体液」として重要な生理的役割を演じています。

漢方医学では、特にこの「水」の動きを重要視しております。水の場合は、多すぎても少なすぎても異常を引き起こす訳で、水が多すぎる、或は分布が偏っている場合の病態を「水滯」と称しています。水滯によって症状が起きるときは「水毒」「痰飲」等と称することもあります。

水分の偏在によって起きる「水滯」は、色々な状態で観察されます。先ず、浮腫です。これは、古典では「溢水」と呼んでいますが、水分が皮下に溢れ出たものと考えており、

現代医学的な考え方と全く同じです。水様性鼻汁や、希薄な喀痰も局所的な水分過剰による症状であり、下痢も腸管内の水分過剰であると考えています。このことは、現代医学からかけ離れた考えではありませんが、特徴的なことは、この水滯の治療として、「利水薬」を使うという点です。西洋医学でも、浮腫に対しては、いわゆる「利尿剤」を使用しますが、鼻汁や下痢に「利尿剤」を使うことはありません。ここで注意を要することは、西洋医学の「利尿剤」と、漢方医学の「利水薬」とは根本的に異なるということです。「利尿剤」は腎臓に働いて尿量を増やす薬剤です。しかし、漢方薬の「利水薬」は、体内の水分の偏りを是正し、体内の水分を均一にするという薬剤です。だから、体内の水分の絶対量が過剰であれば、その結果として尿量が増える場合もありますが、水分の偏在を是正しても尿量は増えない場合もあります。

(四) 外感病因

病気には、感染症のように、外から病原体が侵入してきて起きる病気と、高血圧や糖尿病、ガン等の様に、内因的な病気とがあります。ウイルス、細菌などは現代医学では、病原体として認識し、それに対する抗生物質が開発されており、病原体を直接攻撃することが治療の根幹となっております。

古代には、ウイルスや細菌などの病原体を観察することは出来ませんでした。病気には、外から「邪」が侵入して起きるものと、内から生ずる「邪」によって起きるもの

とがあることには気がついていました。

人体が健康である為の条件は、陰陽のバランス、気血水のバランスが正常に保たれていることが必要ですが、このバランスを乱して病気を起こす外的因子として、古代の人は「六淫」を考えました。「六淫」とは、風・寒・火・燥・湿・暑の六つのことですが、ウイルスや細菌などの病原微生物の存在を確認する手段を持たなかった当時としては、色々な病原体による発病形式の違いからこのような病因を考えたいものと思われれます。

現代医学でいう「感冒（インフルエンザ）」は「風の邪」に犯されたもので、文字どおりこれを「風邪」と現在でも言うております。「風」は「寒」を伴って侵入するので、厳密には、インフルエンザは「風寒」と言つて良いでしょう。

病因の全てを説明するのは、煩雑となりますので、ここでは主として「風」と「寒」に関連して、熱性伝染病を古人がどのように考えていたかを、傷寒論という古典に従つて考察してみましよう。

(五) 傷寒論の構成

今から二千年近く昔の中国では、病氣といえは、発熱性伝染病がその中心でした。傷寒論は、発熱性伝染病の発病からの経過を克明に観察し、各々の病的段階に依じて、症状とそれに対応して使用する処方に記載した書物です。

傷寒論では、病気の進行段階、つまり「病期」を六つに分類しております。

太陽病から始まって、少陽病・陽明病と進み、この三段

階が「陰陽論」で言えば「陽」の段階であり、さらに進めば太陽病・少陰病・厥陰病という経過を辿ります。この過程で治癒しなければ死亡することになります。

現代医学では、発熱性伝染病の殆どは、病原体が同定されていきますが、傷寒論の時代にはとてもそんなことは出来ませんから、病気の原因としては「風」と「寒」を考えていました。現代医学では、ウイルスの種類、細菌の種類によつて、症状、経過が異なることが分かつておりますが、昔は病原体の種類による経過の差異を認識することは不可能でしたから、多彩な発熱性伝染病の経過の違いは、太陽病からの病期分類だけでは説明不可能であり、苦肉の策として「誤治」、つまり治療法を間違つたためと考えたり、「合病」、つまり、病的段階が異なる状態が同時に起こつていてと考えたり、かなり説明に苦労しております。

通常の経過を辿るとすれば、先ず太陽病として発病することになります。この時の治療で治癒すればそれで終わりですが、治癒しなければ次の少陽病、さらには陽明病へと移行します。陽病の時期は、発熱が主であり、「外邪」と「正気」とが戦っている状態と考えられますが、「陰病」の段階になりますと、もつぱら下痢などの消化器症状が中心となってきます。傷寒論では、次のように定義しております。

「太陽の病たる、脈浮、頭項強痛して悪寒す。」
頭項強痛というのは、首筋が強ばつて頭痛がするということです。

「太陽病、発熱汗出で、悪風、脈緩の者は、名づけて中風と為す。」

「太陽病、或はすでに発熱し、或は未だ発熱せず、必ず悪寒し、体痛、嘔逆、脈陰陽俱に緊の者は名づけて傷寒と曰ふ。」

ここで、太陽病には、「中風」と「傷寒」の二つがあると定義しています。後の世の考証によれば、中風は「風邪」に中つたもの、傷寒は「寒邪」に傷ぶられたものと考えられています。これは中風は「軽い状態」、傷寒は「重篤な状態」と考えることも出来ますし、または経過の違いと考えることも出来ます。

この定義は、現在のインフルエンザの発病時の状態を考えてみますと、非常に正確に症状を観察していることが分かります。傷寒論の時代には、インフルエンザだけではなく、腸チフス、赤痢、コレラ、マラリヤ、流行性脳炎など、現在の日本では殆ど見られない伝染病が流行していたに違いありません。これらの伝染病の発病初期の症状も、インフルエンザと比較的よく似ていますので、これらをひっくるめて「太陽病」と総括したことは無理からぬことと思われま

(六) 生体防御からみた太陽病

太陽病は、病原体が生体内に侵入して、生体側の生体防御機構との戦いが始まった時の状態を示していると考えられます。そこで、現代医学的生体防御理論からみた傷寒論の記載を考察してみましょう。

皮膚や粘膜などのバリアーを突破して、病原体が体内に侵入すると、その場には、非特異的体液因子が存在しており、これが先ず対応します。これを突破すると、生体側は補体活性化が始まる本格的生体防御機構を発動させることとなります。

まず、病原体を認識した現場から、情報伝達物質が産生され、感染局所に白血球の一種である好中球を集合させます。好中球の役割は、病原体を貪食することであり、生体防御の初期段階の主役を演ずるものであります。好中球の集合に数時間遅れて、やはり貪食細胞であるマクロファージが戦いに参入します。好中球が主役を演ずるか、マクロファージが主役を演ずるかは、病原体の種類、戦いの時期によっても違いますが、いずれにしても、これらの貪食細胞が生体防御の初期段階の主戦部隊ですから、どれだけ早く現場に集合するかで戦いの趨勢が決まってきます。

ここで生体がとる作戦は、先ず敵を認識した細胞が情報伝達物質、これらを総称してサイトカインと言いますが、サイトカインが脳の発熱中枢に情報を伝達し、発熱中枢の体温のセットポイントが高い点にセットされます。すると、大脳からは、「体温を上げろ」という指令が出されますので、生体は体温を高める方向に反応します。まず、皮膚表面の血管を縮小し、体表からの熱の放散を防ぎます。この結果、「寒け」を感じるようになります。同時に交感神経を興奮させて心拍出量を増やし、新陳代謝を高めて、体熱産生量を増やします。この時、震え、脈が速くなるなどの

反応があります。この体温上昇作戦が効果を現わして来る
と「発熱」が起こります。

傷寒論の「太陽の病たる、脈浮、頭項強痛して悪寒す」というのは、この状態の描写であり、脈が浮、つまり浮いているということ、心拍出量の増加を示したものであり、頭項強痛とは、サイトカインにより、プロスタグランディンという活性物質の分泌が促され、頭痛や疼痛を起こしたことを示しています。そして、体温上昇のために必要な悪寒も記載されています。つまり、太陽病の条文の中には、生体防御の初期段階が、非常に正確に描写されており、さて、生体がなぜこのように体温を高める作戦に出るか

というと、これには二つの理由があります。一つは、体温を高めることによって、貪食細胞の集合を促進すること、もう一つは、病原体の増殖を抑制することです。つまり、感染症初期に於ける発熱は、悪いことではなくて、生体防御のために必要な現象であります。体温を高めるという目的を達して、もはや、高体温を維持する必要がなくなると、体温が高いとそれだけ体力を消耗することになりますので、生体は不必要な高体温は急速に低下させなければなりません。そこで先ず皮膚表面の血管を拡張させて体熱の放散を図ります。さらに、発汗が起こり、気化熱によってさらに効率を高めます。発熱した時、汗が出ると熱が下がることを経験されたと思いますが、発汗は体熱放散の機序が働いたことを示しているのであります。

発汗して解熱してしまつと、戦いは一段落したことになる

ります。この段階で決着がつけば病気は治癒しますが、これで決着がつかなければ、戦いは次の段階に進みます。生体防御の第二段階です。必要があれば、発熱によって、貪食細胞を召集しますが、この段階の主役は、抗原抗体反応を中心とする免疫反応が演ずることになります。病原体は、抗原認識を役目とするマクロファージによって貪食され、その抗原構造を調べられます。その抗原構造の設計図は情報として、免疫防衛軍の参謀であるヘルパーTリンパ球に伝えられます。ヘルパーTリンパ球は、その情報を、ミサイル部隊であるBリンパ球に指令として伝えます。Bリンパ球は、その指令の設計図に基づいて、その抗原構造に合ったミサイル、つまり抗体を作り出し、標的抗原にむけてミサイル攻撃を開始します。この時の戦いは、地上軍である好中球、マクロファージなどと、ヘルパーTリンパ球の指令を受けた直属の戦闘部隊であるキラーTリンパ球軍団と、Bリンパ球のミサイル軍団のすべてが参加する総力戦になるのです。通常は、この戦いで生体側が勝利をおさめることになるのですが、激しい戦いによって荒廃した生体を修復しなければなりません。この修復の中心は、国の戦争であれば、経済を復興させて生産力を高めることになり、ますが、病気の場合は、先ず消化器機能をしっかりさせて、栄養分の補給を効率よくすることになります。そして、体力が回復すれば、本当に治癒することになりますが、体力が回復しないとそのままじり貧で死亡することになります。

(七) 傷寒論の対応

さて、生体防御の仕組みを簡単に説明したわけですが、傷寒論が示している対策を生体防御の面から考察してみましよう。病原体が侵入した初期の戦いを「太陽病」ということは既に説明しました。太陽病で使う処方傷寒論では次のように指示しています。

「太陽病、項背強ばること凡几、汗なく悪風するは葛根湯之を主る」

「太陽病、頭痛、発熱、身疼、腰痛、骨節疼痛、悪風、汗なくして喘する者は麻黄湯之を主る」

このように、太陽病で使う処方代表が、葛根湯と麻黄湯であります。では、何故葛根湯や麻黄湯を使うのか。どのような作用機序であるかを、現代医学的知見から説明してみましよう。

先ず、葛根湯と麻黄湯に共通して中心となっている生薬は、麻黄と桂枝であります。麻黄にはエフェドリンが含まれていることは、周知の事実であり、麻黄の薬理作用の大部分はこのエフェドリンの作用であると言えます。現代医学的に認められている麻黄の作用を要約しますと、交感神経興奮作用、気管支痙攣の解除作用、発汗作用であります。一方、桂枝の精油成分には、皮膚の血管を拡張させ、体表面の血液循環量を増大するという作用があります。

さて、生体防御のところ、病原体の侵入に対して、生体は好中球等の集合を早めるために、体温を上昇させると述べましたが、この段階に麻黄を作用させますと、交感神経の緊張により皮膚末梢血管を収縮させ、心拍出量を増加

させて体温上昇を助けることとなります。次に解熱する段階になりますと、桂枝の末梢血管拡張作用により放熱を助けます。また、末梢血管が拡張すると、麻黄の発汗作用が発揮され、発汗により体熱放散を促進します。麻黄と桂枝の組合せは、この様に協力して体温上昇、発汗、解熱という生体防御の初期段階に必要な生体条件を導き出す作用に貢献していることとなります。漢方薬は、直接病原体を排除する作用はありませんから、このように生体防御を助けるという形の治療を行なっていることは、まことに合理的であると考えねばなりません。しかも、麻黄、桂枝の組合せは、体温上昇過程に使用する必要がありますので、決して発汗という解熱機転が働いている過程に使用しては不合理であります。この点も、傷寒論には「汗なくして」と、無汗の状態を指示しております。現代医学的な生体防御理論が全く無かった時代に、経験的に使われた処方が、現代医学的に検証しても極めて合理的な働きをしていることに驚かされます。

発汗が既に始まっていれば、解熱機転が働いている状態であると考えられます。「太陽病、頭痛発熱、汗出で悪風の者は、桂枝湯之を主る」という条文があります。太陽病の中風の特徴は、「汗出で悪風」ですから、これは解熱機転が働いている状態と考えられます。この時の「悪風」は、汗が出て、体表面が濡れているときに風に当たると、ゾクツと寒けがするわけで、この寒けを示しています。この場合は、既に解熱機転が働いているわけですから、麻黄と桂枝

の組合せは必要ありません。つまり、麻黄による発汗作用は不要となっております。桂枝によって皮膚末梢血管を拡張させるだけで十分です。だから麻黄を含んでいない桂枝湯を使うのです。この段階は、戦いも終わりに近づき、戦うより戦後処理、つまり体力の修復が必要な段階と考えられます。そこで桂枝湯には、芍薬、大棗、生姜という胃腸を補強する生薬が含まれているのであります。

葛根湯と麻黄湯を比較してみると、葛根湯には芍薬、大棗、生姜という桂枝湯と同じ戦後処理の生薬が含まれています。これは、麻黄湯は、後方の補給部隊の必要はなく、戦闘部隊だけで戦えばよい状態であるのに対して、葛根湯は、後方の補給部隊の援助を受けながら戦わねばならないことを示しています。このような力関係を漢方医学では重視しており、麻黄湯は「実証」、桂枝湯は、「虚証」というように、「実と虚」の概念が処方を選ぶ基本的な考え方となっております。葛根湯は麻黄湯に比べればやや虚、桂枝湯に比べれば実という位置づけになります。

生体防衛の第一段階である太陽病で決着がつかなければ、抗原抗体反応も加わった第二段階に移行しますが、傷寒論ではこれを「少陽病」と呼んでおります。傷寒論には「少陽の病たる、口苦く、目眩くなり」とありますが、第二段階に特徴的な症状はありませんので、この程度の記述しか出来なかつたのでしょう。しかし、少陽病の代表的処方である「小柴胡湯」は、現代医学的に、免疫賦活作用、免疫調節作用、消炎作用、活性酸素消去作用などが証明されています。

このことは、抗原抗体反応を促進させる（免疫賦活作用）と共に、局所に集合した好中球を抑え（消炎作用）、好中球が放出した活性酸素による組織の障害を修復（活性酸素消去作用）させることが必要で、そのために小柴胡湯の「消炎作用」が必要になってくるのであります。つまり、戦闘は持久戦に入っていますので、戦いの中心は、抗原抗体反応であり、好中球等は、補助的に戦いに参入すればよい時期です。好中球がやたらと活性酸素という鉄砲をぶっぱなすと、味方や住民まで傷つけてしまいますので、好中球の働きをコントロールしなければなりません。このコントロールが、消炎作用、活性酸素消去作用に該当しています。

このように、感染症に対する傷寒論の対処方法を、現代医学の生体防衛理論から検証してみると、極めて合理的に出来ていることがよくわかります。これが、科学的な知見の積み重ねがなかつた二千年近く昔に、経験だけから生み出されているのですから、全く素晴らしい先人の知恵と驚嘆するばかりであります。

III
小説・自伝史

部屋

杉山武子

佳代がその男と同棲まがいの生活をするようになったのは、決して彼女の望んだところではなかった。キッチンと閉めなかつたばかりに、わずかの扉の隙間からジワジワと煙が入り込み、やがて部屋中に充満していくように、男はいつのまにか佳代の部屋に入り込んでいたのである。

その男は最初から、佳代の部屋に入り浸りになることはなかつた。彼女が仕事から帰ってくる頃を見計らつたようにフラリと現われ、おすおすと玄関口に佇み、佳代の方から「どうぞ」と声が掛かるまでいつまでも立っていた。許しをもらつて上がり込むと、佳代ととりとめのない話をしたり、佳代が黙つてする細々した家事をただ見ていた。そうして何か満足らしきものを得ると、あっさり引き上げた。鍵がなくても自在に出入りできる巧妙なやり方だった。

黄金という名前のついた大型連休の間も、市民サービス向上をうたう市の方針で佳代の勤める図書館は開館を続けた。一つの係りでローテーションを組みながら、交代で休暇をとるのである。連休が終る頃、佳代は三日間の休暇を利用して気ままな一人旅に出た。

休暇あけの勤務は、運悪く残業となつた。佳代がいつに

なく疲れた体でアパートに帰り着くと、間もなく男が現われた。帰るのを待ち受けていたのかもしれない。追い返すために口をきくのもおつくうで、佳代は一瞥しただけで男を無視した。男はそれは無言の了解と受け取つたのか、「どうぞ」と言われもしないのに佳代に続いて玄関に入り込むうとした。佳代はむつとした。

「勘違いしないでください。私は上がつてくださいなんでひと言も言つていませんから」

「そう、そうでしたね」

いつもは物静かな佳代の棘を含んだ言い方が効いたのか、男は慌てて一步退いた。スキを見せるとだんだんつけ込んでくるこの男の性癖が、佳代には見えていた。あくまでも男は闖入者であり、ここの生活の主導権は自分の側にあることを、男にはつきり分からせる必要があると思つた。いつもとは勝手の違う佳代の様子に男は狼狽したが、やがて時には餉猫のようにおとなしくふるまうことが、佳代の気分を損ねないということを得得したらしかった。そればかりか、男は帰りたくない時には佳代におもねることに何の躊躇も示さなかつた。その発見は佳代を大いに驚かせた。

佳代は珍しい置物でも眺めるように、この闖入者を仔細に観察するのだった。やがて佳代は意識的に情を介さず、この男とどこまでも無機質な関係を貫くことを自分に課した。それは初めての理科の実験に立ち合うときの、中学時代の高揚した気分を佳代に思い起こさせた。佳代の生活の領域を決して侵さぬことと乾いた関係であること。この二つが佳代と男の奇妙な関係のうちにできあがった、暗黙の規範であった。

佳代は図書館勤めを気に入っている。生来本好きなのと人見知りの強い性癖なので、学生時代に必要な資格を取って迷わずこの職業を選んだのだった。県庁所在地にある市立図書館の試験を受け、就職と同時にあっさり家を出て独立した。故郷を捨てるとか、親の庇護を拒むとか、そんな大層な理由などあるわけではなかった。自宅から通える距離ではあったが、就職したら家を出て自活しようと、いつの頃からか決めていたことを実行に移したまでのことだった。佳代が勤めるようになって間もなく、図書館にもコンピュータが導入され、業務内容も一変した趣があった。来る日もくる日も端末機に向かう日が続いた。しかし佳代はそれが決して嫌ではなかった。命令に忠実なコンピュータの正確無比さが好きだったし、人間相手の煩わしさのない仕事は何より気に入っているのだった。

長く目録係にいた佳代が閲覧係に異動になり、当番でカウンターに出ることが多くなった。貸し出し業務のこともあればレファレンス業務の場合もある。カウンターに座る

ことに佳代は最初戸惑いを感じたが、レファレンス業務は好きだった。利用者から寄せられた質問事項を徹底的に調査して、自分でも満足のいくような回答が用意できた時など、今までにない仕事の面白さと充実感を覚えた。

男がいつ頃から図書館に出入りするようになったのか、佳代はよくは知らない。男はエアコンのよく効いた一般閲覧室に朝から入り浸りのことが多い、いわば常連の一人だった。身なりは学生風でも、若くはない。平日の昼間に見かけることが多く、勤め人でもなさそうだった。退職して余暇を過ごすに身分にしては、あまりに若すぎた。そんなわけで、影の薄いつかみ所のないその男は、無数の利用者の中でも逆に目立つ存在だった。貸し出しに必要な図書館の利用券を作るためには身分の証明がいるが、ただ単に入館して図書や施設を利用するだけであれば、年齢も性別も職業も国籍すら問われない。それが公共の図書館のいいところでもあった。佳代が知る限り、男は一度も本を借りて帰ったことはなかった。

だからある日、男が図書館の利用者という顔をしたまま佳代の後をつけ、帰宅した玄関先にぬくと現われた時も、佳代はさほど驚かなかった。ずっと以前からの顔見知りというところが、佳代の警戒心を緩めていたのかもしれない。図書館の利用者はみな本好きで、本好きな人に悪い人はいないという単純な見方に、佳代もほとんど疑問を差し挟まない一人だった。

男が最初玄関口に現われた時、佳代はてっきり仕事の用

事と思つた。もしかしたら、いつか男から質問のあつたレファレンスの回答が不十分だつたのかもしれない。佳代に思いあたる節としてはそれ位だつた。しかしそれなら図書館に来ればよいはず。気味が悪くなつて帰つてくださいます言おうとしたその時、男が下手な愛想笑いを作つた。

「お邪魔じゃなかつたら、少し話をしてもいいですか」

いかにも気の弱そうな、人の良さそうなさぶりだつた。この時、早く追い返そうといつとい今しがたの意識を裏切つて、佳代の気持はふと別の方向へ傾いた。自分の気まぐれが自分でも不思議だつた。

「ごつそ、短時間なら、散らかっていますけど」

男が上がつたあと、玄関の戸を思いつきり開け放しておくために、佳代は自分のサンダルの片方をドアの下に挟み込んだ。そして部屋に戻ると、窓のサッシ戸を勢いよく開け放つた。窓からは、まだ僅かに西日が差し込んでいる。開け放つた二つの開口部から開口部へ、蒸れた空気の異動する気配があつた。狭いアパートの右にも左隣りにも筒抜けの、風通しの良さだつた。

「そんな、ぼくは怪しい者じゃありませんから」

佳代は男と向かい合つて座るのも変な気がして、台所に立つた。その間、男は佳代の文庫本と新書ばかりが並んだ木製の本棚をのぞいていた。佳代は男に茶を勧めながら、たいた本は持つていませんから、と弁解がましく付け加えた。

「単行本なら、勤め先にいくらでもありますから」

男は佳代がしゃべつたことでいくらか緊張がほぐれたのか、口元を緩めた。

「ぼくもその主義ですよ。金もないし、個人で蔵書を揃えるつたつて限界がありますしね。第一無駄なことですよ。もつと国は税金でどんどん図書館を建てるべきだ。そう思いませんか。この国は文化に金を惜しみすぎるんですよ」

男は自説を披瀝すると、食卓を兼ねている一つきりしかない小さなテーブルの前に正座し、それでは遠慮なくと言つて、片手で音を立てて茶を啜つた。その動作はひどく年寄りじみて見えた。佳代はこの部屋で一番大きい家具である窓際のソファアに掛けて男を観察したが、一向に男の正体が掴めなかつた。

「あなたは独身者のようですが、こんな所で一人つましく暮らしているのは、何か目的があつてのことでしょう」

人のことより自分はどうかのだと佳代は問い返したかつたが、話を必要以上に複雑にしたくはなかつた。

「目的なんて別にありません。そのことで誰かに迷惑をかけているわけでもありませんから」

余計なお世話です、と喉まで出かかつたのを押さえて、佳代は口をつぐんだ。

「あなたのようにちゃんとした職業があつて、こんな質素な暮らしをして居られるというのは、ぼくのような根無し草の風来坊から見たら不思議に思える」

佳代はこんな質素な暮らしと言つた男の物言いを珍しく思い、風来坊と自己紹介した男の顔を改めて眺めた。しか

し冗談めいた表情はなく、大真面目らしい。

「働いていないんですか」

男はすぐには答えず、ゆっくりと一口、音を立てて茶を啜った。

「食べるために最小限度に、時々ね。働くといえはなるほど聞えはいいが、結局人に使われ、金のために身をすり減らすだけだ。働くことが美德だなんて嘘つばちだ」

男のまなじりがピクリと動いた。

「世の中の人間は、軽薄で、金にしか価値を認めない奴ばかりだ。クズばかりだ。そう思いませんか」

男は語気を強めて、頭から断定した挑発的な言い方をした。さっきまでの気の弱そうな表情はどこにもなかった。

「さあそつでしようか。そういう一面はあるにしても、それが全部だとは言いい切れないと思います」

「それはまだあなたが若いという証拠かもしれないな。世の中の善とか良識とかが、まだ信じられる世代だ。疑うことを知らず、信じることに慣れきっている。しかし若いということほど不安定なものはない。一番危険な時期ですらあるのだから」

男は反論を待っていたと言わんばかりに声高になった。

「あら、それこそが若さの特権ではないんでしょうか。若いからそこ何にでも挑戦出来るし、失敗も恐くないし、立ち直りも早いから」

佳代は対抗心がもたげてるのを感じた。

「失敗も恐くないし、立ち直りも早い……」

男は佳代の言った言葉を独り言のようになぞると、視線を落としたまま、ふつと唇をゆがめて笑った。

「若いということは一美にいいことだ。しかし全ては空しい。若さが人を盲目にする。光陰矢のごとし、だ。時間ほどあてにならぬものはない。若いからとうつつをぬかしている

その間にも、時間は容赦なくその指の間からこぼれ落ちていくのだから。若いという自覚は、無限の時間を自分の手で弄べると錯覚しているだけのことだ。だから若さなんて危うい不確実なものに過ぎない。そう考えるほうがよほど現実的だと思えますが、違いますか」

男はほとんど佳代を見て話すことはなかった。言い終わると、その薄い唇の片隅にかすかに満足の表情を浮かべた。あえて言い返す気力も起こらず、佳代が話を打ち切るように立ち上がったのをしおに、男は辞退の言葉を残して帰っていった。それが男の最初の訪問だった。

それ以来、男の来訪はだんだん頻繁になつていき、佳代の生活の上に点々と染みを付けるように、佳代の意識の中にも消し難い印象をばらまき続けるのだった。男は予告もなしにフラリと現われて、思い出したように食事時になると引きあげる。男だけが二時間ばかりしゃべり続けることもあった。しゃべることだけが自分の仕事といわんばかりに。やがて身の上話とお説教を佳代が最も嫌うことを、男は経験的に習得したらしかった。話に昂じると男の慇懃な態度のほころび目から、時折横暴さと意気地なさが見え隠れした。

訪問の回数が増え、男の口調の中にかすかに馴れ馴れしさが加わると、佳代は時折男を冷たくあしらうこともした。それでも男は佳代の精神状態を見透かす本能に長けているのか、つかず離れずといった距離と時間のバランスを巧みにとって、間を置いて不意に現われる。男に監視されているような生活だ。佳代はそう気付くと、急に男が疎ましくなった。我慢できなくなった。

「もう、ここへ来ないでください」

ある日佳代は男に率直に切り出した。唐突に投げられたその一言は、男にとつて予想外のことだったのかもしれない。一瞬のうちに強ばつた男の表情がそれを物語っていた。「なぜですか。ぼくが何かいけないことをしたでしょうか。ただあなたと話がしたいだけなのに。気に障ることがあつたら言ってください。そいつは困つたな。来ないでくれと言われると、ますます来なくなる」

男は芝居じみていると思えるほど狼狽し、困つた困つたと、擦り切れたエンドレス・テープのように際限なく繰り返した。嫌だ、と声高に詰め寄られるかもしれないという佳代の予想を見事に裏切つて、男は女々しさを最大の武器として反論を封じようとしているかのようだった。困つた困つたと呪文のごとく繰り返される男のその間の抜けた声は、佳代を苛立たせ、神経を逆撫でした。

「分かりました、分かりました。だからもう黙っててください。私はただ、誰からも束縛されることが嫌いなだけです。私は自由でいたいんです。自分の生活を乱されたくない」

です。それにベタベタした関係が嫌なだけです。今は一人でいたいんです。だから今日は帰ってください。そして私の言ったことが守れないのなら、二度と来ないでください」

男の表情が解き放たれ、ゆるゆるとかすかに明るく変化していくのを佳代は見た。その時になってようやく、佳代は男の反応の仕方をひとつ学んだように思った。否定的な話し方はあの男にとつては全く逆の効果をもたらすのだということ。そればかりか感情的な反発はこちらの弱点を引き出させる、格好の材料を与える結果になるとも。

男が背中を嬉々とした素振りを残して去るのを見届けると、佳代は開け放つていたドアを閉めて、ソファーにどつと倒れ込んだ。戦わずして負けた、そんなはぐらかされたような苛立たしさだけが残つた。無性に悔しかった。来るたびに、男が残す染みはだんだん広がっていくのが佳代には分かる。男は佳代が許した範囲で巧妙に佳代の生活に入り込み、見えない根を下ろし、広げつつあるのだった。

佳代はソファーに仰向けになり、天井を見ながらゆつくりとあの男の行動の記憶を辿つてみる。来るのが頻繁になつたとはいつても、あの男は佳代が煩がるほどにはやってこない。もうそろそろ現われる頃だという時期をほんの僅かにずらして、フラリと現われる。もう来ないのかもしれないと思う、その微妙な心理の隙を衝いてくる。佳代の心の内をすつかり見透かしているかのよう。

就職して十年続けてきた一人暮らしの単調さに、佳代自身少し飽きていたのかもしれない。猫でも飼おうかと真剣

に考えていた頃だったので、その男の出現が佳代にはさして異様にも思えなかったのである。実際、男は表面的には佳代に対し紳士的にふるまっただし、話し相手としては決して退屈しないだけの豊富な話題の持ち主でもあった。普通の若者たちのように、二人で楽しくはしゃいだりふざけあったりすることもなく、恋人と呼べる関係でもない。付き合うという表現も当たっていない。考えれば考えるほど、佳代は不思議な気がした。あの男に好きと言えるだけの感情を持ったことはなかった。かといってまるきり嫌っているわけでもない。では何なのか。問うてみても、佳代にははっきりした答えは出せなかった。あの男はなぜ私に近づくのか。漠然と今日まで来て、全てが曖昧な状態の中に漂っている。私の言いなりになるように見せかけて、あの男は、本当は自分の手の内で私を逃がさぬように泳がせているのかもしれない。

でも、と佳代は思う。今の私には血縁のように濃い関係も、恋愛のように苦しく張りつめた関係も、疎ましいだけなのだ。他人より近く友人より遠い関係。思い出なんかに残らない、水のように風のように、何の痕跡も残さないそんな人間関係が欲しいと思う。例えばあの男は、私という部屋に気紛れに飛び込み、よどんだ空気を掻き混ぜ、再び去って行く一陣の風のような存在なのだ。そう思うことで、佳代はいくらか安堵した。

男は佳代より五、六歳は老けてみえたが、時には十歳くらい年上を感じることもあった。佳代が強い男の年齢を

聞かなかつたのは、見返りに自分の年齢を明かす煩わしさを避けるためでもあった。だからある日、男が四十という自分の年齢を口にした時も、さして驚かなかつた。塾の講師をやったりその日限りの仕事にいたり、自分一人の口過ぎをしていると男が漏らした時も、佳代はほとんど興味を示さなかった。

「ぼくも相当変人だが、あなたも変わった人だ。ぼくを買って買っているのか、よっぽど警戒心がないのか」

ある日、とつとつ痺れを切らしたように男は言った。自分が思っているほどには佳代が男に関心を示さないのが意外なのか、不満らしい口振りだった。

「あなたの個人的な事情になんか、全然興味がないんです。単なる図書館の職員と図書館の利用者。それで充分ですから」
ほとんど抑揚をつけずに、佳代は思っている通り口を口にした。少し煩わしくなってきたのを感じた。馴れがやがて情を生む。情を介した人間関係ほど、今の佳代が回避したいものはなかった。知り合っても、他人という距離のままの関係、無関係という関係をなぜ人は続けられないのだろうか。馴れ親しむことが常にいいことだとは限らないのに、人はどうしてそれをほつきりと言わないのだろうか。そう考えて十年も一人暮らしを貫いた自分が、とつとつとこの誰とも分らない男を自分の城に引き込んでしまった。その事実に入念に負けた自分の弱みを見たようで、佳代は自尊心がチクチクと痛むのを感じた。佳代が馴らされたのか、男が馴れたのか。男の存在は以前からあった家具

の一つか、壁に掛ければなしの一枚の絵のように、いつの間にか佳代の部屋に馴染んできているのだった。

そんなある日、男は自分の身の回りの品を佳代の部屋に持ち込んだ。着替え用の衣類、剃刀、歯ブラシ、小さな鏡、磁石、石けん、数冊の文庫本、手帳……。正午近くまで浴びるほど睡眠をとって、佳代がようやく起きて身づくろいをしたばかりのある休日。無防備なほど気持がほぐれた午後。古びたリュックを背にして男が現われたのはそんな時だった。男はリュックを下ろすなり嬉々として中身を取り出し、自分のまわりに扇のように並べたてたのだ。

「まさか、ここに居候するつもり？」
「昼間だけでいいんです。ぼくの所より居心地よさそうだから」

男は佳代の反応にさっと目を走らせた。
「余分な心配はご無用です。ピルの夜警の仕事を見つめただからね。夜はあなただけの部屋だ。ぼくに気兼ねすることもないし気を使う必要もない。ぼくがいても無視して構わないから。この日当たりが実にありがたい」

男は妙な理屈を並べた。ここで負けてはならないと、佳代は威勢よく口を開いた。

「私は同棲する気なんて全くありませんから」
「同様。まさかそんな。ただ昼間に留守番に来るだけですよ」
男は叱られた子猫のように驚いて肩をすぼめ、ヒュウと弱々しいため息をつく、広げた品物をまたリュックに納めた。佳代は自分が残酷なことを口走ったよつな錯覚に陥っ

た。

「本当に昼間だけの約束なら……」
不意に口走ったその考えは、佳代の起き抜けのぼんやりした意識に方向を与え、佳代の緩んだ気持の中に巧妙に滑り込み、やがて佳代自身がその考えに寄り掛かった。

奇妙な生活が始まった。

男は佳代の出勤に合わせるように現われ、佳代が出勤すると中からドアの鍵を掛けた。仕事を終えて佳代が帰宅すると、男はたいていゴロリと畳に寝そべり、文庫本を読んでいることが多かった。佳代は男の存在を気にしないように努めた。そのうち、全く男を無視して、普段のように洗濯や掃除をすることにも慣れた。一時間ほどして男が夜警の仕事に出かけると、佳代は一人分の夕食を作って食べた。相変わらず男は部屋の鍵を持っていなかった。鍵は決して渡せなかった。持たせることは同棲を意味する。持つていなくてもうまく入れ替われば、鍵は必要なかった。そのかわり、佳代は残業もそこそこ切り上げ、職場の付き合いいにもほとんど出ないで帰った。それを不都合とも不便とも思わなかった。男もこの居場所を失うのは損と計算してか、佳代の機嫌を損うようなことはあえてしなかった。

ある日、断れない同僚の送別会に出席した佳代は、一次会だけ出て帰宅を急いだ。男が出かける前に家に着くことばかり考えて、結婚退職する同僚とゆくり言葉も交わさずあたふたと別れた。ドアを開けると、案の定、男が玄関に突っ立っていた。

「さすがですね。遅刻せずに済みそうです」

男の皮肉っぽい口上にも答えず、顔も見ず、佳代は手のひらを振って男を外に出すとドアを施錠した。少しアルコールの入った体で走ったためか、珍しく酔いを感じた。軽い頭痛もする。ビールのあとの日本酒がいけなかったのだろうか。明日が休日という気の緩みに体がいち早く反応している。佳代はノロノロ着替えると、顔を洗うため洗面所へ立った。あくびが立て続けに出て眠気が襲ってくる。

ふと目を開けると。部屋が薄暗い。じつと目を凝らすと安っぽい合板の床がすぐ目の前に迫っている。いつのまにか台所の床に横たわって寝込んでしまったらしい。頭の芯が重い。佳代は起き上がろうとして、体の自由が利かないことに気付いた。体が水でも吸ったようにいやに重たい。もがいても、じわじわと圧迫感が強まるだけで、だんだん息苦しくなる。不意に人の気配を感じた。叫ぼうとしても声が出ない。もしやあの男？ かるうじて首を持ち上げて見ても、男の姿などなかった。諦めて目を閉じると、やはり全身を押さえ込まれている気がする。目を開いてもだれもない。佳代はぼう然として再び目を閉じる。足首にふと熱いものを感じた。佳代は今度はもつと目を閉じた。足首からふくらはぎへと何かがゆっくりと滑っていく。奇妙な感覚がざわざわと皮膚を目覚めさせる。だんだん上のほうへ這っていった。佳代を息苦くさせる。しつかり閉じたまぶたの裏の闇の中に、極彩色の渦が次々現われては弾け散る。宇宙を思わせる幻想の世界。佳代は閉じた目を凝ら

す。佳代は我を忘れた。と、いきなり体の芯から頭のとっぺんへ熱い塊りが突き抜けた。

心臓に衝撃を感じて、佳代はハッと目を見開いた。はつきりと目を覚ました。頭をもたげると、冷たい合板の床ではなく、明るい照明の下のソファーに横たわっている。ゾクゾクと寒気がした。いつのまにか寝入ってしまったらしい。では、あれは夢だったのだらうか。佳代はまだ火照りの残る自分の体の変化を、不思議な気持で受け止める。かすかに痺れている指先を見た。まだ心臓も高鳴っている。生々しい夢を見た佳代は思った。誰かに押さえ込まれていると感じたが、誰も見なかった。酔っ払ったせいで夢までおかしくなったのか。佳代は冷たい水をコップ一杯飲み干すと、再びソファーで眠りに落ちた。

翌日は爽やかな快晴だった。佳代は急いでシャワーを使用中替えた。男が夜警の仕事から帰ってくる前に、とにかく外へ出たかった。男と顔を合わせなくなかった。ドアの鍵はしないまま、佳代は初夏の眩しい朝日の中へ歩き出した。まだシャッターの下りた商店街を抜け、駅までの道を遠回りして散歩を楽しんだ。休日のためラッシュも無い朝のホームには、通勤客とは違う顔ぶれの二、三のグループがはしゃいでいる。ハイキングにでも行くのだらうか。立ち止まって目を閉じると、頭の芯にまだかすかに痛みを感じる。昨夜のアルコールのせいだ。佳代は拳で軽く後頭部を叩いて、首を数回まわした。目を開けると駅の案内板に目が行った。佳代は不思議なものを見て、その一点に思わ

ず目を凝らした。

何か模様のようにもあり、物体のようでもある。一、二歩近づいて、その奇態な物体を認識しようと佳代は熱心に見つめる。やがて佳代は頭にカツと血が上るのをはつきり感じた。鮮やかな斑紋のある翅をたんで足をしつかり梓木に食い込ませ、左右対称に向き合つてぶら下がった二匹の大きな蛾だった。しかも膨らんだ尾の先端と先端はしつかり合わさつている。Vの字に見えていたものはこれだったのか。佳代は蛾の交尾を目撃したのは初めてだった。見てはならぬものを見たような、暗然とした気持が佳代を襲つた。目を逸らそうとして離せない。静止して、ピクリとも動かない二匹の蛾。じつと見ているうちに佳代の中に、不意に押さえ切れない感情が突き上げた。気が付くと、佳代は地面に落ちていた小さな木切れを掴み、夢中で二匹の蛾に振り下ろし、引き離し、梓木から落としていた。

あの変な夢がいけないのだ。家を出てもう正午になるほどの時間が経つているというのに、何だか夢の中の続きのように気持が落ち着かない。疲れ、苛立つている。佳代はそれを二日酔いのせいにした。ぼんやりとあちこちを歩き回り、大きな噴水のある公園に着いた。上昇する水と落下する水の表情の違い。陽光を受けて飛び散る飛沫。佳代はぼんやりと水の循環を眺める。その時、佳代の視野の隅に白いワイシャツの若い男が現われ、ゆっくり近づいてきた。長袖のシャツを肘のところまで無造作にまくりあげている。その若い男は噴水と佳代の間立ち止まると、佳代に背を

向けて噴水を見ている。陽気に誘われて近くのオフィスから出てきたのだろうか。机の前に座らせているのは勿体ないような頑丈そうな背中が、佳代の視野の中央を占めた。

佳代の目線より少し高い肩先。噴水を見ていた佳代の目がいつのまにか白いワイシャツに注がれている。まくりあげた袖からのぞく日焼けした腕の太さ。それに続く逞しい二の腕を想像して、佳代はハツと一歩退いた。どうかしている。そう思いながら、佳代はなおも厚みを感じる肩先を食い入るように見つめた。見つめながら佳代は突然、目の前の広い背中に飛び付きたい衝動を感じた。チリチリと指先が痺れ、その両手で火照つた頬を押さえた。胸が高鳴る。しゃがみ込みそうになるのを、必死で耐えた。初めて押寄せた荒々しい感情に、佳代自身が驚き戸惑つていた。一体どうしたのだろうか。力の抜けた二本の足を操りながら、佳代は白いシャツから自分を引き剥がすようにそこを立ち去った。

全ては昨夜の夢から始まったのだ。きつと男を部屋に引き入れていることがいけないのだ。私は何と馬鹿なことをしているのだろうか。一人暮らしの鉄則を自ら破っている。どうすればあの男を追い出せるのか。佳代はそればかりを考えて、街中をあてもなく歩き回つた。日差しがようやく衰え、陽が傾いてきた。いつのまにか再び駅に来ていた。佳代の足は自然に案内板の方へ向く。朝の現場を見届けなければならぬ気がした。佳代は無表情に見下ろした。破れ、ちぎれた翅。ひしゃげた胸。破壊され、ひからびてこ

ミのように風に弄ばれている二つの蛾。足元に散らばる死骸を見ながら、佳代は唇を噛んで自分の残忍さをじつと見つめていた。

男が仕事に出たあとにアパートに帰って、夜の間に男の持ち物を一つ残らずゴミ袋にまとめて外に出しておこう。部屋も掃除しよう。もう二度と男を部屋に入れまい。こんな奇妙な関係は今日でおしまいだ。佳代はそこまで考えつくことやつと気持がせいせいして、アパートへ戻った。男はもう出勤している時間だった。部屋に明りがついているのが気になって、佳代はドアの前で一瞬躊躇した。鍵は持っていたし掛かっているはずだ。気持を立て直して、ドアを勢いよく開けた。

佳代は思わず息をのんだ。いきなり男と目が合った。肘枕に乗せた顔をドアに向けて、長々と寝そべっている。

「一日中家を空けるなんて、物騒ですな。ぼくが留守番をしていたから良かったようなものの」

男がなぜそこにいるのか、佳代には理解できなかった。

「きのうクビになった。主任とかいうくらだん男と大喧嘩だ。もう奴の顔を見る必要もない。せいせいしたな」

佳代は驚きのあまり声が出なかった。佳代の頭の中で、たった今まで考えてきたプランが一瞬のうちに瓦解した。

「僅かの金のためにあれこれ命令されるなんて真つ平ごめんだ。ここで寝そべっている方がよっぽどましだ」

男は愉快そうに笑いかみ殺すと、玄関に突っ立ったままの佳代をジロリと下から見上げた。

影武者

外岡立人

(一)

クローンという言葉を野崎秀生が初めて知ったのは高校三年生の生物の時間だった。英国でクローン羊が誕生した話を教師が説明してくれたのだ。

すっげえ。そんなら俺らのクローンを作ってもらえば、俺らは不死身だなあ。

授業が終わった後、そんな類の会話が仲間の間ではずんだ。まだ思春期盛りの年齢だった。漫画をたらい回ししながら騒いでいるに等しい会話だった。

ただ自他共に国立大医学部合格間違いなしと思われていた、学年トップの数山だけがみんなと違った。

僕らのクローンが出来たら、僕らのアイデンティティーはどうなるんだ。大変なことだぜ。

秀生たちはアイデンティティーという言葉を知らなかった。きょとんとして、みんなで数山の顔に目を向けていると、体だけでなく、心も同一化してしまっただらどういふことになるんだらうね、僕たちは。

数山はそう言うと言目な表情で考え込んだ。

みんなも数山の話の話を聞くと、急に黙り込んでしまった。学年トップの秀才が考え込んだのだ。何となくこれは単純に受け入れることの出来る話でないことを悟ったのだ。

入試の山かなあ？

野崎秀生は白けた場を取り戻すように、冗談っぽく言ったが、数山は少し哀れんだ表情を秀生に見せただけで、そのまま場から去った。

数山は猛烈な勉強家でなかった。部活の弓道部では主将をつとめ、先月にはインターハイにも行っている。そして休みごとに、ふらつと海外に一人で出かけ放浪している。英語はもちろん、フランス語も片言程度なら通じると聞いた。女友達も何人がいて、すでにあつちの方は済んでいるという噂もあった。

その数山が入試のための勉強を特にやっているとは思えなかった。むしろ秀生の方が入試を意識した勉強に時間を費やしていたはずだった。

数山の秀生に向けた表情は、しばらく秀生の脳裏から離れなかった。

自分が哀れに思えた。成績で勝てないのは気にならなかった。ただ自分とは次元の異なるところで、数山が思索していることに耐えられなかったのだ。

秀生はそれからセンター試験の直前まで入試のための勉強はしなかった。哲学書や文学全集を読みあさった。数山に追いつきたかったのだ。

それが効を奏したのか、最後の校内模試では学年十番以内に入ることができた。理由は秀生にも良く分からなかった。ただ自分自身に前よりも自信が持てるようになっていた。

周りの仲間はしきりに羨んで、何か秘訣でもあるのか、あるなら教える、と迫った。秀生は何もしてないさ、と笑ったが、そのときあの数山の心が見えた思いがした。

夜も寝ないで受験勉強に埋没している仲間たちが本当に哀れに思えた。秀生の仲間を見つめる視線は、あのとき自分に数山が向けた視線と同じものに違いなかった。

結局、野崎秀生は数山と同じく地元の元帝大に合格した。数山はもちろん医学部だったが、秀生も難関の一つである獣医学部に入学した。

そのような思い出があったから、クローンという言葉や聞くとそれはいつも数山とリンクした。

英国でのクローン羊誕生以来、獣医学の分野ではその方面での研究が盛んに行われるようになっていて、大学の講義でも良く取り上げられた。そのたびに数山の言ったアイデンティティという単語が、秀生の脳裏を横切った。

理論上、肉体の上では全く同一ではあるが、心も同一なのかは教科書の上でも講義でも論議されていなかった。

一度それを繁殖学の教授に質問してみたことがあった。

心ねえ。

そう言いながら教授は少し胡散臭そうな目つきで秀生の顔を眺めた。

講義で秀生がよく寝ているのを知っている顔つきだった。前期の試験もそれほど良くは無かった。

家畜の繁殖に心は関係が無いからねえ。

そう言う学生達が爆笑した。

獣医学の分野では、そのような研究ってあまりなされていないのでしょうか？

秀生は少し頬を赤らめながら質問を続けた。自分の質問がそれほど学問からかけ離れた愚問だとは思えなかったのだ。

さあね。獣医の分野では聞かないねえ。心理学か医学の分野での問題なのかも知れないがね。

そう言うて教授は話題を変えようとしたが、思い出したように付け加えた。

クローンを作るといふのは君が考えている以上に難しい技術なんだね。そんな事を考えている余裕なんて、みんなないよ。

そのとき明らかに侮蔑的な笑いが教授の口元につかんだ。マスコミでも有名な教授だった。

秀生は格別落胆しなかったが、医学の分野という言葉が

ふたたび数山を思い起こさせた。

僕らのアイデンティティーはどうなるのだろうか？ あのとときそう言った数山は確かに天才的閃きを持っていた。秀生はそう確信していた。

その一年後、クローン豚の誕生がその繁殖学教室から発表された。国内で三番目の報告だった。

(二)

野崎秀生は獣医学部を卒業すると、地元の乳業メーカーの研究所に就職した。成績はそれほどのものではなかったから、教授に大学院への進学を勧められはしなかった。乳業メーカーというものも、獣医学部卒業生の中では必ずしも良い就職口ではなかったが、秀生は大して気にしなかった。地元でもあるし、かなり大手の会社であったから、一般的意味では就職先としては悪くはなかった。それに両親も喜んでくれた。

その頃になると世界中でクローン家畜作成の競争が始まりだしていた。特に乳牛では盛んだった。良く乳を出す雌牛は、盛んにクローン化されていた。鶏でも実用化されていた。

変わったところでは競走馬のクローンがあった。まだ実験段階ではあったが、これが実用化されると、競走馬の世界はこれまでのように良い血統同士のかけ合わせから、完全に速い馬の実験室内での作成に変わる。垂直に種が植え継がれていくのではなく、水平に種が拡散していくのだ。

そして数年後にはある駿馬のクローンだけの競馬になる可能性もあった。そうなるとう馬の素質は関係なく、調教師と騎手の腕だけの戦いとなる。競馬の本質が変わってしまうのだ。

秀生の研究所でもクローン乳牛は興味の対象となっていた。しかしそれはあくまでも学問的興味であって、手を染めることはなかった。

もっと脂肪が濃い奴ばかりにできたらねえ。

でもそれは飼料の問題の方が大きいからどうでしょうか。

同じ飼料でも脂肪含量の多い乳を出すのが時々いるからねえ。遺伝的な要素も大きいはずさ。

抄読会の後などに他愛のない会話が交わされる程度だった。

そんなある日、衝撃的ニュースが世界中を駆けめぐった。中近東の独裁体制で有名な某国大統領に、クローン技術で誕生した五歳の子供がいると言うのだ。元東ドイツから流れていた研究者たちが陰で協力したという。ニュースは英国の諜報機関から流れたと言うが、その信憑性については定かではなかった。そのせいか各新聞社とも一面の中段扱いだった。

専門家達の談話では、倫理上だけの問題であって技術的には簡単な操作だから、信憑性ある話だと誰もが言っていた。

やはりやっていたかあ。

所長は新聞を広げながら呻いた。

漫画の世界では数年前から良くありましたからね。

高校時代から『クローン』という言葉に慣れ親しんできたせいか、秀生はさほど驚いた表情は見せなかった。

でもねえ。これは恐ろしいことさ。生物兵器で世界侵略を企てるのと同じ次元の話だねえ。

来年定年を迎える所長はしばらく紙面から顔を上げなかった。

自分のクローンを作っていたとしたら、もつといろいろなクローンも作っている可能性があるんじゃないですか。

去年入社したばかりの社員がしたり顔で言った。

いろいろなクローン？

所長は怪訝な表情で顔を上げた。

天才のクローンとか、屈強な兵士のクローンとか、いろいろ応用はありますよ。

君も怖いこと平気で言うねえ。それじゃロボット作りと同じだ。

所長は呆れ顔で彼の顔を見つめた。

科学の進歩は人間も変えてしまつてますよ。必ずしも怖い話ばかりじゃなく、医学的には夢の多い分野らしいです。

その若手社員は相変わらずしたり顔を続けた。

僕の友人の医者の卵が言っていましたけど、小児ガンで亡くなる子供のクローンを作るとか、旦那が癌末期になったとき、旦那の細胞からクローンを作るとか、もつともこの場合は若い奥さんでなきゃなりません、いろいろ計画

はあるらしいですね。

理屈では分かるが、俺の感覚ではついていけない話だねえ。

所長はそう言つて首をひねった。

秀生は黙つて会話を聞いていたが、無性にあの数山の意見を聞きたくなくなっていた。

数山は産婦人科の医局に入つて研究生生活を送っていると、誰かが羨ましそうに言つていたのを覚えていた。

某国大統領のクローンの話は公式ルートで一応否定はされたが、水面下の話題として週刊誌などの紙面をしばらく賑わせていた。

(三)

入社して五年目に野崎秀生は冴子と結婚した。勤める会社の栄養士だった。ミルクの組成について質問に来たのがきっかけだった。

冴子は男なら誰もが思わず視線を向けるほどの美人だったが、意外なことに彼氏はまだいかなかった。秀生よりも四つ年下の二十三才だったが、本人も両親も拍子抜けするほど簡単に結婚を了解した。

父親が役所勤めの堅い家庭のせいか、研究所勤務という秀生は冴子の両親に好感を抱かれたようだった。冴子自身も、長身の白衣姿の秀生に憧れていたと結婚してから言つたことがあった。

秀生にしてみたらこれほどの美女が自分と結婚してくれ

たというだけで大満足ではあったが、派手な顔立ちとは裏腹に冴子の性格は地味で堅実そのものであることを結婚後に知った。

万事控えめで自分から何かを求めるといふことはまづなかったし、他人の前でしなを作るといふ女性特有の本能もうすかった。

しかし同僚たちのやつかみは結構なもので、

あの美女がお前さんにねえ。

などと嫌らしい含み笑いをうかべる先輩はいいほうで、冴子が机に座ったまま居眠りをしてると、

夜に魂を抜かれてしまってるんだらう？ ほどほどにしておいた方がいいぜ。

と言いながら背中を叩いていく同僚もいた。

冴子は子供が出来たら仕事を辞める予定だったが、結婚して二年近くたつてもいっこうに妊娠の兆候はなかった。ときどきそれを匂わせるような体の変調を訴えることもあったが、いつも空振りだった。

早いうちに一人作つた方がいいわよ。

冴子の実家ではいつも母親が二人に向かつて言った。二人とも仕事を楽しく計画的に子供を作らないでいると思つていたようだ。

たしかに秀生と冴子は生活を楽しんでいた。冴子が栄養士仲間と仕事帰りに町に飲みに出たときは、秀生は迎えにでかけた。そして決まって二人でその後行きつけのスナックに寄つた。

ヒデさん、幸せねえ。こんな美しい女性と飲みに来れるんだから。

ママはいつもそういつて二人をからかった。それを聞いている周りの客は、冴子が本当に秀生の女友達と思つたらしく、秀生を一瞥したあと無造作に好色の視線を冴子にはしらせることもあった。

僕は逃げたいんだけどね。でも彼女の方で離してくれないのさ。

秀生は笑っている冴子の横顔を見ながら、酔いにまかせてそんな冗談をよく言った。

あら、そんなこと言つていいの。こんな綺麗な女性、ヒデさんにはもつたないわよ。誰かに取られるかもよ。ママの方も調子に乗つて話を展開した。

最初のうちは冴子に気を遣つていた秀生だったが、冴子が結構そのような雰囲気を楽しんでいるのが分かつてくると、冴子をはさんでママや手伝いの女の子と好き勝手な会話を弾ませるようになっていった。

こうした状態がもう二、三年も続いたなら、夫か妻の方に不倫の兆しが現れるのが一般的だ。

美人の冴子に関心を抱く男たちは社内にも、栄養相談で赴く病院の医師たちにも多くいた。秀生だつてそのスリムで長身の白衣姿は、研究室を訪れる女性社員や栄養士たちの憧れの姿に近いようだった。

しかし二人ともやや内省的性格が幸いしてか、派手に他の異性と交遊するといふことはなかったし、また出来なかった。

そんな頃、秀生は体の不調を感じだした。ちょうど結婚して二年半位たった夏だった。

最初のうちは少し疲れやすい程度だったが、二週間もたつと立ちくらみがするようになってきた。

冴子は心配して食事の献立にも気を遣った。

なに、暑さのせいさ。

秀生はそう言つて気にしてない素振りを見せたが、帰宅後も、週末にも寝転がっている時間がしだいにふえた。

一週間くらい休んだら、ゆっくり体を休めたら回復するわよ。

夜の行為の後、冴子はきまつてそう言つた。秀生の体の不調さ加減が良く分かつたのだ。そしてその行為自体もしだいに減りだした。

一度病院で診てもらつたら？

そのうち冴子は最後通告のようなセリフを吐いた。

秀生は病院で診てもらつてを恐れていた。どこかが痛くて我慢できないとか、高熱がでたとか、急性の症状でなら病院に行かざるをえない。しかし何となくだるいとか、疲れやすく夫婦生活も満足に行えなくなった、などという慢性の症状にはろくな病気がないように思っていたのだ。

獣医学とはいっても人の医学の知識はそれなりに持ち合わせていた。

動物なら寄生虫間違いないんだけど、僕の腹の中に寄生虫でも居座っているのかなあ。

秀生が虚勢を張つて冗談を言つと、

生兵法ね。きちんとした専門医に診てもらつて。いつまでもこのままじゃ、あなたも私も不安な毎日がつづくわ。

冴子は真顔で懇願しだした。

(四)

秀生は大学病院を受診した。

簡単な検査の後で慢性骨髄性白血病疑いという病名を告げられた。ベッドの空きがあつたから翌日入院するように勧められた。

秀生はその病気については良く分かつていた。家畜ならば殺す。治療が奏効して寛解状態が数年つづくが、最後には治療に反応しなくなり死にいたる。家畜でそんな治療を行うなんてことはありえないのだ。

人間ならどうなのだろう。秀生は病院からだと近くの公園のベンチにすわりこんだ。

昔と違い、治療方法は多くあります。すぐ元気になりますから落胆する必要はありませんよ。

診断してくれた内科の講師は微笑みをうかべながら秀生を元気づけてくれた。

でも治る病気じゃないんですね？

上目遣いに講師の顔を見ながら秀生が確認を求めると、講師は秀生の肩を叩きながら、

治る、治らないは結果がでてから決まるものですよ。はじめからそんな事は考えない方がいい。しっかりと治っている人もいますから、我々プロにお任せください。

秀生よりも一回りは年上に見える講師の自信に満ちた鷹揚な口調は、むしろ二十九才になる秀生の猜疑心を膨らませた。

ふと冴子の均整のとれた裸身が脳裏にうかんだ。照明を落とした寝室で、遠慮がちにネグリジエを脱ぐ冴子が横顔を見せた。その冴子が急に他人のように、よそよそしく遠のいてゆくように感じられた。

治らないという結果は、俺が死ぬばそういうことになり、あの医者はカルテにそう書き込むだけのことじゃないの。じゃ、治ったとあの医者がカルテに書き込むのはいつなのだ。

秀生は際限のない迷路を漂いだした。

ときどき冴子が現れた。そのふくよかな頬が少し恥ずかしそうに微笑み、そして秀生の足に自分の足を絡みつけてきた。

秀生は無意識に冴子の体温を呼び戻そうとこころみた。

ベンチの前を幼児の手を引いた若い母親がゆっくりと歩いていった。短めのフレアスカートから細身の足が伸びた。ウエストからヒップへの自然な曲線が息づいていった。冴子と同じだった。

幼児との他愛のない会話が秀生の両耳を通り過ぎた。

若い母親は秀生の方に一瞬顔をむけた。表情は無かった。しばらく秀生は迷路の出口を見いだせないまま漂流しつづけた。

数山に相談してみよう。数山ならもつと明確に答えを出してくれる。

とつぜん秀生は思った。

あのときの数山の顔がくつきりと網膜に呼び戻されていた。

アイデンティティーという、高校生にとつて少なからず難しい言葉を、秀生はあの後図書室で調べた。

自分であること。他人とは違う自分が存在している意識。何十億と存在する人の中で個として自分が明確に存在する意識……。

秀生は哲学書をむさぼりだした。次にそれは文学書にも移った。そうした日常の中で秀生はしだいにアイデンティティーを確立していった。無数に存在する大学受験生の中に、自分は『秀生』として存在していることに自信が持てるようになったのだ。

あの数山は何か良いヒントをくれるに違いない。秀生はそう思いだした。

花壇をはさんだ向こう側のブランコの側に先ほどの若い母親はいた。ゆっくりとブランコの幼児の背中を押していた。立ち上がった秀生に気がついたのか、笑いを残した顔をむけた。

(五)

数山はふたたびクローンという単語を秀生に口にした。

君のクローンを作って、そのクローンから骨髄移植と

いう手はあるね。

数山はそう言つて秀生の目を見つめた。それは医者目というよりも科学者の目に見えた。哀れみとか思いやりといった曖昧な感情はこもつていなかった。

秀生はあの内科の講師よりも数山が信頼できた。今の秀生は感情よりも正統な科学の方が信じられた。現代科学なら何とか自分の病気を治してくれるように思えたのだ。

だから数山が躊躇なく、「グロウン」という言葉を出したとき、体のどこかで、これで俺は助かる、というつづきやきが起こつた。

でもね。それはまだ夢物語に近いんだ。技術的には自信があるけど、大つぴらには言えない。

秀生の目を見つめたまま数山は続けた。視線はあの頃と同じだった。エネルギーのこもつた放射線のように秀生の体内に熱を発生させた。

動物実験ではどうという難しさはないけど、人間の場合はまだ社会が許してはくれないからねえ。

数山は皮肉めいた笑いを口元に浮かべた。

産婦人科の助手室は広がった。四人部屋のところを数山一人が使っているようだった。

具体的にはどういうことをするんだい？

秀生は数山の話が本題から逸れるのを恐れた。

数山は秀生の性急さに微笑みながら立ち上がると、席をソファーに移して秀生と向かい合った。

まあ、先を急ぐんじゃないさ。君の慢性骨髄性白血病

は二、三ヶ月もしたら完全寛解に入る。そして社会復帰だね。でも問題は数年先にくるだろう急性転化なんだ。急性転化がくると化学療法で抑えるのは厳しい。

秀生はうなずいた。知っている。

君のクローンによる治療は遅くても数年先に行えればいい。

数年先？

そう。もしかしたらそのときは社会が受け入れてくれる治療方法になっているかも知れないね。

でもそうでなければ？

数山は首を振った。

公には行つことのない治療方法ということになる。

公には？

秀生の声は少しかすれた。

まあ、今日のところはここまでしておこう。まだまだ時間はある。そのうちまたゆっくり相談しようよ。

そう言いながら数山は時計を気にした。

秀生は二ヶ月ほどの入院で完全寛解に入り退院した。退院後すぐにでも勤務につきたかったが、研究所の方から一ヶ月間は自宅静養するように言ってきた。白血病と聞いて研究所の方でも神経質になったようだ。

その自宅静養の間、秀生はパソコンのクローン作りに熱中しはじめた。

それはことのほか簡単だった。

組み込むパーツ類のロット番号を合わせたら完璧だった。次にパーツを機能させるためのドライバというプログラムをオペレーション・システムに組み込む。そのドライバは進化し、絶えずバージョンアップする。だから同じバージョンのドライバを組み込まないと正確なクローンにはならなかった。

パーツもドライバのバージョンも同じものを使って秀生はパソコンのクローン作りを続けた。

メーカー製の出来合いパソコンはその型番が同じでも、パーツの型番がまちまちだった。パーツメーカーも同一ではなかった。要するに雑種なのだ。雑種は雑種ならではの強さがあるが性格が曖昧だった。ほどほどの機能はもっているが、特徴がなかった。どの部分を取ってみても平均以下でしかない。しかし自分で選んだ好みのパーツを組み込んだパソコンは、自分だけが分かる個性があった。自分だけが分かる個性の輝きを持った女にも等しい。

秀生は最初に作ったパソコンのクローンをまず作った。そして次に、そのクローンを少し進化させた第二世代クローンを作ってみた。第一世代クローンはコンピュータミュージックを聞くために音源やそのためのソフトを工夫した。次にそのクローンを少し改良して動画再生も得意とするクローンを作った。

(六)

パソコンのクローンづくりは野崎秀生を夢中にさせた。

自分でもなぜそんなことをしているのか分からなかったが、元来パソコンが好きだったせいもあり、飽きることはなかった。

無機的なパーツ類に相對していると体の芯から自信がわいてきた。

自分の手によるパーツの組み合わせで、パソコンに命を吹き込めるのだ。パーツを一つでも抜いてしまうとパソコンは昇天した。

秀生は完全にパソコンの主人となれた。パーツたちは無言だったが、いつも秀生を待っていた。そして秀生の手に触れられるのを期待していた。

誰かに売ったら？

冴子は増えていくパソコンを見ながら呆れたように言ったが、秀生は自分の作ったパソコンが部屋の壁に並ぶだけで満足した。

そのうち私たちがパソコンに追い出されちゃうわね。

冴子は珍しく皮肉めいた言い方をした。

クローンはせいぜい三世までだからそんなに増えはしないさ。

秀生は意味不明なことを言った。

秀生は退院後一度も冴子を求めなかった。性欲が全く起こらなかつたのだ。秀生自身性欲の低下は、化学療法で使った抗ガン剤のせいだと思っていた。

冴子は二、三度自分から求めてきたことがあった。しか

し秀生が意外に冷淡で、行為をするような気配がないことを知ると、次第に求めなくなつていった。冴子の方でも化学療法の影響で秀生の性欲が低下したと思つたようだったし、自分から求める恥じらいもあつたようだ。

それでもときどき布団に入るとき、薄明かりの中でネグリジェに着替えるなどして秀生を挑発することはあつた。以前の秀生なら、仕事で疲れていても急速に性欲が起つたはずだが、今の秀生はそのまま背中を向けてしまった。そのつした夜、冴子は寝付けないのかいつまでも寝返りを繰り返した。

性欲が無くても自分のクローンは出来る。そう思う秀生はセックスへの興味をどんどん失つていった。

(七)

数山の治療計画は成功したら、いや実行できたら成功は間違いないものであつたが、陰のノーベル医学賞に相当するようなものに達しなかつた。噂は世界中でいろいろ出ていたが、公式には「人のクローン」づくりは各国の法律でもWHO憲章でも禁止されていた。

君のクローン人間ができたら、簡単に骨髄移植ができる。拒絶反応なんてないから何も免疫抑制剤を使わなくてもいいし、それによる感染症だつて起きる心配はない。

数山は二回目の面談のとき、治療計画の詳細について説明した。

骨髄移植が成功したら僕の慢性白血病は治る？

秀生は数山の話になかなかついていけなかつた。一般論としてはそれほど難しい話ではなかつたが、自分の病気の治療となると理解力は急に萎えた。

今でも七割方は骨髄移植で治るんだ。自分のクローンからの骨髄移植なら十割といえるよ。

それでも秀生が不安そうに考え込むのを見ると、数山はさらに分かりやすく説明した。

クローンの骨髄は君自身の骨髄さ。それで置き換えるということは、車で言えばパーツ交換のことなんだよ。車種の異なる車のパーツなら問題だけど、同じ車種からのパーツなら何も問題は起こらないんじゃないかい？

同じ車種からのパーツ？

秀生が怪訝な表情をすると、数山はにやりと笑つた。

少し例えが良くなかつたけど、要するにクローンの体のどの部分も君の体と同一なんだ。君の骨髄が不良になつたから、クローンからそれを移植する。これは究極の治療方法ということになるね。

数山の笑いは自信に満ちた。

人間生まれるとき、数人のクローンで生まれるとベストなんだ。将来いつでもお互いにパーツを提供しあえる。

口元の笑いがゆがんだ。それは秀生に少し不気味に感じられた。

数山は変わった。

ただね。大きな問題があることは事実さ。

アイデンティティーの問題、だろ？

秀生はしたり顔で言った。

アイデンティティ？

数山は少し怪訝な顔をした。

じゃ、なに？

秀生は首をひねった。

数山は無言で少し考え込んだ。

手技上の事？

それは易しい。

じゃ？

君たち、両親の問題なんだね。

そう言つと数山は急に真顔になった。

僕たち？

秀生には話が見えなかった。

秀生はパソコンのマザーボードに載せるCPUを換えてみた。そうすると外見やディスプレイに現れるプログラムは全く同じでも、速度が変わった。

デジタルカメラから取り込んだ画像の処理速度が格段に速くなり、文書ファイルもすぐに画面上で開いた。手持ちのCPUで一番遅いものをつけてみると、今度は画像も文書も開くの何倍もの時間を要した。

次に秀生は全て同じパーツで組み上げた二台のパソコンを並べ、電源を入れてからオペレーション・システムが画面上で完全に開くまでの時間をしらべた。

二台のパソコンとも同時にオペレーション・システムを

開いた。起動までの時間がかかることで有名なワープロソフトでも試してみた。二台とも同時にワープロを開いた。起動にかかる秒数は全く同じだった。

次に互いのパーツを入れ替えてみた。そして同じ事を繰り返した。結果は同一だった。

理論的に確かめるまでのないことであるのは秀生には分かっていった。しかし自分の感覚で確かめたかったのだ。

クローンかあ……。

秀生は嘆息まじりに感心した。

たしかにこいつらのパーツを互いに入れ替えても全く同じ結果になるはずだ。俺が配線さえ間違わなければ。

科学ってこういうものなんだ。理論が応用の場で確認できて初めて成功といえる。

これまで乳業メーカーの研究所で働いてきた秀生だって科学者の端くれに違いなかった。しかしこんな感動は味わったことはなかった。

秀生はさらにパソコンのクローン作りに夢中になっていた。

問題はね。出来たクローン、すなわち君たちの子供をどう扱うかなんだ。

秀生には数山の言っている意味がすぐには理解できなかった。

君と同一の人間が誕生してしまう。それは君の骨髄というパーツを提供するために誕生させるのだけど、その子

供も生きる権利がある。それも社会人としてね。

そういつて数山は曖昧な笑いを口元にうかべた。

秀生には話が見えなかった。

数山は秀生を見つめた。

骨髄移植は再発の兆候が見えたら出来るだけ早くにか、もしくは完全寛解中に行うのがベストのようなだね。となるとここ五年以内ということになる。五年以内というところクローンはせいぜい三歳か急いで四歳だ。

その年じゃ骨髄をとるのは無理かい？

ようやく秀生に話が見えた。

うん、そのクローンの命の問題なんだね。

命？

そう、君の単なる影武者としてこの世の中に誕生するならば、骨髄は十分とることができる。ただし影武者はその時点で消え去る。そうでなく、君たち夫婦の子供として存在するなら、それは殺すわけにはいかない。

数山の口元は微かにゆがんでから笑いにかわった。

秀生は結論を望んだ。数山には何か良い案があるはずだった。

君たちも我が子を殺すようなことは望みはしないはずだ。いや我が子というよりも君自身と言えるかも知れない。秀生は冷静さを装いながらうなずいた。数山の結論が欲しかった。

それでこれは僕の考えなんだけど、六ヶ月少し前で人工流産させ、そして胎児の骨髄や肝臓の細胞を保存してお

いたらいいんじゃないかと思うんだ。すこしばかり良心を削る必要はあるけどね。君たちも僕もだが。

数山はそう言っただけで軽く深呼吸をした。

秀生は怪訝な表情だった。胎児という言葉は予期してい

なかった。

胎児期の肝臓には造血細胞が多く含まれている。骨髄とほとんど同じと考えてもいい。

数山はそう言いながら机の上の分厚い医学書を手にして、

胎児の解剖図譜を開き肝臓を指で示した。

結構体の割に大きいだろう。

秀生はうなずいたが、実際のところ、それが大きいのか小さいのかは分からなかった。

でもね。大きいといつても胎児一つだけじゃ足りないんだ。すくなくとも三つは必要かなあ。

じゃ、三回はクローンを作る必要がある？

クローンを作るのは手技的には簡単さ。大変なのは奥さんだね。三回、クローン作りのために妊娠してもらう必要があるから。

秀生は安心したようにうなずいた。

この五年間に三回、冴子に妊娠してもらうことはわけないことだった。世間にはそのような夫婦はいくらでもいる。違いは肉体的結合によるものではなく、試験管内で培養し

た胎児だということだけだ。

(八)

秀生から話を聞いた冴子は、突然涙をながした。そして不満そうに言った。

なぜ私に同意なんて求めるの。あなたの病気を治せるのなら、私の骨髄だつて上げたい思いなのに。三回くらい妊娠を私が負担に感じると思う？

君がそう言ってくれて本当にうれしいよ。でも僕のために意味のない妊娠を三回もさせるのは、僕は不憫だ。

秀生は冴子の涙を見て、突然考えたことも無い言葉を吐いた。しかしそれは演技ではなかった。秀生の目頭も熱くなっていた。

意味のない妊娠とは思わないわ。第二のあなたのための妊娠よ。私が妊娠することによってあなたは蘇るわ。以前のように健康なあなたが誕生するんですもの。何回でも妊娠してあげるわ。

その晩秀生は蘇らないまま冴子を抱き続けたが、冴子はたいてい落胆した様子も見せず秀生の腕の中で眠りに入った。

秀生は自分の作ったパソコンに秀生一世、二世さらに冴子一世、二世などと名前をつけた。秀生の系統はIBM互換機で、冴子の系統はマックだった。両系統とも最高のスベックを持つ代まで進化していた。

秀生は休職期間の切れる最後の週には、CPUはそのまま

まで、マザーボードの方をいじって速度を上げる、クロックアップという高度の技術に挑戦しだしていた。CPUの速度性能はだいたい出荷時点で決まっているが、それでもこのクロックアップという手法で規定の速度以上にCPUが働くこともあった。要するにかける負荷量にそのCPUが耐えさえすれば速度はあがる。耐えなかつたらパソコンは動かないか、動いても途中でフリーズという状態、いつてみれば回路が発狂してしまうことになる。

世の中に出回っているパソコンの中でも最も高速なものに組み上げているから、さらに速度を上げる必要はないのだが、マニアともなるとCPUの速度競争に生き甲斐を感じるものだった。秀生はマニアではないが、なぜか夢中になつて挑戦した。

秀生三世は三割程度速度が増した。しかしインターネットから画像を落としたりしていると、ときどきフリーズしたり、オペレーション・システムが完全に立ち上がらないこともあった。でも三割増した速度はパーソナルコンピュータの世界では最高速といえた。

インターネットのホームページで秀生は報告しだした。世界最高速のパソコンの誕生にマニアたちはおどろいた。続々とメールが舞い込むようになった。

一方冴子三世の方は少しでも速度を上げようとするオペレーション・システムが起動途中で止まってしまった。

やはり女は難しいねえ。

秀生が笑いながらそう言つと、冴子は澄まし顔でこたえ

た。
それはマックがそういう機械ということと私のせいじゃないわよ。

でもねえ。何となくマックは女性的なんだ。

そうしたら名前を逆にしたらどうかしら。マックのほうを秀生三世にしたら成功するかもよ。

マックが僕かい。でもねえ、IBM互換機が僕のクローンとして進化してきているから、名前だけを突然変えても僕のクローンにはならないさ。

それならいいわよ。私のクローンは普通に動きさえすればいいんだから。

そういつて冴子は話をかわした。それ以上会話をつづけても、話の行方は冴子にとって興味のない次元を漂い出すのを知っているのだ。

秀生は出勤しました。

最初の日、研究所では夕方から秀生の全快祝いを会議室で開いてくれた。

同僚たちの秀生を見る目は完全に変わっていた。みんな異常に優しくかった。

口々に無理するなよ、と言った。以前秀生の視線を意識していた女の子たちも同情の目で秀生を見た。

所長は秀生の部署を情報処理係に変えていた。乳業分野の資料の整理が主な仕事だった。

内容は重要だけど肉体的には楽だからね。

所長はそう言つて柔和な笑いをうかべたが、仕事内容は誰でも出来るものだったし、窓際職員の内籍する場所としても知られていた。

俺は単なる無能な職員のクローンか……。

テーブルの上には、最近研究所で開発され出荷されたばかりという白ワインが並んでいたが、秀生の喉には辛みだけが残った。

(九)

十一月、数山の研究室で、密かに「秀生のクローン作成が着手された。秀生の体細胞から取り出された核が冴子の中味が空の卵子に移植され、そして試験管内でしばらく培養された。

数山の話では、学会でこそ公表はしてなかったが、こうしたクローン作りはこれまでも何回か行つていて、失敗の可能性はまずないと自信に満ちた表情で言った。

もっとも卵子が分裂しだして、胎児の形になる前には中止しているけどね。

そう言つて数山は笑つた。

試験管内で分裂したら、後はよく行われている試験管内ベビーと同じ作業だから問題はない。

不妊夫婦のための試験管内ベビーは毎月のように数山の所属する産婦人科で誕生していた。

これはあくまでも僕と君たち夫婦だけの秘密だからね。一ヶ月後には普通の試験管内ベビーと区別は出来なくなる

から、それからは君たち夫婦の試験管内ペビーとして教室内で公表する予定になっている。

秀生はうなずいた。秀生のクローンと分かったら、数山の医師生命は消えるはずだ。

君の奥さんは丈夫そうだし、子宮内に入れてからも良く育つと思うよ。ただねえ……。

そう言いながら数山は少し難しそうな顔つきをした。

六ヶ月で人工流産させるのは、冴子さんには気の毒な話だね。それが少し気になっている。

秀生は首を左右にゆっくりと振った。

仕方がないよ。僕のために生まれてくる僕自身のクローンだからね。僕という人間はこの世で一人でもいいんだ。

本当はもう少し単語を付け加えたかったが秀生はやめた。数山は怪訝な表情で秀生を見つめていたが、

まあ、いいか。君たち夫婦の問題だから、そこまでは関知しないことにする。六ヶ月後に決めればいいことさ。

と言うと軽く秀生の肩をたいた。

秀生は数山らしくない曖昧な会話に少し不満そうな表情をつかべた。

病気になる前は帰りが九時を過ぎていた秀生だったが、勤務を再開してからは六時過ぎには必ず家にいた。

資料整理だけの仕事だから、その気になったたら午前中にも終わっちゃっさ。

苦笑しそうに秀生は言った。

夕飯を終えると自室に籠もってパソコンをいじりだす。そんな毎日がつづいた。

以前と違って最近では、新しいパーツを買ってきて組み立てるといったことは希で、これまで組み立てたクローンを分解してしまい、そしてそれからパーツを各々変えて組み直すといった、言ってみればお遊びに近い行為に変わっていた。

これじゃ名前も付けられないんじゃないかと。

足の踏み場もない部屋をのぞきながら冴子が言うのと、名前は何とでもつけられるさ。でもこいつらは雑種だからね。雑種は強い。マックとIBM互換機の雑種を作ってみせるよ。もしできたら、秀生・冴子一世と呼ぶことにするね。でも雑種のクローンというのはどうなるのかなあ？

秀生はそう言いながら子供のように頬を紅潮させた。

私には良く分からないけど、新しくパーツを買わなくていいだけ、私は歓迎するわ。

呆れた表情で冴子は言った。

たしかに次々と新しいパソコンが増えていくとその置き場に困った。居間にも冴子二世が置かれている。冴子と

きどき料理関係のCDROMを見たりするのに使っているが、それだけの目的にはスペースを取りすぎていた。

冴子三世もそばに置いて二世との間をLANという方法で回線で結ぼうか、そうしたら三世のほうからも二世の中のファイルを見れるようになるからと、秀生は冴子には訳

の分からないことを言ったことがあるが、さすがに冴子は

反対した。言つままにしておくと家の中は本当にパソコンに占拠されてしまふ。

病気になる前、休日には二人で良く山登りやゴルフに出かけたが、退院してから秀生はまず外出することはなかった。冴子のほうでも秀生を残して町に買い物というのは気がひけるようであった。

もちろん秀生は、僕には構うことないんだ、とは言ってくれたが、冴子が家にいたほうが秀生の方でも楽しそうだったから、自然と休日は二人で家にいることが多くなった。一度冴子の母親が訪ねてきたとき秀生の部屋を見て驚いていたが、

病気もあるし、こんなことでもしていなければ気が晴れないのかも知れないねえ。

と冴子を慰めてくれた。

結婚当初は週末に二人でよく実家に顔をだしていたから、冴子の母親も内心心配していたようだ。

分別ある両親だったから、決して治るの？ とは聞かなかったが、親として覚悟はしているようだった。しかし諦めきれないはずだった。一人娘だ。それもまだ二十五歳の美人で評判の娘だ。近所では結婚したのをまだ知らない住人すらいて、見合いの話が持ち込まれることもあつたくらいだ。

これから何年か夫の闘病生活で娘がやつれ果てていくのを見るのは忍びないはずだった。

すでに両親とも孫は諦めていた。

(十)

十二月に入ったある日、冴子の子宮の中に「試験管内ベビー」が移植された。

産婦人科のカルテに詳細な内容が数山によって書き込まれた。夫、秀生との間の試験管内ベビーだ。秀生のクローンであるという証拠は、遺伝子を分析しない限りなかった。翌年一月末には冴子の体調が明らかに妊娠を物語り始めた。それを機に冴子は会社を辞めた。

秀生は反対したが、あなたのためよ、と言って冴子は譲らなかつた。冴子の考えには数山も同意したようだった。数山にしても初めての経験に近かつた。結果を公にできないとは分かつてはいても、数山も慎重に事を運びたいようだった。

秀生はそうした二人の気持ち嬉しかった。自分の病気が間違いなく治るような予感を覚えた。

間違いなくついたわ。

ある日、冴子はうれしそうに秀生に報告した。

やはりうまくいったんだ。

秀生も喜んだ。そして、

これで僕の病気が治るんだ。僕も冴子と同じように長生きできるんだ。

とため息混じりに冴子の腹をさわった。

秀生は数山との出会いに感謝していた。あとき数山が

「クローン」の話に参加してこなかったら、数山のことは思
いだしはしなかっただろうし、思い出したとしても相談に
はいかなかったはずだ。

数山との出会いで自分はアイデンティティを確立した
し、また成績も上がり国立大に入れたのだ。そして今度は
自分の不治の病を治してもらえ。

病気になる前には秀生は自信家だった。大学での成績は
いまいちではあったが、自分の力には十分自信を持ってい
た。もちろん部分的には二十九歳という若さからくるもの
ではあったかもしれないが、研究所内では自他共にエリー
トコースを歩んでいた。

しかし今、数山を知れば知るほど自分に対する自信は消
え失せていった。

あの高校三年生の冬、哲学書や文学書だけの日々が続き、
成績が上がっていった頃、自分はこれで数山と同じ部類の
人間になれたと確信していた。そうした自信はつい一年前
までは持続していた。しかし今はそうした自信は微塵もな
かった。

自信は消え失せたが代わりに喜びがいつも湧き出た。

俺は生き続けられる。少なくとも他の人間と同じよう
に生き続けられるのだ。

秀生はパソコンを分解しながら、自然にわき起こる喜び
を感じた。分解したパソコンのパーツを変えてまた組み立
てる。そしてスイッチを入れた瞬間にみながる緊張感。ディ
スプレーに現れるオペレーション・システムの表示する文

字群。最後にシステムが起動されたことを示す画面が表示
される。

やったー！

秀生はその度に声を部屋中に響かせた。

成功したの？

冴子も気を利かして顔をだす。

秀生・冴子二世の誕生だ。

子供っぽい笑い顔を浮かべて秀生は冴子に報告する。

二月も下旬に入った頃、冴子は秀生に内緒で実家に報告
した。もちろんクローンであることはいわなかった。実家
の両親の驚きは尋常ではなかったが、すぐにそれは心配に
変わった。

五体満足な子が産まれたらいいねえ。秀生さん、いろ
いろ薬を使っているんでしょっ？

大丈夫よ。病院でもそれは心配ないと言っているから。
そう言って冴子は嘘をついた。たしかにそれほどの心配
はないようだったが、「この子」にもし奇形などがあつたと
しても、それは問題にならない。それよりも自分の任務は
六ヶ月まで「この子」を育て上げることなのだ、と冴子は自
分に言い聞かせた。

両親にしてみたら別な心配もあつた。生まれてくる赤ん
坊の父親が将来も生きている保証はなかった。数年先には
いない可能性もあるのだ。しかし冴子との間でそれを口に

することは出来なかった。

(十一)

胎児は順調に育った。数山は自信をさらに深めたようだった。

もう五ヶ月です。ふつ々の赤ちゃんよりも大きい。エコーで胎児を観察しながら数山は説明した。

元気だねえ。結構動いている。

良く動くのが分かるんです。あ、また騒いでいるわ、なんて。

冴子は突き出た白い腹部を数山に晒しながら、少し頬を赤めた。

あと一ヶ月ですねえ。

そう言いながら数山は微笑みをうかべた。

ええ、早いものです。

大変でしたねえ。

いえ、これが私の務めですもの。

寂しそうな笑いが冴子の目元にかかんだ。

産婦人科医の僕としては、本心は冴子さんに生ませて

あげたい気持ちです。秀生君の病状も安定しているようだし……ふつとそんな誘惑に駆られてしまいそうになりま

すよ。自分でも危険だと感じます。

数山は冴子の白い腹部に手を乗せたまま言った。

冴子は無言だった。

でもそれは禁句ですねえ。今の社会で許されることで

もないし、秀生君の期待を裏切ることにもなるし……。でも実感としては秀生君の二世をこの目で見たいという思いもあるし……。……秀生君と同一な子供ってどんなのかなあ。大きくなると彼と同じだなんて、自分でも想像つかないですねえ。

数山は呟くようにそう言って、壁の方に顔を向けた冴子の横顔を見つめた。

数山の手の下の冴子の白い肌が、急に赤みを帯びてきた。

秀生の病状は完全に落ち着いていた。体力も以前と同じくらい回復していた。ただ動かなくなった分、体重が五キロ増えて、面長の顔が丸みを帯びていた。

今はかなりいい薬が使えますから、まず簡単には再発はしませんよ。

主治医の内科講師は約束するような口調で言った。

でもいつかは急性転化という形で再発するんですね。

早ければいつ頃でしょう？

秀生は先を気にした。

講師は笑いながら、

せつかちですねえ。数年は大丈夫ですよ。万が一再発しても手だてはあります。そんなに神経質にならない方がいいですね。

と自信に満ちた言葉で言った。

冴子が妊娠六ヶ月に入る直前に、ある種のホルモン剤を

服用して流産をうながし、そして緊急人工流産にもついで予定になつて来た。

それが来週に迫つたある日の夕方、秀生が帰宅してみると冴子は布団に入つていた。

どうした？ 具合でも悪い？

秀生は顔色を変えた。本当に今流産でもされたら大変だつた。

いや、少し考え事をしてたの。

そう言つて冴子は起きあがるつとした。顔色が悪かった。

やはり具合が悪いんじゃない？ 寝ていた方がいいよ。

秀生はそう言いながら冴子の肩をささえた。

いやよ。寝ていたくないわ。

そんなこと言わないで。夕食は僕がつくるから。僕の

クローンを大事にしてくれよ。

秀生はクローンという言葉を強調した。冴子の肩を支えながら布団に寝かせた。

そのとき冴子が顔を背けて突然泣き出した。

どうしたんだい？

秀生はあわてた。妊娠中に情動不安定になることがある

ことは聞いている。

そのあなたの子が動くのよ……。

冴子は口を押さえた。嗚咽がもれた。

動く？

秀生には良く分からなかった。

それは辛いだらうなあ。

男には理解できない感覚だ。腹の中で胎児が動き回る。そして自分の腹を蹴る。食べあわせが悪くて下痢するだけでも辛いというのに、想像を越える辛さなのだろうか。

しかし秀生にはどうしてやることも出来ない。

寝ていればいいよ。食事は僕が作る。あと一週間の辛抱さ。

そう言つて秀生は立ち上がった。

食事の支度は最近したことはなかったが、学生時代にワ

ンダーフォーゲルクラブに入つていたせいとか、それほど苦

になる作業ではなかった。クラブのキャンプでよく作った

チャンコでも作るうと思つた。鍋に色々入れて、そこに残つ

ている飯を入れるのだ。だしの取り方に工夫がいる。

秀生は冷蔵庫の中を調べた。

いいわよ。私がするから。

冴子がそう言いながら入つてきた。眼が腫れたままだ。

大丈夫？

秀生は少しあわてた。

もう落ち着いたから。

冴子はそう言つて流し台の前に立つた。

(十一)

冴子が子供を産みたいのだ、と秀生が気づいたのは翌朝

のことだった。

秀生が目覚めて居間に入ると台所の方から冴子の声が聞

こえた。

生まれていのよね。そんなに騒がなくてもいいのよ。分かってるんだから。あなたのパパに頼んであげるから、もう少しがまんしててね。

独り言のように聞こえた。しかしすぐに腹の中の胎児に話していることが分かった。

あなたはパパとそっくりよね。パパが赤ちゃんだったときと同じよね。

秀生は自分の部屋に行った。冴子の独り言を聞いていたことを知られなくなかった。

生みたいなんて、どうかしてる。秀生は頭に血が上っていた。冴子を怒鳴りつけない気持ちだった。しかし今、冴子の情動を刺激しても良い結果にならないのは分かっていた。もし冴子が謀反を起こして人工流産に同意しなければ万事休すだった。

俺のクローンを人質にしているようなものだ。

秀生は血が上った頭を冷やそうと作りかけのパソコンの裏蓋を外しにかかった。

雑種世代の秀生一冴子四世になるものだ。

ねじがうまくドライバーと噛み合わない。ドライバーが大きすぎる。工具箱に手を伸ばして小さめのドライバーを手にとった。

そのとき秀生の脳裏に透明な陰がはしった。

秀生は傍らの秀生二世に目をむけた。ケースは違うが秀生一世の完全なるクローンだ。

メインとして使っているのは秀生一世だった。秀生二世

はケースをデザインが凝ったものにしていた。

秀生は二世に手をかけた。

やはりケースはオーソドックスなものがいいか。その方が結局は使う気になる。

秀生はそんな独り言をつぶやきながら、思索した。

本体が同じでも飽きがくるとケースを変えることも多い。しかし使わないで眺めているだけならそれでも良かったが、始終使うとなるといつも見慣れているデザインのパソコンのスイッチを入れてしまふ。だから自然と一世がメインマシンとなり、その後のクローンは予備のマシンとなるのだ。

これじゃ厳密な意味でのクローンとはいえないか……。そして無性にケースを一世と同じ物に戻したくなった。

一世の完全なクローンなら、一世、二世、どちらのスイッチを入れても構わないか。そのときスイッチを入れやすい方のスイッチを押せばいいだけだ。

秀生は言葉を意識的に唱えた。

秀生は冴子に子供を産ませることにした。

自分と同一の心身を持ったクローンの姿を見なくなることもあるが、もしかしたら自分がそのクローンに乗り移れるのではないかといった、漠然とした思いが起こったからだ。アイデンティティーが同一なら自分はそのクローン自身でもあるのだ。

万が一、そのクローンが単なる自分の子供に過ぎない

ことが分かったとしても、自分の骨髓提供となるクローン
はすぐ作れるし、また時間的にも十分間に合いそうだった。

冴子もそれは約束してくれたし、また数山も内科の主治
医に相談して、まだ数年以上は再発の心配がないことを保
証してくれた。

三年は大丈夫だよ。もしその前に再発しても何とか化
学療法で乗り切れるといってくれた。だから時間的には最
低五年は大丈夫といえるね。

数山も冴子の人工流産は避けたかったようだ。クローン
を生ませると決まってから、冴子以上に明るい表情を数山
は秀生に見せるようになっていた。

(十二)

秀生二世はたしかに秀生に瓜二つの男の子だった。

あんたそっくりねえ。

病室に見舞いにやってきた秀生の母はそう言ったが、秀
生にしてみたら生まれたばかりの赤ん坊はどれも同じよう
に見えた。

いびつな頭に真っ赤な顔、目を覚ますと小さな口を広げ
て泣いてばかりいる。

しかし秀生は長時間二世の顔をみることは出来なかった。
何か二世の中に吸い込まれていくような恐怖感をおぼえた
のだ。

二世は秀と名付けられた。それは冴子の発案だった。秀
生は特に意義を唱えなかったが、冴子や母親たちが、ヒデ

ちゃんと呼ぶのを聞いてみると、ますます二世に同化しそ
うな自分を感じた。

病室にきた数山は意味深な微笑みをうかべた。秀生の方
も少し照れたような曖昧な笑いを返した。

一方、冴子の方は屈託がなかった。

ねえ、この目のあたりヒデさんにそっくりでしょう？
などと目を細めながら言っつては、慌てたように口を押さ
えた。

このようなひょうきんさは以前の冴子には見られなかつ
た。

そっくりでなければねえ。

数山はおかしそうに口元に微笑みをうかべながら秀生に
同意を求めた。

秀生はやはり曖昧な笑いを返した。どう返事をすれば良
いのか分からなかったのだ。

早くパパのように大きくなってねえ。

冴子は赤ん坊の頭を撫でながらつぶやいた。

冴子を見つめる秀生には、ガウンの胸元から見える冴子
の白い肌が妙に生々しく感じられた。

自宅に戻ってから冴子は妙にひょうきんだった。なに
かといえば、ヒデちゃん、ヒデちゃんと呼んだ。ちゃん
が良く聞き取れないとき、秀生が顔をだすこともあった。

あら、ごめんなさい。ヒデちゃんだったの。おっぱい
を上げるとこ。ヒデちゃん、ヒデさんが顔をだしたわ。あ
なたのパパよ。

ヒデちゃんは冴子にとってあくまでも自分の産んだ赤ん坊だった。たしかにそれは間違いとはいえなかったが、秀生にとっては冴子の腹を借りた自分だけの子供、正確には自分の化身なのだ。いやクローンなのだった。

そのうち秀生の内部では次第に不満が燦りはじめた。何に対してというわけでは無く、漠然とした不満だった。

冴子は秀生二世の世話に忙しいこともあって、秀生のそうした不満に気づく気配はなかった。

冴子は以前、決して秀生よりも先に床に入ることにはなかったが、九時の授乳時間に秀生二世と床に入るとそのまま眠ってしまうことが多くなった。

秀生は相変わらずパソコンをいじり続けていたが、最近ではクローン作りは止め、コンピュータミュージック用の音源機器を取り付けて電子音楽の世界にのめり込んでいた。

ある晩、燦る不満は頂点に達した。いつものように冴子は秀生二世と寝てしまっていた。

無機質な電子音を聞いているうちに秀生は突然何かを破りたくなった。意味もなかった。

秀生は寝室に入った。

冴子の脇に眠っている秀生二世を乱暴に抱くと隣の自分の布団にうつした。二世は突然泣き出した。

気がついた冴子は驚いた表情で起きあがるうとした。

秀生は無言で冴子の布団をはぐった。そのまま冴子を押し倒した。

どうしたのよ？

冴子は秀生を押しつけようとした。

秀生は無言のまま冴子の胸元を押し広げ、白い乳房の間に顔をうずめた。

冴子は抵抗を止めて秀生を受け入れた。

やさしくして、おねがい。

冴子はささやいた。

秀生は冴子の乳房をくわえた。そして激しく吸った。

いたい！

冴子は金切り声を上げた。

秀生はもう片方の乳房を吸った。そして歯をたてた。

いたい……。

ふたたび冴子は悲鳴を上げたが、その言葉の最後に余韻が残った。ヒデちゃん……。

秀生は荒々しく冴子の下半身をむき出しにした。そして自分自身を押しつけていった。

秀生は部屋にもどった。不満は消えていたが、動こうとするエネルギーはどこにもなかった。

パソコンのディスプレイでスクリーンセーバーが立体的文字で時刻を示しながら踊っていた。11:13:23、11:13:24、11:13:25……。

それが冴子との別れだった。

あるとき冴子は笑ったように見えた。そしてつぶやいたように思えた。

ヒデさん、やっぱりだめじゃない。

秀生一世は絶望した。

(十四)

秀生二世はたしかに秀生と瓜二つだった。でもそれは誰も不思議には思わなかった。秀生の子供なのだから当然だと思つたよつだ。

パパ似ね。

パパの小さい頃とそっくりよ。

でも鼻のところは少しママ似ね。

などと世間一般で良く交わす会話に過ぎなかった。

しかし二世の性格は秀生と全く違つていた。全てに積極的だった。幼稚園、小学校と集団の中でいつもリーダーシップをとつた。

冴子は秀生二世と連れだつて歩いた。買い物も、二世の塾やサッカークラブへも車で送り迎えした。

二世は小学校五年生になると背丈が冴子を越した。二人で並んで歩いていると姉弟に見られることもあった。冴子は三十七才になっていたが、まだ二十代にしか見えなかった。半袖のブラウスにミニスカートで、ジーパン、Ｔシャツ姿の二世と歩いていると、誰も親子とは思わなかった。

秀生の慢性骨髄性白血病は再発の兆候が全くなかった。

秀生は自分のクローンからの骨髄移植は諦めていた。諦めたというよりも、秀生二世が育つにつれてそういう意志が消えさつていったのだ。

冴子の方も二世との生活に追われているせいか、秀生の病気のことは完全に忘れてるように見えた。一日一回飲む薬も以前は冴子が管理してくれていたが、いつしか秀生が自分で管理するようになっていた。冴子の方から、薬は飲んだの？ と昔のように尋ねることはなかった。

一方化学療法の進歩も著しく、いろいろな抗ガン剤が開発され続け、秀生も何回か薬を変えた。

十年たった頃、新しく開発された薬を二年間使つた。その服用が終わつてから、精密検査の結果を見た主治医が言つた。

もう大丈夫でしょう。再発は考えなくてもいいですよ。にこやかな表情だった。そして秀生のカルテの最後に治癒と書き込んだ。

秀生は完全に同居人になっていた。

冴子は秀生の身の回りの世話以前通り行つてくれたが、二人の間での会話は無機能的なものでしかなかった。家庭における会話の中心は秀生二世だった。秀生は黙つて二世の話に耳を傾けるだけだった。

耳を傾けなくても秀生には二世が考えていることや、言いたいことが分かつていた。

パパはどう思う？

パパからも何か言つてあげて。

冴子はときどき秀生の意見を求めることもあった。しかし秀生はその必要がないことを知つていた。二世の

中にあるものはすでに秀生の中にあつた。

秀生が言うことに二世がどう反応するかはすでに分かっていたし、つぎに二世がどう言つかということも分かつた。

だから秀生はいつも言った。

ヒデが好きなようにやっていいんだ。

パパからとくに言うことはないなあ。

秀生がそう言うると二世は嬉しそうに自信に満ちた表情でうなずいた。そうした光景に冴子も満足した。

秀生はパソコンの世界に籠もり続けた。幸いなことにパソコンは相変わらず進化し続けていた。哺乳動物が進化の歴史を続け、最後にホモ・サピエンスに至つたように、いつかは人間と同等の知能を持つパソコンに進化していくかのようにだ。

秀生はそう思っていた。それは論理ではなく感覚の次元だ。

秀生はパソコンのマザーボードをいじれるようになっていた。電子工学用の小さな半田小手や拡大鏡、そして実体顕微鏡も机の上にあつた。市販のどんなパソコンよりも速いパソコンをいつも自作した。

秀生は作ったパソコンの性能を、絶えずインターネット上のマニアの集まるホームページで公表した。

いつしかマニアの世界で「ヒデ」というハンドルネームは有名になっていた。

ホームページではみんなヒデの意見を聞いてきた。自作

パソコンがうまく動かないときにはヒデに質問が殺到した。パソコンメーカーの方でも密かにホームページを見て、ヒデの書き込みを参考にしているようだった。

秀生の性欲は治療が終了してから徐々に回復する兆しにあつた。死への恐怖が無くなつたからなのか、それとも使つていた薬の影響が取れたからなのか定かではなかつたが、冴子の腰や胸を見ていると自分自身が疼き出すのが分かつた。しかしなぜか冴子を求めようという気持ちは湧かなかつた。すでに夫婦関係が途絶えて十数年は経つていた。冴子の方でもとうの昔から秀生を性欲の対象とは見ていなかったから、女としては無防備な態度をとつていた。

秀生の側で着替えも平気でしたし、バスタオル一枚で風呂場から寝室に向かうこともあつた。そうした冴子を見て秀生が少しづつ発情するようになったのに冴子は全く気づいてはいなかつた。

(十五)

秀生二世は中学三年になるともう立派な大人の体になつていた。

秀生の母親は、本当に秀生の小さい頃にそっくりだね、と会うごとにため息をついた。しかし幸いなことに、四十五才になつた秀生はどう見ても五十代にしか見えなく、そして十キロも増えた体重のせいで、細身の顔やウエストは丸みを帯び、全く昔の面影がなかつた。

誰ももはや秀生二世と秀生を対比して見ることはなくなっていた。というよりも家族で並んでいても視線は秀生に向けられることはなく、秀生二世に集中するのだった。

冴子は秀生二世が自慢だった。長身でややエキゾチックな風貌と活動的な身のこなし、そして成績優秀となると、母親だけでなく、世の中の女はみんな憧れるはずだった。それが我が子としてか、異性としてか、見る目は別としても。

秀生は冴子が二世の性欲を受け入れていることを知っていた。二世が夏休みに入って間もなくの頃からだった。それは自然の成り行きのように行われ始めていた。秀生は別に憤りなんて感じなかった。感じない自分を異常とも思わなかった。

冴子が夜に二世の部屋に静かに入っていたとき、秀生は性欲が沸き起こった。そしてそれを自分で処理した。侘びしいとは思わなかった。

冴子と秀生二世は秀生の前では仲の良い親子だった。ひょうきんな冴子と理屈っぽい秀生二世との会話は楽しい団らんの間を作った。

冴子は秀生二世に合わせるかのように若返っていた。四十二才になっていたが、装いによつては十才は若く見えた。外を秀生二世と仲の良い姉妹のように歩いた。

一年もすると、冴子が夜中に二世の部屋に入っていく気配を感じると、秀生は自分自身が冴子に侵入していく感覚が起きてくるようになっていた。

冴子が大胆に、そして恥ずかしそつに、ヒデさんと小声で声を放ちながら体を動かすのが分かるようになっていた。

秀生はパソコンマニアの世界で完全にリーダーシップをとりだした。秀生を取り巻くマニア集団はパソコンメーカーに恐れられた。メーカーが出荷するパソコンの評価は秀生の採点で決まった。秀生が欠点を暴くとそのパソコンは売れなかった。

メーカーは秀生を懐柔しようとした。しかし秀生はインターネットの世界から決して外に出なかった。だから取り巻くマニアたちもホームページや電子メールを介してしか秀生と接触出来なかった。

メーカーの開発部の人間が電子メールで会いたいといってきた。秀生はメールでしか反応しなかった。ハンドルネーム、"ヒデ"はパソコンのディスプレイの上には存在しなかったから、誰もそれ以上の接近は不可能だった。

職場では相変わらず情報処理係長として、若い女の子一人と九時から五時まで真面目に仕事を続けていた。研究員に頼まれたら即座に必要なデータをパソコンから取り出した。若い研究員の間では、"ヒデコン"とあだ名がついていた。情報が欲しいときは、

ヒデコンに頼んだら？

が合言葉のようになっていた。

そして"ヒデコン"は入社同期の仲間よりも十年遅れで

課長に昇格した。

秀生二世は大学に入った。秀生の母校だったが医学部だった。冴子は狂ったように喜んだ。それは秀生が課長に昇格したとき以上の喜びようだった。

秀生は大して関心をしめさなかった。二人に報告を受け、三人で祝いのテーブルについただけだった。

簡単に食事を済ませると、秀生はワインで陽気に騒ぐ二人を残して自室に入り、いつものようにインターネットの世界に入ってしまった。数多くの質問のメールが「ヒデ」に届いている。それに答えていくだけで二時間はかかる仕事だった。

いつもよりも早い時間に、二階の二世の部屋から冴子の嗚咽が漏れだしてきた。

全ては自然に振る舞われていた。昔から続いている当たり前の行為のように。

秀生は自分自身を握りしめ、冴子に入っていこうとした。しかしすでに迸るエネルギーは枯渇していた。

(エピローグ)

秀は医学部を首席で卒業した。

数山の強い勧めで数山が教授を務める産婦人科学教室に入った。

しかし、その夏に秀は慢性骨髄性白血病を発症した。欠

陥遺伝子をコピーしているクローンの宿命だった。秀生二世の骨髄も欠陥パーツでしかなかったのだ。

話を聞いた冴子は秀のクローンを作りたいとはもはや言わなかった。化学療法で何とか治して欲しいと数山に懇願した。しかし、それはすでに遺伝子治療で治癒が可能な時代になっていた。

秀は順調に産婦人科医として成長してゆき、卒業三年後には異例の早さで助手に昇格した。礼の挨拶に出向いた冴子に数山は、自分の子供のようなものですからねえ、と意味深な微笑みを浮かべながら言った。

その翌年、秀はアメリカに留学したが、その直後から秀生は数年前から続いていた原因不明の慢性胃腸病でやつれ果て、完全に食欲が絶えてしまい、冴子と数山の見守る中で老衰のように死んでいった。

野崎秀生五十七才の寿命だった。

四十九日を済ませた後、冴子はアメリカに発った。

その年の冬に数山の論文は世界的医学雑誌に掲載された。それは仮説をもとに展開された総説だったが、世界の研究者の注目を浴びた。

人間のクローンが誕生した場合、身体的に同一のコピーであるばかりか精神的にも同一のコピーとして存在する。コピー同士が共に生活を続けた場合、クローンの親元の精神寿命が短くなるという仮説だった。誕生クローンにアイデンティティーが同化してゆくために精神的消耗が著しく

なるという考えだった。そのよつな仮説に従って数山は、クローン同士を一緒に飼育した場合、アイデンティティーが競合して、クローン全体の寿命は短くなる、と予測した。

多くのクローン動物で原因不明の病気が報告されていたが、世界の研究者たちは数山の論文で研究の方向性を見いだしたようだった。しかしクローン動物を大量に増やしても一緒に飼育出来ないとなると、クローン動物存在の意義も変わってゆく可能性があった。

数山はその論文で翌年日本医学会賞を受賞した。(了)

医学的背景は作者の創作によるものであり、科学的事実を元にはしていないことを付記する。

執筆者紹介

編集部

寺沢京子
てらさわきょうこ

詩人・神戸大学大学院総合人間科学研究科

関西詩人協会会員

既刊詩集『在る』
「新世紀」賛助会員

ながい

永井ますみ

日本詩人クラブ・関西詩人協会・兵庫県現代詩人会などの会員

既刊詩集『はなさか』『時の本棚』『うたつて』他

「新世紀」賛助会員

なかのたけしこ

中野武彦

日本文藝家協会会員、新日本文学会会員

「新世紀」賛助会員

なかでますみ

中出真澄

元毎日新聞経済部編集委員

「新世紀」賛助会員

となきまさる

渡名喜彦

「新世紀」賛助会員

きたひろし

喜多博

「新世紀」同人

すぎやまたけこ

杉山武子

農民文学賞受賞、作家・エッセイスト
「新世紀」同人

キムハクレヨン

金学鉉

桃山学院大学、中央大学教授を経て退官

著書『荒野に呼ぶ声』、日本の古典芸能、歌舞伎、能楽、文楽、

人形浄瑠璃を韓国で出版。平凡社の「世界大百科事典」の執筆、

共著、翻訳書多数。

「新世紀」同人

ふじいよういち

藤井陽一

日本大学理工学部電子情報工学科 教授

東京大学名誉教授

ニフティ短歌フォーラムシスオベ
「新世紀」同人

外岡立人

小樽市保健所長 医学博士

北海道文学賞・さきがけ文学賞受賞

「新世紀」同人

ひらかわけいじ

平川敬二

医療法人愛成会理事長

「新世紀」賛助会員

私のパソコン通信暮らしは平成元年からである。「ご存知のようにこの世界の文章のほとんどは横組。読書好きな私としては当初より不満であった。人様の文章を情報として読むだけであるなら、横組であってもさして不都合はない。走り読みしながら情報箇所のみ注視すればいいのだから。

しかし横組が本来の読書の愉しみと繋がってくるかといえば、はなはだ味気ない。なによりも味気ないのは読んでいるあいだはモニターに拘束される。学者の本読みはどうかしらないが、一般人の読書の愉しみは学習でなく、くつろぎの世界。人様によって異なるが、読書にはくつろぐ姿勢が要る。これを実現していかないのが今日のパソコン通信、インターネットワールド。

さらに不満なのは子ども頃から教科書、洋書以外は、新聞、単行本、文庫本のほとんどを縦組で読み、縦組で読む感覚を刷り込まれているのにもかかわらず、横組文章を読まされる苦痛。十数行のメールであれば辛抱もできるが、評論などの長文を横組で読むのは火焰地獄で青鬼、赤鬼に追い立てられている心境。だからサイトの論文などはほとんど読まない。

ホームページの開設者は国内だけで老若男女を問わず、どれほどの人数だろうか。私はこのうちの一つも常時訪問することはない。調べ物があり、検索したときにかかっ

てくるサイトはそのときだけ訪問し走り読みするが、調べ事を完了するともう同じサイトを訪れることはない。

サイトはコミュニケーションの場、自己主張、PRの場。はたしてそうだろうか。たとえば私のサイトをマスコミ関係者はどれほど知っているか。私が昵懇にしている人たちがたまに訪れてくれる程度。それも別に挨拶して立ち去るわけではないからさっぱりとわからない。

一部では掲示板、メールでのコミュニケーションが行われているし、書いたものを頻繁に読んで貰えるサイトもあるが、これもなにかしら一部のひと達だけの閉鎖的交流に留まっているような気がする。書いた物を丁寧に読まれているのかどうかも怪しい。自己満足の域ではないだろうか。

私も文藝サイトを開設している。作品は文学賞応募向けに創作しているので、選考委員以外にとくに読んで貰う必要はない。公開すれば応募規定に引つ掛かる。そこで作品にパスワードをかけている。私のサイトは私にとつては書庫にすぎない。銀行の貸金庫に原稿は預けていると言った直木賞候補作家の話聞いたことがあるが、サイトは貸金庫よりはとつと使い勝手はよい。

インターネットの普及も紙の本の将来はどうなるか、という議論もある。インターネット普及以前に比べると新聞、書籍の購読は、少子化社会と相まって落ち込んでいく。紙の新聞を読まなくても見だし程度の記事なら各新聞社サイト巡りをすれば、ショートショートの情報も読める。若者の新聞、書籍離れは加速するかも知れない。

こんなことを思索しながら、一方で今日の国内外のきな臭い動向が気にかかり、インターネットを通じての人との繋がりを構築していけないかという試みをした。趣旨は次のようなことだ。

今日の改憲、皇国史観を基調とした歴史教科書改訂、有事法制化の策動を見るにつけ、自・公主導の政治体制に危機感を覚える。世界に通用する民主的政治体制を構築するには党派性を超えた革新的正義、状況を憂慮する宗教的良心、良識保守の連帯以外にない。

このことをインターネットを通じて呼びかけた。不特定多数にというわけにもいかない。ほぼ思いを等しくする人を探さなければならなかったが、意外と反応と反響があり、このことから「新世紀」発刊にこぎつけた。

筆力のある書き手や善意の賛同者に恵まれた。私もそうだが執筆同人にとつては半ばボランティア。発刊部数の三分の一はマスコミ、出版社への寄贈。経費は同人の肩にかかる。幸い印刷・製本を引き受けて貰った中西印刷さんが儲けなしの見積もりで協力してくれた。今後も赤字、黒字のラインで発行継続したい。読者の皆様のご支援、ご協力をお願いしたい。やはり最後にものをいうのは紙ではないか。

サイト開設執筆者

杉山武子 <http://www5a.biglobe.ne.jp/~takeko/>
藤井陽一 <http://village.infoweb.ne.jp/~fwga5656/>
外岡立人 <http://homepage3.nifty.com/sank/>
寺沢京子 <http://www.portnet.ne.jp/~kyoko/>
永井ますみ <http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Miyuki/5402/>
平川敬二 <http://member.nifty.ne.jp/hira~hira/>
中野武彦 <http://homepage1.nifty.com/takehiko-Nakano/>
中出真澄 <http://www.nakade.org/>
渡名喜彦 <http://www.h5.dion.ne.jp/hiko/>
喜多博 <http://members.aol.com/ainaoko/homepage/>
箱崎誠 <http://plaza11.mbn.or.jp/~enpitsuga/> 装画

季刊 新世紀秋季 3号

二 一 年 十 二 月 十 日 發 行

發行人 片倉啓文
新世紀出版会

製印 電話(0799)5311377
本刷 中西印刷株式会社
〒65610501
兵庫県三原郡南淡町福良甲153011406